

666
66



2

0039027-000

666-66

融和問題叢書

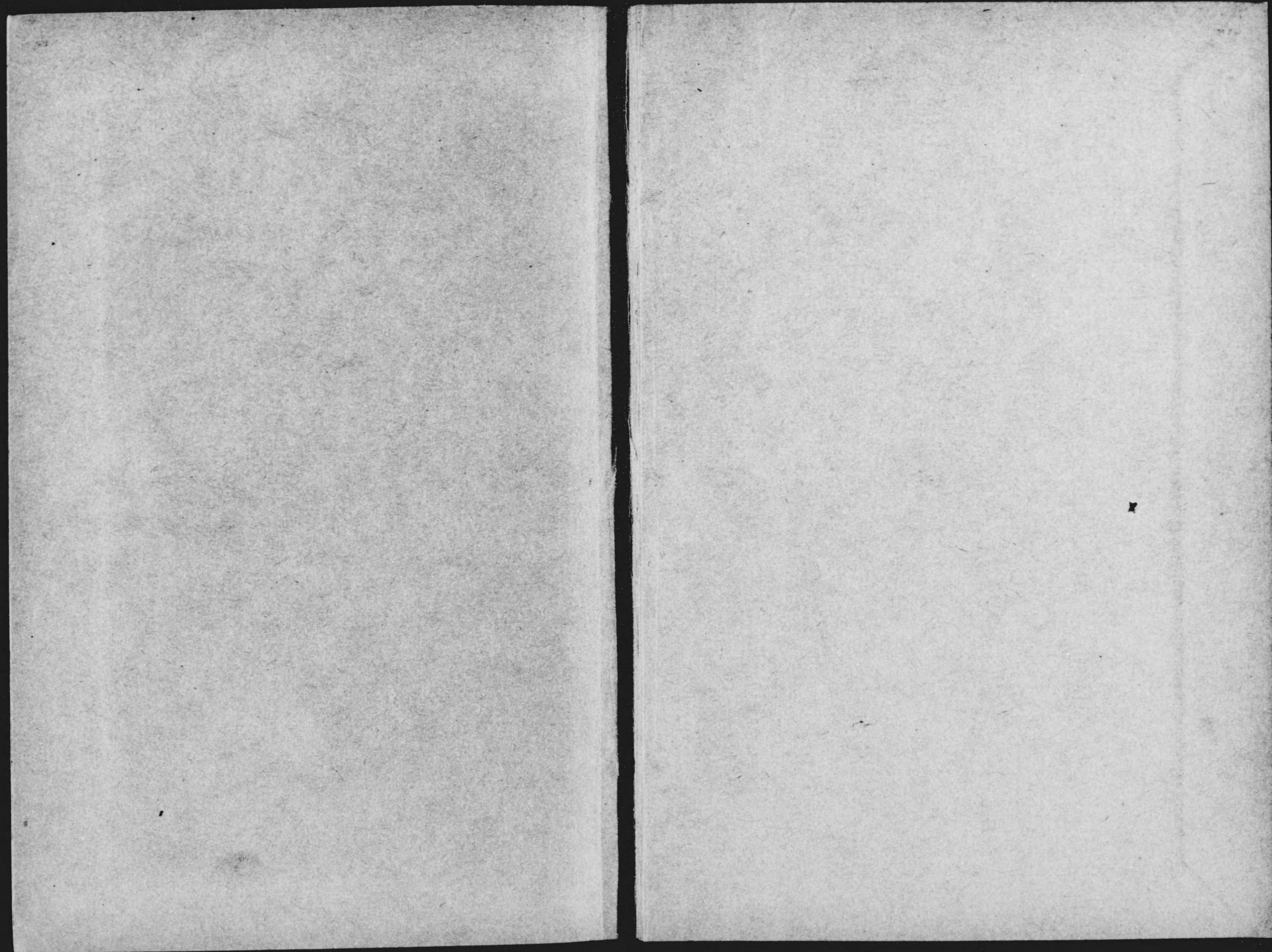
中央融和事業協会

第8編

昭和10

AGH

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので



融和問題叢書

第八編

小學學校於其
融和教育

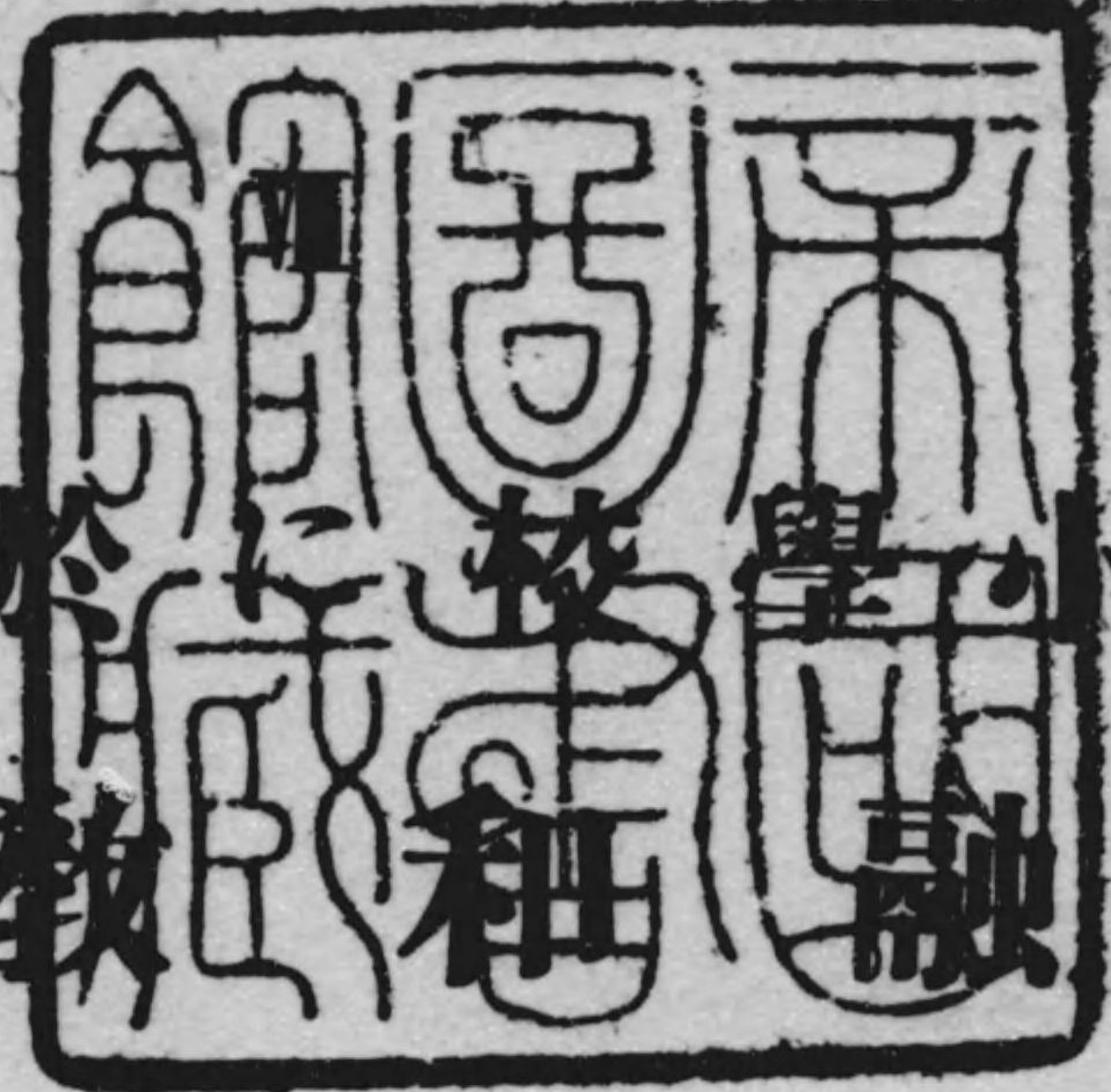
土屋政一

財團法人

中央融和事業協會

融和問題叢書

小學校教
育
於此
融和



土屋政一

發行所寄贈本



中央
財政
法
人
業
協
會



序 言

融和問題の解決に資べき方途は勿論多岐にわたるものもあるも、要は社會一般の因襲に基く差別的偏見を根絶すると共に、部落の社會的地位の向上を圖り以て國民融和の實を擧ぐるにある。而して差別的偏見を打破し、部落の社會的自覺を喚起するには教育教化の力に俟つべきものが極めて大なるものあるは謂ふまでもないことである。

この融和問題解決の方途としての教育的方策の重要性に就ては融和運動の初期より着目されてゐたのであるが、然しながらこれに關しての具體的輿論が起つたのは最近のことである。

今その沿革を顧るに、昭和二年第五十二議會に於て「部落問題の國策確立に關する建議案」に就て清瀬一郎氏が、「融和問題解決の根本は國民に平等思想、人道主義の思想を浸潤徹底せしむるにある」と提言して國民教育と融和問題に關して文部當局と討議した。一方政府に於ては同じく昭和二年社會事業調査會に融和促進に關する施設要綱を諮問し、これが答申の中に教育施設に關して擧ぐるところがあつた。

而して我が中央融和事業協會に於ては昭和三年以來府縣の師範學校に講師を派遣して融和思想の普

及に努め、更に昭和四年度に於て小學教科書改訂に際し改訂追加を要すべき徳目に就て研究し、昭和五年度の全國融和事業協議會に於て青少年並婦人に對し融和觀念を普及せしむる具體的方策の大綱を決定し、昭和六年東京に開催せる第二回全國融和團體聯合大會に於ては、文部大臣の諮問にかゝる「融和事業の振興に關し教育上留意すべき事項如何」に對しても答申をなし、且つその實行を促す等教育關係に夫々呼びかゝるところがあつた。

斯くて、文部當局に於ても融和問題の解決上教育的方策の重大なるに鑑み、昭和七年十月三十日地方長官、直轄學校長、公私立高等専門學校長、公私立大學長等に「國民融和に關する依命通牒」(第一章第六節參照)を發せられ、一方地方廳及び地方融和團體に於ては或は教育者中心の講習會、研究會等を開催し、又地方によりては教育者自ら融和教育研究機關を組織するものあるに至り、教育上融和問題を考慮するの機運は頓に勃興するに至つたのである。こゝに於て本協會に於ては昭和八年十一月「融和教育調査委員會」を設置し、融和教育の體系及びその具體的方策を審議決定したのである。

(附錄參照)

本書は右の調査會に於て決定せる「融和事業に關する教育的方策要綱」に概ね準據し、これが融和教育の最も基調たる小學校に於て實施すべき融和教育に對する考察並にその具體的方策を擧げ、且つ地方に於て實施しつゝある實際施設をも酌的に編述したものである。

凡 例

- 一、本協會に於て融和教育に關する資料刊行のことは疾くより企圖してゐたのであるが、こゝに漸く斯道關係者におくることゝなつた。本教育發展の上に裨益するところあらば幸である。
- 一、本書は小學校に於ける融和教育の實施にあたり、主としてこれが基調となるべき各種教育事項の融和問題との關聯する事項に對する考察に重きを置き、教授の細目については深く述ぶところが少なかつた。このことは紙數その他の都合にもよることではあるが、尙本教育實施上特に叙上の點を強調したき著者の意圖のあつたことを諒とせられたい。
- 一、随つてこれが教授の實施にあたり細目となるべき事項については、教育擔當者自身に於て適宜研究製せられんことを希望する。
- 一、本書に於て取扱ひし小學修身書は卷二、國語讀本は卷五までは改訂せられたもので、同卷六はこれを缺いてゐる。而して今後改訂せらるゝものは將來本書が版を重ねる場合に訂正したいと思ふ。
- 一、本書の記述にあたり既に各地に於て研究發表せられたる資料を參考とせる事項が尠くない。この點に對し關係各位に深く敬意を表するものである。

凡例

一、本書はその編述並に推敲を通じて本協會赤堀常務理事及び河上主事に負ふ所が非常に多い。

昭和十年三月末

土屋政一

小學校に於ける融和教育 目次

序言・凡例

第一章 小學校教育と融和问题……………一

第一節 融和问题の意義……………二

第一 人間の平等と尊厳性……………二

第二 封建的差別に依る國民生活の障得……………三

第三 國民一體の精神の確立……………三

第四 融和问题の意義……………四

第二節 部落の起原並に沿革……………五

第一 部落の起原……………五

第二 部落の沿革……………七

第三節 融和问题の實狀……………九

目次

目次

第一 部落の現状……………九

第二 社会的關係……………一七

第三 解決方策……………二〇

第四節 小學校に於ける問題の實相……………二五

第一 兒童と差別意識……………二六

第二 教師と差別問題……………二七

第三 學校經營上の問題……………三五

第五節 融和教育の使命……………三七

第一 融和教育の意義並要旨……………三七

第二 融和運動に於ける融和教育の地位……………三六

第三 融和教育の方途……………四〇

第六節 小學校に於ける融和教育の重要性……………四二

第一 兒童融和教育の重要性……………四二

第二 融和教育に對する態度……………四四

第三 小學校融和教育の進展……………四四

第二章 融和教育實施に關する調査並に計畫

第四 國民教育としての融和教育……………四六

第一節 兒童並に環境に關する調査……………五〇

第一 兒童に關する調査……………五〇

第二 環境に關する調査……………五二

第三 兒童差別意識の調査方法……………五四

第二節 融和教育資料の蒐集及研究・實施機關……………六一

第一 融和教育資料の蒐集……………六一

第二 融和教育研究並に實施機關……………六六

第三節 融和教育方針並に教程の樹立……………七二

第一 融和教育方針の樹立……………七二

第二 融和教育教程の決定……………七五

第三章 小學教科と融和教育……………八二

第一節 各科教授と融和教育……………八二

目次

目次

第二節 修身科…………… 一六

 第一 融和教育關係徳目の體系…………… 一七

 第二 關係徳目の融和教育的考察…………… 一八

第三節 國語科…………… 一九

 第一 國語科教授の要旨と融和教育…………… 二〇

 第二 國語科教授の方法…………… 二一

第四節 國史科(同)…………… 二二

第五節 唱歌科(同)…………… 二三

第六節 體操科(同)…………… 二四

第七節 郷土科(同)…………… 二五

第八節 其他の各科…………… 二六

 第一 算術科…………… 二七

 第二 地理科…………… 二八

 第三 理科…………… 二九

 第四 手工科…………… 三〇

目次

第五 實業科…………… 三一

第四章 融和教育に於ける訓練並に養護…………… 三二

 第一節 融和教育に於ける訓練…………… 三三

 第一 學校生活と融和的訓練…………… 三三

 第二 各學年に於ける訓練方針…………… 三四

 第三 學校訓練の實際施設並方法…………… 三五

 第二節 融和教育に於ける養護…………… 三六

 第一 學校教育に於ける養護…………… 三六

 第二 融和的養護の實際…………… 三七

第五章 内部兒童教育並に差別事件の取扱…………… 三八

 第一節 内部兒童教育の目的…………… 三八

 第二節 内部兒童教育の實際…………… 三九

 第一 留意すべき事項…………… 四〇

 第二 教育方針…………… 四一

目次

第三節 差別事件の取扱……………三九二

 第一 児童の差別と學校教育……………一四二

 第二 實際的取扱……………一四四

第六章 融和教育に於ける環境教育……………二〇〇

 第一節 環境と融和教育……………二〇〇

 第二節 環境教育の實際……………二〇四

附録 融和事業に関する教育的方策要綱

(目次了)

小學校に於ける融和教育



第一章 小學校教育と融和問題

第一節 融和問題の意義

人間の平等と尊嚴性

人間はすべての根本に於て平等であり、且つ尊嚴なるべきことは原則として認められねばならぬ。また、それは眞理であり、すべての人間行動の究極の理想であらねばならない。

而して人間がその根本に於て平等且つ尊嚴であらねばならぬと云ふことは、人間にその人格を認むるが故である。この人格とはこれを心理的に観れば人の人たる所以即ち人間的存在を非人間的存在から區別し、斯かる個性をもつた個體をいひ、且つ複雑な精神活動の統一體であるといふことが出来る。更に人格を倫理的に観れば、人格とは人の人たる所以でその本質は自律的意志、自由意志及び絶對無上の價値を有する目的自體をいふのである。

斯かる絶對的價値並に存在に對する人格は唯一無條件なる根本的價値、絶對無上の價値を有するも

のであり、すべての人はこの點に於て平等無差別なるべきである。それ故にこれに對しては何人も侵し且つ侵され得ざるところの自由と尊厳性とを有するのである。凡ての人は皆平等であり、尊厳であるといふのはこの意味にほかならぬのである。

然しながら斯くの如き人間の絶對的價値のほか、後天的、生得的經驗努力の結果集積せられたるところの價値、人格といふ場合には、各人のそれを比較する場合、これが相對的には人みな異り、その本質發揮の程度は人によりて差等があり、千差萬別であることを認めなければならぬ。即ちこのことはその價値、人格を構成する道徳的、社會的、經濟的、文化的諸要素に於てそれに高低が存するが故である。

而して叙上のことからは、人間生活に關する限りその成長と發揮とを至上の目的とし、その特質の發展向上を願はぬものは一人もない。而してそれは何人に於ても可能性を有しその發展は無限なるものと云はなければならぬ。而してこれらの特質は人に具存するところの絶對的人間價値を認むるが故である。こゝに人間生活の尊嚴性と人格尊重の根據があり、人はすべて社會的に平等に待遇すべしとの理由が確立するのである。即ち貴賤、貧富、地位、境遇、職業等の區別なく何人もその特質發揮については均等の機會を與へられ、又何人もこれが發揮向上の活動を保證せられねばならない。こゝに即ち社會正義の原則が是認せられねばならぬ理由が確立するのである。

第二 封建的差別に依る國民生活の障礙

人はその根本に於て平等尊嚴なる價値を有し且つ相對的價値に關する向上發揮については何人も抑壓拘束せらるべきではなく、そこに人間生活の自由と社會正義が當然認められねばならぬのであるが、現在の社會にはこの根本的絶對的尊嚴性に對してこれを差別冒瀆し、且つ相對的價値の發揮向上に對する努力活動の自由を抑壓するが如き社會現象が尠くない。これは人間の存在並に社會生活にとつて甚しき矛盾と云はねばならない。

即ちこゝに述べんとする融和問題は、我が國史上最も甚しき人格冒瀆の社會問題であつて、主として徳川幕府の中央集權的封建時代に於て制定せられたる階級制度としての身分關係による最下級の「エタ」に對する差別的賤視觀念により、これが傳統的因襲的觀念となり、既にその制度の撤廢せられたる今日、尙ほ過去のそれらの境遇にありし人々に對し、その人格を傷け、又は社會經濟生活上に於て諸多の自由を抑壓しつゝあるの問題であつて、國民生活社會生活上に於ける一大缺陷であり、正義人道の上より觀るも甚しき矛盾といはねばならない。

第三 國民一體の精神の確立

人間はその根本に於て平等でありその人格は尊厳にして侵すべからず、且つ社會生活、國民生活上より、或は正義人道の上よりその平等と尊厳性の發揮向上の自由は確立せられねばならぬことは自明の理である。而してこれに對しては早くより正義人道を唱へ人權の自由平等に志す人々より、既にその非なることを唱導せられ、又多年精神的、社會經濟的に賤視壓迫せられ來つた人々の間にも、自からの自由とその尊嚴に對し、これが確立を叫ぶ解放運動が展開せられ來つたのである。

而して吾々は人として平等であると同時に、日本民族としてその成立を考ふるもそれは各種民族を融合一致し渾然同化せるものにして、國民は 皇室を中心宗家とせる一大家族的國家にして、その關係は一君萬民、國民はすべてが同じはらからであり、互にその人格を尊敬し相親しみあふて相融和一致生活すべきことは、一視同仁の歴代皇室の 御聖徳を仰ぐとき、極めて明白なる事實であつて、同胞は互に至尊に對する赤子であり、齊しく皇恩に浴する平等なる國家の一員である。

この故を以て九千萬同胞は互に國民一體の同胞意識に自覺し、融和一致親愛なる協同生活を完ふすべきことは、國家社會の上よりみるも重要なことである。

第四 融和問題の意義

以上述べし如く融和問題は我國封建制度の殘滓たる因襲的差別觀念による同胞間の精神的差別並に

これに基づく社會的經濟的諸關係を清算淨化し、同胞融和の國民精神を確立し、更に社會經濟生活に關する現實生活上の諸種の關係を向上發展せしめ、國民平等の一視同仁の 聖旨に報ひ奉るべく、これを全國民の責務としてその解決を企圖せんとするものである。

第二節 部落の起原並に沿革

融和問題に關する考察を進めるにあたり、その最も基調となるものは部落の實體並に、一般社會に於ける差別の實相を把握することであるが、その第一に知らねばならぬことは部落の起原並にその沿革である。

第一 部落の起原

現在同胞間に尙個人的に或は社會的に差別せられつゝある部落に對する封建時代の階級的身分の名稱「エタ」の文字が文籍に示されたのは、今より約七百年前鎌倉時代の初期世に出でしと傳へらるゝ「塵袋」を以て嚆矢とするのである。

而してその起原に就ては歸化人説、先住民族説、賤民族説、職業起原説等種々あるも、これを一言

にして云へば要は同一の大和民族中、或る時代よりその營める職業の如何によつて自から差別を生ずることになり、職業的一時的の極めて輕微な賤視に過ぎなかつたものが、後世に至りて更にその上に法制的、社會的の差別が添加して、遂に身分的、世襲的賤民として甚しき差別を爲すに至つたのである。

更にこれを敷衍すれば、我國の上古は固より中古に至るまでは、君民一體萬民抱擁の國是が克く實現されてゐたのであつたが、時代の推移と政權の歸趨とに伴ひ、氏族制度時代に入りてより強豪なる氏族により弱小なる氏族を壓迫してこゝに争亂を起し、君民一體の古制に陰翳を生じ、次で武家制度時代に至り、その武士階級中の最高權力を獲得したもによりて天下の政權が掌握せらるゝに及び、こゝに階級觀念が著しく濃厚となるに至つた。

即ち徳川幕府の集權的封建制度の確立によつて、國民はそれまでは地位境遇の如何にかゝはらず、努力に依り如何なる地位をも得られたのであつたが、徳川幕府によつて現状存続の封建制度が定められたために社會組織はこゝに固定し、年と共に階級觀念が益々濃厚熾烈となり強權階級の横暴は甚しくなり、これに反して民衆の正義は益々その自由を抑壓せらるゝに至つた。

この徳川幕府の封建時代に於ける法制的身分階級には士、農、工、商の別を設け、更にこれらの階級の下に「エタ」「ヒニン」等の身分階級がありその間には苛酷なる支配的階級的差別が嚴存した。

而して更にそれらの最下級の身分にあるものは一般に於て從事せざる所謂賤業に就き、且つ封建制度の特質としてそれに代々從事し他に轉ずることを許されなかつた。即ちそこに職業に對する差別賤視の觀念を生むに至つたもので、部落差別の根本は何等民族的關係によるものではなく、その從事せる職業に對する差別なることが明かにせらるゝのである。而してこれらの職業を忌むやうになつたのは決して我國古來からのことではなく、中世思想の傳來による佛教の派生的思想風習の影響によるもので、皇紀一千三百三十六年頃から佛教の斷肉思想や殺生戒等により肉食を禁ずるやうになり、漸次一般的傳統的風習と化し、遂には死畜の取片付け、皮革の取扱ひ、鍔作り、鞍作り等より更に手工業者、藍染屋等までも賤しむといふ風習が生ずるに至つたのである。

即ち徳川幕府が封建制度創設の際、これら前時代の職業身分の如何にかゝはらず、當時從事せる職業、身分のまゝにその制度身分を固定し、それを子孫に繼承せしむるの制度を定めてより全く新陳代謝の途が絶たれ、そこに最下の身分階級として固定するに至つたのである。

第二 部落の沿革

徳川幕府の封建的階級制度の確立により職業的差別より遂に賤民として階級的身分的に固定せしめられ、爾來年と共に階級觀念の累積と共に差別の度が益々濃厚熾烈となり、最も苛酷なる非人間的虐

政の下に三百年の長き間を經過し、又これらの部落にはその後には生存競争の落伍者がたへず入りこみ、次第にその數を増して遂に幕末に至つた。

然しながら異に不合理な差別制度を建てた徳川幕府が、その晩年において自ら設けた封建制度の社會的經濟的弊害の百出に依りこれが維持存続を難からしめ、遂にこれが自壞的傾向を辿るに及び、多年階級制度の弊害に悩みし不級武士以下の人々は、期せずして共に階級制度打破のために闘ふに至り、さしも三百年の長きに亘りて築きあげた幕府の基礎も、この劃時代的新興氣運には抗し得ずして遂に崩壊し、こゝに大政を朝廷に奉還するに至つたのである。

斯くしてその後に行はれたる明治維新の革新は我國未曾有の大改革であり、これが斷行の 勅諭は「天下億兆一人モ其所ヲ得サル時ハ皆朕カ罪ナレハ」との至仁至天の大御心より、直ちに新政劈頭五箇條の御誓文（第四項 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ）の煥發となり、一視同仁國民皆平等の國是が茲に定められ、新しき明るき時代となつたのである。

この時に當り、封建制度に依り醜穢せられたる不合理と差別の最大なる「エタ」「ヒニン」の制度の撤廢に關する輿論は當然高潮するに至り、遂に明治四年八月左の太政官布告となつて、多年の制度上、身分上、職業上の階級的差別は全く撤廢せらるゝに至つたのである。

太政官布告 明治四年八月二十八日 第六十一號

穢多非人等之稱ヲ被廢候條自今身分職業共平民同様タルベキ事

斯くして公明平等なる國民生活を營むこととなり、明治大正の時代を経て今日に至つたのである。

第三節 融和問題の實狀

凡そ如何なる問題に對する施設方策も、その對象となるべき問題そのものゝ實體を把握し、その實狀を確知せねばならない。それゆゑ小學校における融和教育を考慮するに當りても、これが對象たる融和問題の現情をよく知り、その現實に即したる適切有效なる施設方策を論ずることは最も肝要のことである。

第一 部落の現狀

そこで前項において述べ來つた部落の起原並に沿革に基つき、さらに今日の部落が如何なる状態におかれてゐるか。又社會一般との差別關係、社會經濟關係等について述べることにする。

一、部落概観

1 戸數及び人口

第三節 融和問題の實狀

第一章 小學校教育と融和問題

確實なる調査としては大正十年の内務省調査に依るもので、全国の部落數及び人口は次の通りである。

| | |
|--------|----------|
| 部落數 | 四、八九〇 |
| 戶數及人口 | |
| 本籍戶數 | 一四九、七八一戶 |
| 現住戶數 | 一五四、二八七戶 |
| 部落外居住者 | 一一、六九一戶 |
| 人口 | 八七二、七二〇人 |
| 人口 | 八二九、六七四人 |
| 人口 | 六九、三七〇人 |

2 部落の分布

部落は殆んど日本全土に散在するものにして、これが各府縣に於ける狀況は次の通りである。

(大正十年内務省調査)

| 府縣 | 部落數 | 戶數 | 人口 |
|-----|-------|---------|---------|
| 東京 | 四六 | 一、六五一 | 七、六五八 |
| 京都 | 一五四 | 八、五一五 | 四二、一七九 |
| 大阪 | 六〇 | 九、七七三 | 四七、九〇九 |
| 神奈川 | 三三 | 九三二 | 五、七一二 |
| 兵庫 | 三三九 | 一八、五四七 | 一〇七、六〇八 |
| 長崎 | 二九 | 五〇五 | 二、五一九 |
| 新潟 | 二三 | 五八〇 | 二、九二九 |
| 埼玉 | 三〇〇 | 四、七五八 | 二八、一三九 |
| 群馬 | 二三五 | 三、九五九 | 四二、五一六 |
| 岡山 | 二九七 | 八、八〇六 | 四二、八九五 |
| 廣島 | 四〇六 | 八、〇二四 | 四〇、一三三 |
| 山口 | 一一七 | 四、〇〇六 | 一九、八七八 |
| 和歌山 | 一〇五 | 七、四三八 | 三六、〇七二 |
| 徳島 | 五六 | 三、七九一 | 二二、三四五 |
| 香川 | 六三 | 一、九〇〇 | 九、八六七 |
| 愛媛 | 四九四 | 八、五九八 | 四六、〇一五 |
| 高知 | 七〇 | 五、四七七 | 三三、三五三 |
| 福岡 | 四九三 | 一二、九一四 | 六九、三四五 |
| 大分 | 七六 | 一、四〇二 | 七、〇九九 |
| 佐賀 | 二二 | 四一八 | 二、五〇八 |
| 熊本 | 五七 | 二、五二四 | 一三、二四〇 |
| 宮崎 | 二三 | 四八五 | 二、五九〇 |
| 鹿児島 | 四七 | 一、六八〇 | 八、〇〇一 |
| 計 | 四、八九〇 | 一五四、二八七 | 八一九、六七四 |

| | | | |
|----|-----|-------|--------|
| 千葉 | 二二 | 四七四 | 二、五八八 |
| 茨城 | 四七 | 七〇〇 | 四、三六八 |
| 栃木 | 九二 | 二、〇五二 | 一三、一一四 |
| 奈良 | 七一 | 六、四二七 | 三二、六七八 |
| 三重 | 二一六 | 七、〇八九 | 三八、三八三 |
| 愛知 | 一九 | 一、三六五 | 六、九二七 |
| 静岡 | 五五 | 二、三〇四 | 一四、四七六 |
| 山梨 | 二〇 | 二九五 | 一、七四五 |
| 滋賀 | 六五 | 四、八八二 | 二五、一八九 |
| 岐阜 | 二三 | 九二八 | 四、六三五 |
| 長野 | 二八八 | 三、二〇〇 | 一九、二六三 |
| 福島 | 六 | 一八四 | 一、二四〇 |
| 青森 | 一 | 三七 | 一八六 |
| 山形 | 四 | 二〇八 | 一、〇〇〇 |
| 福井 | 五 | 四七八 | 二、三一八 |
| 石川 | 三一 | 七六六 | 四、六七〇 |
| 富山 | 二二〇 | 一、四四四 | 八、二四二 |

第三節 融和問題の實狀

第一章 小學校教育と融和問題

計 一五四、二八七 一〇〇

尙ほ昭和六年中央融和事業協會調査に依る大阪府外十縣十三部落に於ける宗教別状態を示せば左の如くである。

| 宗派別 | 戸數 | 百分比 |
|-----|-------|--------|
| 眞宗 | 五、一五一 | 九〇・八% |
| 日蓮宗 | 三二八 | 五・六% |
| 眞言宗 | 二六 | 四% |
| 禪宗 | 九九 | 一・七% |
| 其他 | 八〇 | 一・五% |
| 計 | 五、六七四 | 一〇〇・〇% |

更に全国の部落に於ける宗教分布状況を地方別に依り示せば概ね左の如くである。

| | |
|---------|----------------------|
| 關東・東北地方 | 禪宗・眞言宗・日蓮宗・淨土宗・時宗・眞宗 |
| 中部地方 | 眞宗・日蓮宗・禪宗 |
| 近畿地方 | 眞宗・淨土宗 |
| 中國地方 | 眞宗・眞言宗・日蓮宗 |

| | |
|------|--------|
| 四國地方 | 眞宗・眞言宗 |
| 九州地方 | 眞宗・日蓮宗 |

三、職業の狀態

1 職業別戸數

大正十年内務省調査による部落職業別状態は次の如くである。

| 職業別 | 職業戸數 | 百分比 |
|-----|---------|------|
| 農業 | 七四、八七二 | 四九% |
| 工業 | 一二、七六八 | 八% |
| 商業 | 一八、七六五 | 一二% |
| 漁業 | 四、〇四二 | 二% |
| 力役 | 二三、〇九二 | 一五% |
| 官吏 | 一七四 | 一 |
| 雜 | 二〇、五七四 | 二二% |
| 計 | 一五四、二八七 | 一〇〇% |

2 主なる職業の種類

第三節 融和問題の實狀

第一章 小學校教育と融和問題

二、教育及宗教状態

1 義務教育

大正十年内務省調査に依り全国の部落に於ける義務教育状況を示せば左の如くである。

| | |
|-----------|----------|
| 學齡兒童數 | 一二八、四一八人 |
| 部落小學校數 | 三五校 |
| 部落分教場數 | 二七校 |
| 右に於ける就學歩合 | 九四% |
| 同 出席歩合 | 八四% |

2 高等小學及補習教育

大正十年内務省調査による全国の部落に於ける實業補習學校生徒數は次の如くである。

| | | | |
|------|--------|---------|-----|
| 生徒數 | 五、一四五人 | 一人當平均戸數 | 二九戸 |
| 高等小學 | 一五九人 | 一人當戸數 | 一六戸 |
| 補習科 | 七九人 | 同 | 三二戸 |

又昭和六年中央融和事業協會調査により大阪府外九縣十一部落に於ける高等小學及補習教育の状況は次の如くである。

3 中等以上の教育

大正十年内務省調査による中等以上の教育を受くる者の數は次の如くである。

一、五七八人 一人當平均戸數 九七戸

又昭和六年中央融和事業協會調査による大阪府外九縣十一部落に於ける中等以上の教育を受くる者の數は次の如くである。

| 學校別 | 在學者 | 卒業者 | 計 | 一人當平均戸數 |
|--------|-----|-----|-----|---------|
| 中等學校 | 六五 | 六九 | 一三四 | 一九 |
| 專門學校以上 | 一二 | 一九 | 三一 | 八一 |
| 計 | 七七 | 八八 | 一六五 | 一五 |

4 宗教状態

大正十年内務省調査に依り全国の部落に於ける宗派別状態を示せば左の如くである。

| 宗派別 | 戸數 | 百分比 |
|-----|---------|-----|
| 眞宗 | 一二六、六八四 | 八二% |
| 日蓮宗 | 五、七七二 | 四 |
| 其他 | 二一、八三一 | 一四 |

第三節 融和問題の實狀

第一章 小學校教育と融和問題

計 一五四、二八七 一〇〇

尙ほ昭和六年中央融和事業協會調査に依る大阪府外十縣十三部落に於ける宗教別状態を示せば左の如くである。

| 宗派別 | 戸數 | 百分比 |
|-----|-------|-------|
| 眞宗 | 五、一五一 | 九〇・八% |
| 日蓮宗 | 三二八 | 五六 |
| 眞言宗 | 二六 | 四 |
| 禪宗 | 九九 | 一・七 |
| 其他 | 八〇 | 一・五 |
| 計 | 五、六七四 | 一〇〇・〇 |

更に全国の部落に於ける宗教分布状況を地方別に依り示せば概ね左の如くである。

| | |
|---------|----------------------|
| 關東・東北地方 | 禪宗・眞言宗・日蓮宗・淨土宗・時宗・眞宗 |
| 中部地方 | 眞宗・日蓮宗・禪宗 |
| 近畿地方 | 眞宗・淨土宗 |
| 中國地方 | 眞宗・眞言宗・日蓮宗 |

| | |
|------|--------|
| 四國地方 | 眞宗・眞言宗 |
| 九州地方 | 眞宗・日蓮宗 |

三、職業の狀態

1 職業別戸數

大正十年内務省調査による部落職業別状態は次の如くである。

| 職業別 | 職業戸數 | 百分比 |
|-----|---------|-----|
| 農業 | 七四、八七二 | 四九% |
| 工業 | 一二、七六八 | 八 |
| 商業 | 一八、七六五 | 一二 |
| 漁業 | 四、〇四二 | 二 |
| 力役 | 二三、〇九二 | 一五 |
| 官吏 | 一七四 | 一 |
| 雜 | 二〇、五七四 | 一三 |
| 計 | 一五四、二八七 | 一〇〇 |

2 主なる職業の種類

第三節 融和問題の實狀

第一章 小學校教育と融和問題

前掲職業の中、世なる職業の種類を示せば次の如くである。

イ、農業

農耕、養蠶

ロ、工業

草履、履物表、鼻緒、靴等の履物製造、皮革、皮革製品、竹工品、紡績製絲女工、土木建築
労働者

ハ、商業

獸肉、毛皮、皮革製品販賣者、小資本行商

ニ、漁業

沿岸河川に於ける漁撈従事者

ホ、その他

土木、日傭、仲仕、人力車夫、履物修繕

四、經濟狀態

1 土地及び家屋の所有狀態

大正十年内務省調査に依れば全國の部落に於て土地を有せざる者は左の如くである。

| | | |
|---------|------------|-------|
| 總戸數 | 土地家屋を有せざる者 | 百分比 |
| 一五四、二八七 | 四一、九三七 | 二七・一% |

尙昭和六年中央融和事業協會調査に依る大阪府外九府縣十部落に於て土地及家屋を有せざる者は次の如くである。

| | | | | |
|-------|----------|-------|----------|-------|
| 總戸數 | 土地を有せざる者 | | 家屋を有せざる者 | |
| | 數 | 百分比 | 數 | 百分比 |
| 一、五六四 | 一、〇八一 | 六九・一% | 五六九 | 三五・七% |

2 一般との土地所有面積の比較

昭和六年中央融和事業協會調査に依る神奈川外四縣下五ヶ町村に於ける部落と一般との一戸當平均土地所有面積を比較すれば次の如くである。

| | | | | | |
|----|---------|----|------|-----|-------|
| 一般 | 一町七畝一二歩 | 部落 | 一反四分 | 百分比 | 一三・四% |
|----|---------|----|------|-----|-------|

其他資産、納税、公費救助者數に依り一般と比較すれば、部落は大體その三分の一以下の經濟力しか持つてゐないことが知られる。

第二 社會的關係

第三節 融和問題の實狀

部落の現状は以上の如くであるが、更に部落が一般社會との關聯に於て如何なる差別を受けつゝあるか、即ちその教育的關係に於て或は政治的、經濟的關係等に於ける相互の状態を擧ぐれば次の如くである。

一、教育的關係

イ、學校内に於ける兒童取扱上に於ける差別

ロ、入學に於ける差別

ハ、學友間に於ける差別

ニ、部落出身教員の配置による差別

二、社會的關係

イ、結婚上の差別

通婚の不自由、離婚、絶交、家庭悲劇等

ロ、社交上に於ける差別

友人同僚間の公然又は隱然の差別、會合會食拒否、冠婚葬祭、旅宿、其他公私團體員の選舉等に於ける差別

三、政治的關係

イ、自治行政に於ける不公平

公私團體參加拒絶、自治體及區の會合に於ける參加拒絶、各種團體役員係員への部落の進出妨害

ロ、共有財産に對する差別待遇

部落有、區有財産及基本財産等への入會拒絶、分配の拒絶及不公平

ハ、選舉に對する差別待遇

部落代表者の推薦に隱然又は公然の拒絶、選舉權による部落出身候補者への投票の弊害

ニ、身元調査に於ける差別待遇

官公團體に於ける身元調査上の差別的取扱

ホ、官公團體内に於ける差別待遇

軍隊、刑務所内に於ける差別

四、經濟的關係

イ、就職上に於ける差別

會社、工場、銀行其他公私諸團體に於ける採用上の差別的取扱

ロ、部落特殊産業による疲弊

第一章 小學校教育と融和問題

資本主義的機械生産による部落主要産業の没落、皮革、製靴、製膠、麻表、雪駄、草履、竹細工、船渡し、下駄表等の封建的工業、家内工業の没落
これら主要産業の没落による労働者、職人の失業者の發生

一般失業者の續出による影響としての特殊産業の奪ひ合ひによる「トモグヒ」的没落
企業上及生産其他職務上に於ける就業上の差別待遇

ハ、耕作地及小作料に對する差別

部落の六割を占める貧農、その他の農民の耕地上に於ける差別、小作料其他の費用等に於ける差別

ニ、産業組合、消費組合、同業組合其他公私の組合に於ける加入及負擔による差別

ホ、低利資金、生業資金の貸付に於ける支障

ヘ、以上の部落内の貧窮化の増大による生活の窮乏によるルンペンの激増

ト、高利及頼母子講による生活苦痛

第三 解決方策

以上の状態にある部落及び一般社會との相互の關聯に於て生ずる幾多の國民生活上の缺陷に對して

これを補正し、公正平等なる國民的地位の向上とこれが障除のため、國家社會上に種々の解決方策が講ぜられてゐる。その主なるものは、政府並に地方府縣廳に於て行ふ融和事業行政並に諸施設と、中央及び地方融和團體の實施する融和運動とであり、更にその他部落民自身に於て自からの地位の向上を圖る自主的解放運動としての水平運動とがある。

一、融和事業行政

融和問題はこれを發生並に沿革上より觀れば前時代に於ける封建國家の遺制遺産であり、又現在に於ける本問題の實相より觀るもそれは國民生活上の一大缺陷である。この點に於て、その解決は國家行政の上に於て適當なる解決策を講ずることは當然のことと謂ふべきである。

これがため政府は大正九年以來或は調査會を設け、或は内務大臣の訓令を普く全國民に發し、其他諸種の具體的對策施設を講じてゐるが、そのうち主なる施設は次の如くである。

1 地區整理

部落は狹隘なる地區に比較的多數の人口を有し、道路、衛生施設等の不備なる點が多い故、これらの施設を充實し民心の一新を圖る。

2 育英奨勵

向學の志を有し、しかも資力薄弱の中等並に高等専門教育を受くること能はざる者に對し、奨學金

第一章 小學校教育と融和問題

を給しこれが教育の機会を得しめ、部落中に人物を養成しその指導啓發に當らしめる。

3 融和團體獎勵

一般民衆の差別觀念を去除し、又部落の自覺向上を圖るため、民間に於て組織する融和事業團體の獎勵助成をなす。

4 地方改善施設補助

各府縣に於て部落に對し實施する融和事業、專任職員、診療所、共同浴場、住宅改善、公會堂、隣保館、託兒所、給水設備、副業獎勵、その他經濟施設、道路下水の新設改修等の施設に對し補助獎勵をなす。

5 地方改善應急施設

近時の經濟的不況による部落民の生活の窮乏を匡救するため、主として各部落に土木事業を起さしめ、これが勞働の機会を得しめてその収益を圖る。

以上の諸施設に對し大正九年度以降の國費支出額は左の通りである。

| 年 度 | 支 出 額 | 同 | 同 |
|-------|---------|---|---------|
| 大正九年度 | 四五、〇〇〇 | 同 | 十一年度 |
| 同 十年度 | 一四五、〇〇〇 | 同 | 十二年度 |
| | | 同 | 十三年度 |
| | | | 一九五、〇〇〇 |
| | | | 四九一、〇〇〇 |
| | | | 五二二、五〇〇 |

| | | | | |
|--------|---------|---|-----|-----------|
| 同 十四年度 | 五五四、〇〇〇 | 同 | 五年度 | 五八八、七〇八 |
| 同 十五年度 | 五八五、五〇〇 | 同 | 六年度 | 五二七、二〇四 |
| 昭和二年度 | 六一七、〇〇〇 | 同 | 七年度 | 一、九七四、四八四 |
| 同 三年度 | 六一七、〇〇〇 | 同 | 八年度 | 二、三七四、四八四 |
| 同 四年度 | 六四八、六〇〇 | 計 | | 九、八八五、四八〇 |

二、融和運動

明治三十年頃より先覺者により民間に於て融和問題の解決の聲が叫ばれ各種の融和團體が組織せられて夫々活潑なる運動が試みられた。その後種々の變遷を経て現在は中央團體としては財團法人中央融和事業協會があり、又地方各府縣には夫々府縣を單位とする融和團體（三十四府縣に三十四團體）が設けられてゐる。尙その他京都には東西兩本願寺の宗教的融和團體及び東京に於ける一教化團體に於ても融和事業に關係をもつてゐる。

而してこれら融和事業團體の實施しつゝある融和事業施設は大要次の如くである。

1 自覺更生運動

部落民の自覺を喚起し、自からの社會的地位の向上に資し平等なる國民生活を期するため、左記諸種の産業經濟施設並に教育文化施設の擴充等を圖る。

第一章 小學校教育と融和問題

内部自覺施設、經濟更生指導者養成、同指定地區指導、同協議會、職業輔導、産業獎勵、金融施設
協同組合獎勵、教育文化の獎勵等

2 教育教化施設

一般社會にある差別觀念並に社會上、經濟上に於ける差別的現象を廢除し、以て内部の向上發展を促進するための左記諸施設

學校教育（師範學校、中等學校、小學校其他）、社會教育（講習會、講演會、映畫會、文書教育、國民融和日）其他社會上及び經濟上の差別事象事件の交除解決等

3 其他

其他一般的には諸會議、青年及び婦人融和運動、功勞者の表彰等がある。

三、水平運動

多年一般社會より差別と壓迫とを受け來つた部落民自身の力により、自からの尊嚴に自覺し、社會上、經濟上並に政治上の自由と平等を獲得せんとして興れる自主的解放運動で、大正十一年三月全國水平社の名稱の下に大阪に於て創立せられ、爾後熾烈なる解放意識と更に當時の時代思潮もこれに伴ひ、その運動は恰も燎原の火の如く全國に擴まり果敢なる運動が行はれた。而しながら其の後内部の組織、運動方針、運動方法並びに一般社會の諸種の影響により、次第に往時の如き隆盛さは見られな

くなつたが、その指導方針は過去に於ける差別事件に對する糺彈のみを事とせず、これを社會的、政治的解決に發展せしむると共に、部落の經濟的地位の獲得のため階級闘争的分野に深く入り、無産階級的解放運動の一翼としてその運動を進むるに至つた。而して現在は各部落に堅實なる運動の基礎を置く如く進めてゐる。

因に全國水平社の綱領は次の通りである。

綱 領

- 一、我等特殊部落民は賤視觀念の存在理由を知るが故に、明確なる階級意識の上に其運動を進展せしむ。
- 一、我等特殊部落民は生活權の奪還と政治的自由の獲得を期す。
- 一、我等特殊部落民は部落民自身の行動によつて絶對の解放を期す。

第四節 小學校に於ける問題の實相

一般社會に於ける差別の影響は、當然の結果として小學校内部に於ける諸機構にまで浸潤し反影してゐる。小學校は教育機關としてその教育機構内に差別事象のあり得べからざることを期待するも、

第四節 小學校に於ける問題の實相

第一章 小學校教育と融和問題

教育社會そのものゝみを現在の一般社會機構より除外し、これを隔離することは出来ない。教育社會そのものが凡ての綜合的社會組織の中の一要素である限り、一般社會に在在する社會觀念、因襲的觀念等はこれら教育機關に對しても直接に反影し、具象化せらるゝことは遺憾のことゝはいへ、又止むを得ざることである。

而して小學校に於けるこれらの實相は、兒童の差別觀念の保持、教師の教育上に於ける問題の惹起、學校教育上の諸機構、諸施設、取扱上等に於ける諸現象となつて表現せらるゝのである。

第一 兒童と差別意識

1 兒童差別意識保持の狀態

一般社會環境の中に生長發育する兒童が、これらの社會環境に傳統せられつゝある因襲的差別觀念の感化影響を享くることは當然のこと、小學兒童はその學年程度により漸次差別意識を把持するに至る。

これを實例を以て觀るに、和歌山縣に於て差別の濃厚なる一小學校に於けるものを擧ぐれば次の如くである。

| 種別 | 學年 | |
|----------|------|------|
| | 一尋 | 二尋 |
| 調査人員 | 三 | 四〇 |
| 差別を知らざる者 | 三五 | 二六 |
| 差別を知る者 | 八 | 二四 |
| 知る者の比率 | 〇・三五 | 〇・六〇 |
| | 三尋 | 四尋 |
| 調査人員 | 四 | 四 |
| 差別を知らざる者 | 二〇 | 二 |
| 差別を知る者 | 三 | 元 |
| 知る者の比率 | 〇・四 | 〇・九 |
| | 五尋 | 六尋 |
| 調査人員 | 元 | 元 |
| 差別を知らざる者 | 一 | 〇 |
| 差別を知る者 | 元 | 元 |
| 知る者の比率 | 〇・九七 | 一・〇〇 |
| | 一高 | 二高 |
| 調査人員 | 元 | 元 |
| 差別を知らざる者 | 〇 | 〇 |
| 差別を知る者 | 元 | 二七 |
| 知る者の比率 | 一・〇〇 | 一・〇〇 |
| 計 | 元 | 二九 |
| | 三六 | 三六 |

即ち右の實例によれば、全調査生徒數の七割四分は差別觀念に煩ひせられ、且つ尋常四年以上の者はその殆んど全部の者が差別意識を保持しつゝあるのである。又差別觀念の比較的稀薄なる地方に於てもこれを調査すればその程度こそ異なれ、相當の差別意識を發見するに至るであらう。

これらの事實に基き、兒童の保持する差別意識は、學校生活上何等かの機會において具象化せられ非教育的、非社會的現象を惹起するに至り、遂にこれが問題化し所謂差別事件となるのである。

今全國の小學校に於て昭和六、七、八年の三ヶ年中に於て兒童間に於て起されたる差別事件のうち、夫々の府縣の融和團體に於てこれが解決斡旋に當りたる主要事件の情況を擧ぐれば次の通りであ

第一章 小學校教育と融和問題

る。

(融和事業年鑑に依る)

| 差別の種類 | 昭和六年度 | 昭和七年度 | 昭和八年度 | 計 |
|----------|-------|-------|-------|-----|
| 差別の種別 | 八件 | 四件 | 一五件 | 二七件 |
| 喧嘩暴行 | 1 | 1 | 1 | 3 |
| 通學途上の差別 | 4 | 1 | 1 | 6 |
| 休憩遊戯中差別 | 3 | 1 | 4 | 8 |
| 修學旅行の際差別 | 1 | 1 | 1 | 3 |
| 授業中差別 | 2 | 1 | 1 | 4 |
| 體操時間中差別 | 1 | 1 | 1 | 3 |
| 計 | 一八 | 一五 | 二一 | 五四 |

2 兒童差別意識感染の時期とその対象

更に小學兒童の差別意識の感染の時期とそれを感染せしめたる対象に就て觀るに、その影響を受けたる年齢及び學年別の調査實例を擧ぐれば左の如くである。

(奈良縣の一例)

| 影響時期 | 調査學年 | | | |
|-------|------|----|----|----|
| | 尋六 | 高一 | 高二 | 計 |
| 就學前 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| 尋一の時 | 4 | 2 | 0 | 6 |
| 尋二の時 | 2 | 1 | 0 | 3 |
| 尋三の時 | 19 | 2 | 2 | 23 |
| 尋四の時 | 11 | 2 | 4 | 17 |
| 尋五の時 | 7 | 5 | 5 | 17 |
| 尋六の時 | 1 | 3 | 3 | 7 |
| 高一の時 | 0 | 0 | 2 | 2 |
| 高二の時 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 時期不明 | 6 | 7 | 6 | 19 |
| 聞かざる者 | 0 | 2 | 0 | 2 |
| 計 | 五〇 | 二五 | 二二 | 九七 |

第四節 小學校に於ける同題の實相

第一章 小學校教育と融和問題
(和歌山縣の一例)

| | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| 年齢 | 満六歳 | 同七 | 同八 | 同九 | 同一〇 | 同一一 | 同一二 | 同一三 | 同一四 | 同一五 | 計 |
| 児童数 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 三 | 九 | 一六 | 四 | 二 | 三七 |

(神奈川縣の一例)

| 種別 | 調査票に書かざるもの | | 同右 | | 同「前」と書きしもの | | 尋一の時 | | 尋 | | 尋 | | 尋 | | 高 | | 計 |
|------------|------------|---|----|---|------------|---|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|-----|
| | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 調査票に書かざるもの | | 四 | | | | | | | | | | | | | | | 五 |
| 同右 | | | | | | | | | | | | | | | | | 一 |
| 同「前」と書きしもの | | | | | | | | | | | | | | | | | 三〇 |
| 尋一の時 | | | | | | | | | | | | | | | | | 五 |
| 尋 | | | | | | | | | | | | | | | | | 五 |
| 尋 | | | | | | | | | | | | | | | | | 七 |
| 尋 | | | | | | | | | | | | | | | | | 六 |
| 尋 | | | | | | | | | | | | | | | | | 一一 |
| 尋 | | | | | | | | | | | | | | | | | 一五 |
| 高 | | | | | | | | | | | | | | | | | 一五 |
| 計 | | | | | | | | | | | | | | | | | 三五〇 |

| | | | | |
|---|---|----|----|-----|
| 高 | 二 | 一三 | 五 | 一八 |
| 合 | 計 | 七九 | 四八 | 一二七 |

右の表によれば、児童の最もその感化を受くることの多きは奈良縣に於ては尋常四五年、和歌山縣に於ては尋常六年より高等一年、神奈川縣に於ては尋常五年より高等二年に及んでゐる。何れも中學年末期より高學年に至る間において最も多きことが察知せられる。それゆゑに、これらの學年に於ける明確なる融和教育の實施と、これが差別觀念發生の基調たる低學年及中學年の基礎的陶冶の重要性が認められるのである。

次に児童の差別觀念感染の對象は、一般社會に存在する封建的差別觀念並に社會的諸事象により、漸次意識づけらるゝものであるが、直接これが感染の動機となり、その對象となるものは環境に於ける社會的諸事象の影響、家庭並に友人の及ぼす感化がその主なるもので、これを一二の調査例を以て示せば左の如くである。

(神奈川縣の一例)

| 種別 | 男 | 女 | 計 | 百分比 |
|------|----|----|----|-------|
| 友人から | 一九 | 一六 | 三五 | 二七・四% |

第四節 小學校に於ける同題の實相

第一章 小學校教育と融和問題

| | | | | |
|------|----|----|-----|------|
| 計 | 七九 | 四八 | 一二七 | 一〇〇〇 |
| 家族から | 一四 | 一一 | 二五 | 一九・七 |
| 他人から | 四六 | 一七 | 六三 | 四九・七 |
| 不明 | 一 | 四 | 四 | 三・二 |

(和歌山縣の一例)

| | | | | | | | | | | | |
|----|------|-----|------|------|-----|------|-----|-------------|----|-----------|------------|
| 計 | 家 族 | | | | | 社 會 | | 學 友 | | | |
| | 祖母より | 母より | 姉妹より | 女中より | 父より | 祖父より | 兄より | 周囲の事 件より | 不明 | 上級生よ り | 同級同 下級同 |
| 五 | 五 | 三 | 二 | 一 | 二 | 一 | 四 | 七 | 四 | 二 | 一 |
| 一五 | 四 | | | | | 一一 | 七 | | | | |
| 一九 | | | | | | | | | | | |

右の表によれば何れも社會及家庭より受くること多く、又家庭においては男性よりも女性の家族より受くることの多きを察知せらる。こゝに於て學校融和教育上、それらの關係方面と密接なる聯絡を保ち、これが實施の高全を期する必要が明かにせられるのである。

第二 教育者と差別問題

學校教育の實施上最も重要な要素は教育者である。如何によりき教材と設備が整備せらるゝとも、これが運用を掌るべき教育者にしてその取扱上に缺くるところがあるならば、教育の効果はその大半を没却せらるゝと云つて差しつかへないであらう。特に融和教育の實施は、人格そのものゝ問題なるが故に、教育者そのものゝ人格如何は本教育の生命を決定するものともいふべきである。

斯くの如く小學校に於ける融和教育實施上、教師に期待さるゝところ多々あるのであるが、教育者といへども亦社會の一員にして、その社會に存在する社會的差別思想、傳統的因襲觀念等の影響を免るゝことは至難である。こゝに於て學校教育の諸方面に於て屢々不祥事件を惹起するの例に乏しくないのである。

而してこゝに以上のことがらを實例を以て觀るに、次の表は神奈川縣に於けるこれが一事例にして本問題に理解ある教師の下に於ては理解ある兒童多く、理解なき教師の下にありては兒童の差別濃厚なることを相關的に示したものである。

第四節 小學校に於ける問題の實相

第一章 小學校教育と融和問題

| 計 | 不明のもの | 理解なきもの | 理解してゐるもの | 教師の態度に對する児童數 | |
|---|-------|-----------------------------|----------------------------|--------------|----------|
| | | | | 理解ある教師の所 | 理解なき教師の所 |
| | | 眞に短所を羅列するもの 賤視觀念濃厚と認むるもの | 眞に理解してゐると認むるもの 同情の程度のもの | 二九 | 一一 |
| | | | | 六 | 二 |
| | | | | 七 | 五六 |
| | | | | 四 | 一〇 |
| | | | | 四八 | 七九 |
| 計 | | | | 一四 | 一〇 |
| | | | | 四 | 一七 |
| | | | | 一三七 | 五八 |
| | | | | 四 | 八〇 |
| | | | | 四〇 | 四〇 |
| | | | | 計 | 計 |

更にこれらの缺陷のため、全國に於て昭和六、七、八の三ヶ年間に於て教師の態度により差別事件を惹起し、遂にその府縣下の融和事業團體に於てこれが解決並に調停に當りたる主要事件を示せば左の如くである。

(融和事業年鑑に依る)

| 事業中差別 | 年次 | | | 計 |
|-------|-------|-------|-------|---|
| | 昭和六年度 | 昭和七年度 | 昭和八年度 | |
| 事件 | 一 | 一 | 一 | 三 |
| 計 | 一 | 一 | 一 | 三 |
| | | | | 二 |

而してこれら教育者の關係する事件のうちには、教師の積極的態度より、その歴史教授並に訓練等に於て實施せる事項が児童の保護者の方面より問題化さるるが如き場合も少くないであらう。然しながら教育者にして眞に本教育に對する眞摯なる態度と熱意を有するならば、斯くの如き問題は幾何もなくして解決せられ、眞の融和教育の本旨が徹底せらるゝであらう。

第三 學校經營上の問題

學校に於ける本問題との關係は以上述べたる如く、生徒及び教師との關係のほかに、更に學校そのもの、教育經營上の諸關係に於て介在さるゝことが尠くない。一例を擧ぐれば學級に於ける児童の席

第四節 小學校に於ける問題の實相



次、位置等に對し屢々問題化さるゝこと等で、これを明確なる差別的意志より部落兒童なるの故を以て敬遠し、他とその取扱を異にするが如きは苟も教育的立場にある者として考へ得られざることであるが、これを兒童の居住地區、成績、身體及衛生上等より處理する時、偶然にして部落兒童を特別扱ひになすが如きこと等は往々にして有り得ることであらう。眞に教育の徹底を期する上より明確公正なる態度を以てこれに臨むことは云ふまでもなきことであるが、それとともに更に他の多數の兒童及び父兄に奇異の感を抱かしめ、問題を惹起し易き等の事象は成るべくこれを避くることに留意すべきである。

又學級の編成方法に付ても右と同様のことが云ひ得らるゝであらう。

更に廣き立場より觀れば、教育行政上の差別的取扱より、學校そのものが部落兒童のみを收容すべく設立せられ、或は部落兒童を敬遠して該地區に分教場を設置するが如き、その他當然合併することの教育行政上又は經濟上より合理的なるにも拘らず、部落を忌避するの故を以て敢てこれを拒否するが如き實例が過去に於て少くなかつた。

これらのことは教育者そのものゝ全責務と云ふこと能はざるも、その身教育に携はるものとして融和教育の完成のため、これら教育機構上に於ける差別事象の撤廢と平等化のため考慮を用ひらるべきであらう。

第五節 融和教育の使命

第一 融和教育の意義並要旨

融和教育とは融和問題解決上に於ける教育的立場より爲す之が對策である。而してこゝに謂ふところの融和問題とは、本書第一章融和問題の意義に於て述べたところの國民生活上、封建的差別觀念に煩ひせらるゝ精神的、社會的、並に經濟上等諸般の關係に於ける障礙を除去し、且つ多年差別壓迫せられ來つた内部同胞の自覺更生を期し以て全國民の平等階級の生活を期せしめんとする問題である。即ち融和教育は實にこれら諸般の運動の基調たる精神的方面、殊に教育方面よりする一對策である。故に融和教育は、之を消極的に觀れば國民の因襲的差別意識を芟除し、更に積極的には社會生活上並に國家生活上公正妥當なる人格と、平等なる社會國家生活に資すべき之れが社會意識並に國民意識とを涵養し、以て完全なる國民生活を期せしめんとする方策であるといふことが出来る。

而して更にこれを本質的に觀れば、人間教育そのものであつて、完全なる人間教育の行はるゝところに融和問題その他すべての社會問題は解決さるべきであらう。融和教育はこの意味に於て人間生活

に關する實際的、社會的教育と觀ることが出来る。

而して以上の融和教育の本質となるべき『要旨は』左の如くである。

- 一、人格尊重四海同胞の精神を涵養すること
 - 二、日本民族の成立を明らかにし國民一體の精神を涵養すること
 - 三、因襲的差別觀念の根絶に努むると共に徹底せる自覺に基ける向上發展の精神を涵養すること
- 即ち第一項は相互の人格の尊嚴性を認め、これが同胞親愛の精神並に正義人道に立脚せる人類相愛の根本精神を涵養すること。

第二項は日本建國の精神に自覺し、日本民族の融合一體の發生並にその發展を明確ならしめ、現在の九千萬同胞はすべて、一君萬民、みな同胞であり一視同仁の 皇恩の下に相愛團結すべきの精神を涵養すること、

第三項は以上の精神に基きて我國多年の封建的差別觀念を絶滅を圖ると共に、他方これら多年差別壓迫せられ來つた部落民の人間の、社會的、國民的自覺發奮に依り國家社會生活に於ける平等の地位を齎し、招來せんとするの更生精神を涵養することである。

第二 融和運動に於ける融和教育の地位

融和教育は融和運動に於ける教育的一方策であるが故に、これが具體的方策を述ぶる前に一應融和運動の對策一般を考究するの必要があるであらう。

融和運動はその初期に於ては社會一般に對する啓蒙運動によつて開始せられた。然しながらその後幾多の變遷を経て今日に於ては部落内部の自覺更生に依る運動を中心となすに至つた。融和問題は現代の社會に於て、部落が一般社會より異なる社會關係に於て存在することに因由する問題である限り部落そのものが社會一般と同等の社會關係にまで向上發展せねばならない。そこに部落民自からの自主的發展の力が問題解決の主要なる要素となり、原動力とならねばならぬことは明かなることからである。

而してこの部落内部の自覺更生の運動には、種々の精神的、經濟的並に社會的自覺に基づく諸施設が實施せらるゝに至つた。

之に對して融和教育は精神運動であり、教育文化に關する運動方策である。即ちそれは主として封建的因襲觀念交除の運動であつて、一方に於て一般社會の賤視差別觀念を打破すると共に、他方部落内部に於ける封建的觀念に因由する被差別意識、自己卑下觀念の廢除を目的する運動である。

而して以上の融和教育の基調は更に一般社會に於ける封建的社會事象、産業經濟上に於ける封建的産業經濟機構、並に政治的封建制の打破等の運動に發展し、又内部に於ける自覺精神の基調は

社會經濟上及政治上に於ける向上發展への基礎となつて行くのである。

即ち融和教育はこれらの融和問題解決上の基礎的方策に對する精神的基調を組織的、科學的に與ふる教育運動である。

第三 融和教育の方途

融和教育はこれを對象に依つて分類すれば、家庭教育、學校教育並に社會教育に分たれるであらう

一、家庭 教育

人生最初の教育は家庭に於て行はれる。完全にして理想的な家庭こそ幼兒にとつて唯一の良き教室である。この點に於て完全なる人間教育としての最初の融和的教養は、家庭に於ける教師たる家族の手によつて行はねばならない。又家庭教育は小學々齡以後に於てもその教育的機能を有するが故に日常の生活經驗の上より父母、兄弟等の本問題に理解ある教育的考慮が肝要である。

又家庭教育を補ふための幼稚園、保育所託兒所等に於ても、融和問題の上より人間教育の第一課が基礎的に實施せらるべきである。

二、學 校 教 育

教育を最も組織的科學的に實施し得るのは學校教育である。融和教育はこの點に於て學校教育を最

も重要視するのである。

而して融和教育に於ける學校教育は主として小學教育、師範教育及び中等教育等に於て實施せらるべきである。

即ち小學校教育は兒童に國民的素養を與へ、國民的志操を涵養するを主たる目的とするものであつて、融和教育の目的も亦國民意識並に國民的志操陶冶の問題なるが故に全く小學校教育の目的と一致さるべきものである。

師範教育に於ける融和教育も、これと同様の意味に於て更に積極的に重視せらるべきである。

中等教育は更に中堅的國民を養成するものなるを以て、より一段と高き組織的融和教育の實施により本問題に徹底せる教育的考慮が行はねばならぬ。

三、社 會 教 育

社會教育はこれを年齢によつて分類するならば、青年教育及び成人教育に分つことが出来る。

青年は將に社會の中堅となるべき清新純情意氣旺盛の時代にして、青年の持つ使命と意氣とは國家社會の盛衰を表現するものである。この意味に於て青年自身の教養のため、惹いては將に展開されんとする平和と協同の新しい時代への準備として融和教育の徹底が期せられねばならない。

成人は現在の社會に存する社會意識、傳統的觀念等を最も濃厚に把持するものである。この點に於

て融和問題の障りとなるべき封建的差別觀念は成人層に於て最も深刻である。而して一面現在のあらゆる社會機構に於てその重要な地位にあるも亦成人層である。この點に於て成人の把持する差別意識の排除並に積極的教化に對しては融和教育上最も留意すべきものである。又これが惹いては少青年に及ぼす感化影響の點より考ふるも重要視せられねばならない。

第六節 小學校に於ける融和教育の重要性

第一 兒童融和教育の重要性

兒童期に於て環境より受くる差別觀念の感染並にこれが意識化は、本章第三節に於て述べたる如く、概ね小學校低學年の初期に於て既にその萌芽を發し、中學年後期より高學年に至る間に於て之が影響最も甚しく、高學年末期に於ては既に抜くべからざる差別觀を意識するに至るのである。而してこれら兒童期に於て感染し意識せられたる封建的差別觀念並に被差別意識は、過去數百年の間に培はれ來つた因襲的觀念なるが故に、その深刻且つ執拗なることに於て恰も先天的意識の如く、而して又兒童をめぐる一般的环境は、社會觀念としてこれら封建的觀念に充たさるゝを以て、これを爾後の教育教

化の力により芟除せんとするも、それは極めて至難のことである。

それ故に、この差別意識の發生より、これを意識化するに至る小學校學修期間に於て實施する融和教育は最も重要視せられねばならない。

第二 融和教育に對する態度

以上の如く、兒童はこれをそのまま現在の因襲的觀念に圍繞せらるゝ一般社會環境に放任するならば、その生長發育と共に差別意識の發生並に之が發展は當然であつて、この現實相に鑑みて、それに對し適切なる教育感化の必要が認められねばならぬのであるが、尙ほ從來より小學校に於ける融和教育の實施に對し、次の如き批判をなす人々が尠くなかつた。いまそれら二三の例を擧げて小學校融和教育の重要性並に明確なる態度を以てこれに臨むべきことの、如何に必要なかを考察してみやう。

一、融和教育は有害であるといふもの

小學校に於て特に融和教育を實施することは、差別觀念の發生せざる兒童にことさらに差別事實を教ふることになり、その結果はかへつて反對に兒童に差別觀を興ふることゝなるが故に、これらの特別なる考慮對策を有せざるべきといふもの。

二、一般教育に任せて置けばよいといふもの

第一章 小學校教育と融和問題

教育はすべて全人の完成を目標とし、特に小學校教育は國民教育の基礎にして國民的情操を陶冶訓練するものであるから、この理想が實現し徹底されれば、差別意識などはその間に介在し發生するが如きことは出來ない。それゆゑ國民教育の上に特に融和教育などを實施する必要なしといふもの。

以上の所説を批判するに、第一の所説は兒童並に一般環境に全く差別意識並に差別觀念なきものとしてこれを獨斷的に考察せるもので、これは前述の實例を以て示せる現實上の兒童の差別意識の發生過程を無視するものであると同時に、又たとひ低學年に於てその發現なくとも、總てこれが發生への潜行的過程を辿りつゝあるものなるを等閑視するものである。而して更に融和教育の方法論に對する認識をも缺くものにして、自信ある教育方法の研究確立によりて融和教育の必要を諒解するに至るであらう。

更に第二の所説は、現在の社會に存在する差別問題の現状に對する認識を缺くものにして、兒童は絶へず周圍の環境より差別的感化を受け、ために從來幾十年の間國民教育の徹底を期しながらも、尙ほ今日兒童は小學校卒業期に於てその多くのものが差別意識を抱いて校内を去り行くの現状を無視するものである。それは單なる基礎的道德教育のみにては、この現實の社會問題としての國民道德に關する教育的考慮がなほ充分ならざることを立證するものである。

こゝに於て小學校教育上適切なる方法を以て、特に融和教育を實施するの必要が存するのである。

第三 小學校融和教育の進展

小學兒童に對する融和教育の過程は、一般兒童教育の發展過程と何等異るところなく、兒童の學年程度、心身の發達程度を無視し、單なる一律の下にこれを實施せんとするものではない。兒童心理の發展並に差別意識に對する發生過程を考慮し、これに適切なる方法を以て臨むべきものである。融和教育の實踐を危險視又は有害視するは、實にこれらの教育過程を等閑視することに發するものである。

即ち小學校に於ける融和教育發展の第一の段階は、兒童が全く純眞無垢童心のままに生長發育しつゝある時代にありては、兒童のもつ純情そのまゝをよりよく發展生長せしめ更にその道德意識、正義觀を強調し、その上に確固たる同胞意識を強化せしめ、たとひ一般環境より差別的影響を受くるもその培はれたる正義觀によりこれを批判克服し、斷じてそれに感應汚染せしめざる尊き魂と理性的信念に生きる眞の人間意識を養成するのである。

第二に、兒童がたとひ薄弱ながらも差別觀を抱くが如きに至らば、その心理的發展の程度により、道德教育の上より、或は生活訓練の上よりその他あらゆる適切なる方法によりこれが非なることを意識せしめ、これを幼根双葉の裡に摘みとりて其の状態にある意識の淨化を圖り、更に積極的に愛と正義の觀念をそれに置き代ふるべく指導するのである。

第一章 小學校教育と融和問題

第三に、既に明かに差別觀念を意識するに至りたるものに對しては、これを國民道德の上より、或は社會道德、人間道德の上よりその非なることを理性的に訓諭し、又は歴史的事實よりこれを説きて國民皆平等なることを自覺せしめ、或は實際生活の訓練指導の上よりこれを體驗修得せしむる等の積極的方法により國民意識を涵養し、正義人道の愛好者たらしめねばならない。

小學校に於ける融和教育の實施は、以上の段階を以てこれに臨むに於ては何等これを憂慮し危険視する必要なきと同時に、斯かる積極的方策こそ小學校教育上當然これを實施するの要あり、且つ小學校教育の目的完成の上より必要缺くべからざる要素といふべきである。

第四 國民教育としての融和教育

小學校に於ける融和教育はこれを方法論的見地より觀るも、當然且つ必然的に實施せらるべきことは如上に述べたる所により明かなることであるが、更に小學校教育の目的よりこれを觀るに、教則第一條に

小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シテ道德教育及國民教育ノ基礎並其ノ生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス

とあり、更に施行規則第一條には

道德教育及國民教育ニ關聯セル事項ハ何レノ教科目ニ於テモ常ニ留意シテ教授セシメンコトヲ要スとあり、更に同第二條には

修身ハ教育ニ關スル勸語ノ旨趣ニ基キ兒童ノ徳性ヲ涵養シ道德ノ實踐ヲ指導スルヲ以テ要旨トス尋常小學校ニ於テハ初ハ孝悌、親愛、恭敬、信實、忠義等ニ就キ實際ニ適切ナル近易ノ事項ヲ授ケ進ミテハ國家及社會ニ對スル義務ノ一斑ニ及ホシ以テ品位ヲ高メ志操ヲ固クシ且進取ノ氣象ヲ愛シ公德ヲ尙ハシメ忠君愛國ノ志氣ヲ養ハンコトヲ努ムヘシと明記せられてゐる。

即ち小學校教育は國民教育の基礎を授くるものであり、且つこれが國民教育に關聯する事項の教授は他のすべての教科に於ても特に留意すべく重要視し、又これが修身教授は「朋友相信シ恭儉己ヲ持シ博愛衆ニ及ボシ」等の事項を含む教育勸語に基づくものであり、その徳目は親愛、恭敬、信實、忠義等を授け、以て國家社會に對する義務を盡し、國民的志操を固くし忠君愛國の志氣を養はんことを強調してゐるのである。

即ちこのことは取りもなほさず、そのまま融和教育の目的と相一致するものにして、融和問題に於て國民生活に關する障礙を除去し、融和一致、同胞相扶の社會生活を期せしめんとする融和教育は、如上の小學校教育、國民教育の實質的内容であり、現實社會に處する重要な教育的要素たるべきも

第一章 小學校教育と融和問題

のである。

而してこの現實的方面に對しては、文部省訓令第二十二號「兒童生徒ニ對スル校外生活指導ニ關スル件」に於て

時代ノ急激ナル推移ニ伴ヒ社會的環境日ニ月ニ複雑多樣ヲ加ヘ其ノ間兒童生徒ノ心身ノ健全ナル發達ヲ妨グルガ如キ事象尠シトセズ隨テ之ガ爲ニ生ズル不良ナル影響ヲ防止シ且ツ其ノ教育教化ニ資スベキ適切ナル方策ヲ講ズルハ現下ニ於ケル緊切ナル要務ト謂フベシ 云々

と、兒童教育に感化影響を與ふべき非教育的非社會的事象に對する教育的考慮を用ひられてゐるのであつて、これにより本問題に於ける封建的差別觀念に充さるる社會環境に對し教育的方策を實踐すべきことを深く考慮せしめらるるのである。

この故を以て昭和七年十二月文部省は國民教育上融和教育を積極的に取扱はしむべく次官通牒を以て地方長官、直轄學校長、公私立大學長、公私立專門學長宛左記の通り通達するところがあつたのである。

國民融和二關スル件

昭和七年十月三十日 文部次官通牒 第二十二號

最近國民ノ自覺ト官民ノ協力トニ賴リ融和精神ノ普及見ルヘキモノアルヲ致セリト雖尙社會ノ一部ニ暗翳ノ殘

存スルアルハ邦家ノ爲遺憾ニ禁ヘス仍テ身教育教化ノ職ニ在ル者ハ時勢ノ推移ト民心ノ趨向トニ鑑ミ情理ヲ悉シテ人格ノ尊フヘク權義ノ重ンスヘキ所以ヲ明カニシ苟モ差別ニ關スル官廳ノ如キ嚴ニ相戒メテ之カ絶無ヲ期スルト共ニ推廣ノ美風ヲ榮メ共同ノ良風ヲ培ヒ以テ國民融和ノ果ヲ收メ進テ健全ナル社會ノ發達ニ資スル豫致度此段依命通牒ス

斯くの如く融和教育は實に國民教育、小學校教育の目的指標に全然合致するものにして、國民教育、小學校教育當事者の深く考慮せられ積極的に實踐化せられて、その従事せらるゝところの國民教育の目的完成のため、且つ嚴肅眞摯なるべき教育道、教育愛の全きを期せらるべきである。

第六節 小學校に於ける融和教育の重要性

第二章 融和教育實施に關する調査

並に計畫

第一節 兒童並に環境に關する調査

小學校に於て融和教育を實施せんとするに當りては、先づその學校に於ける兒童及びこれが環境に對する周到なる調査が必要である。何となればこれが兒童調査を閉却するときは兒童が如何なる差別意識を有し、如何なる時期よりそれが發現し又如何なる交友關係を營みつゝあるか等の具體的狀態を知るに由なく、更に一般社會環境の調査を無視するときは、兒童に影響を及ぼしつゝあるこれが教育環境の現實相、其他の客觀的事象に關する知識を缺くに到り、學校教育の目的をして萬全の効果を期せしむること能はざるものである。文部省訓令「第二十號兒童生徒ノ個性尊重及職業指導ニ關スル件」に於て

平素ヨリ兒童生徒ノ個性ノ調査ヲ行ヒ其ノ環境ヲモ顧慮シテ實際ニ適切ナル教育ヲ施シ 云々

とあるは大いに以上の點に於て考慮すべき事項であらう。

第一 兒童に關する調査

兒童調査は全校兒童調査と共に、更に部落内部の兒童と一般兒童相互の比較を考究して融和教育實施の資料としなければならぬ。次に例示する各調査事項は、夫々如上の點を併せて比較對象すべきである。

一、就學兒童出席狀況調査

「調査項目」兒童數、出席日數、皆出席日數、全兒童に對する出席比率

二、學業成績調査

兒童別、平均六十點以下の者、同上比率、平均八十點以上の者、同上比率、成績平均點、優等者、佳良者、正副級長

三、操行調査

兒童數、性質(上中下)、言語(同)、容儀(同)、學習狀態(同)、交友狀態(同)、總計(同)

四、服裝調査

着衣數、品質、清潔狀態

第二章 昭和教育實施に關する調査並に計畫

五、學用品整備狀況調査

各學用品の品目、員數

六、身體狀況調査

兒童數、概評(甲乙丙)、清潔(同)、榮養(同)、トラホーム、其他の疾病

七、差別觀念保持の狀態調査

學年別、兒童數、差別を知る者、同知らざる者、比率

八、差別觀念感染の對象調査

學年別、家族より、友人より、近隣の者より、社會一般より

九、差別觀念感染の時期

學年別、入學前

一〇、八及九項の相關々係

學年別、對象

一一、上級學校進學狀況及就職狀況調査

中學校、女學校、實業學校、高等小學、其他學校、各職業別、不就職者

第二 環境に關する調査

一般社會及部落に於ける夫々の環境の調査を行ひ、これらの狀態が如何に兒童に影響するか、又學校教育に對する關係は如何等の點を明かにせねばならない。

一、戸口調査

内部、一般別、戸數、人口

二、教育程度

小學校、中等學校、高等學校其他

三、信仰狀況調査

宗派、敬神狀態(神棚の有無、お供へ、其他の行事等に就て) 崇佛狀態(佛祖の有無、お供へ、其他の行事等に就て)

四、文化施設調査

教化修養機關、集會所、浴場、新聞購入者、ラヂオ設置等

五、名譽職公務員等の狀況調査

内部一般別人員、選出方法及其の狀況

六、各團體の組織狀況調査

組織、役員數、同選出方法並其の狀態

第一節 兒童並に環境に關する調査

第二章 融和教育實施に關する調査並に計畫

七、差別事件發生狀況調査

事件數、種別、解決方法及條件

八、職業調査

各職業別戸數

九、社會的進出狀況調査

官公吏、教員、會社員、工場員、醫師等

一〇、社交狀況調査

冠婚葬祭、其他の諸行事

一一、通婚狀況調査

通婚者數、生活狀況

一二、衛生狀況調査

上下水、家屋、其他の衛生施設

一三、生活狀況調査

一四、資産狀況調査

第三 兒童差別意識の調査方法

兒童の把持する差別意識を知ることとは融和教育上最も重要なことである。而して之が實際の調査は極めて困難であり、且つ慎重なる態度、方法を以て臨まねばならない。即ち事が人格に關する問題であり、又これによつて禍せらるる人々が現存し日常の學校生活、社會生活をなしつゝあり、又調査方法そのものが被験者の差別觀念の意識感染に對し極めて機微なる關聯を有るが故に、之が實施に當りては細心の注意と綿密なる準備をなし、且つ敬虔なる態度を以て臨むことが最も肝要のことである。

一、實施方法

1 學年程度に對する考慮

低學年に於ける差別意識の程度は極めて不明瞭であるが故に、これに對し具體的問題を與ふるが如きことあらば反つて差別意識を感知せしむることになり、折角純情のまゝ生育しつゝある童心を傷けることとなる。故に低學年に對しては一段的道德問題より進み、その意識の發達に應じて漸次具體的事項に入ることが肝要である。又各學年に對しては、夫々の學年に於ける道德意識の程度より一段低き平易なる問題を與へ漸次明確なる問題に進むことが最も適切である。

2 調査を中止すべき場合

各學年の道德意識より一段低き程度の調査問題より順次與へ兒童の差別意識の有無が明確になりし時は、多くのそれ以上の具體的問題を與ふることなく直ちに調査を中止しなければならぬ。然らざれば

第一節 兒童並に環境に關する調査

第二章 融和教育實施に關する調査並に計畫

ば兒童の差別意識を有せざる者にはこれを感じせしむる虞れあると同時に、薄弱ながらもこれを意識する者に對しては自己の把持する差別觀念に對し、更に明確なる差別の世界を意識しこれを發展せしむるの危険を伴ふであらう。

3 調査後の整理を行ふこと

兒童は自己の明確又は比較的不明確なる差別意識を調査に依てこれを發表することにより、從來のこれが意識を更に一段と明確に再意識し、且つ日常の教育に反する不道德なる事項を赤裸々に調査され又發表することに依りその心理状態に不自然なる變化を起すであらう。これをそのまま放置することは教育上最も憂慮すべき結果を來すことは明かなる故、調査後の心理状態に對する整理的教育を行ひ道德意識、融和精神を強調せねばならない。

二、調査方法

調査方法には左記各種の方法がある。各學年程度その他の事情により適宜これを斟酌し實施することが肝要である。

1 穩示法

問題を明確に提示せず抽象的にこれを表現して實施するものにして、兒童の純眞なる精神を傷くることなく下學年に對し實施するに最も適切なる方法である。尙ほ一般的道德問題等の中に本問題を挿

入すれば兒童に對し本問題を意識せしむることなく調査をなすことが出来るであらう。然しながら高學年に對しては勢多くして明瞭なる結果を得るに困難である。

2 現示法

現示法は直接本問題に關する事項を提示するもので、短時間に明確なる意識を調査することが出来る。それ故本調査は比較的高學年に適切であるが、調査後慎重なる整理的教育を實施するの必要がある。

3 口答法並に筆答法

口答法は多くの者に實施する場合は調査時間を多く要し、且つ調査者の感情が兒童に意識さるゝ憂ひあるも、低學年の差別意識薄弱なるものに對しては適宜調査を打切り、差別意識を感じせしめ又はこれを發展せしむるが如き憂ひを少くすることが出来る。

筆答法は多數の兒童を同時に調査することを得て調査時間を少くすることが出来るが、差別意識の夫々異なる兒童に對し一定の問題を與ふるが故に、差別觀念の意識化並にこれが發展に對し危険を伴ふことを免れぬ。この點に於て調査者は問題の選擇をして各學年に最も適切ならしめねばならない。

4 客觀法

兒童の學校生活、交友狀態等に對し調査者たる教師が日常生徒に接觸し視察する方法で大體の概念

第一節 兒童並に環境に關する調査

第二章 融和教育實施に關する調査並に計畫

はこれによりて得らるゝであらう。他の調査方法による結果と比較對照して眞の兒童意識を決定する必要がある。

三、調査問題例

以上の方法によりて兒童に提示すべき調査問題例を示せば次の如くである。

1 暗示法による問題例（主として低學年）

- 一、弟や妹はいちめてもよいか
- 一、兄や姉と喧嘩してもよいか
- 一、良い着物を着てゐる友達は好きと思ふか
- 一、悪い着物を着てゐる人の中に良い友達があるか
- 一、眼の病氣がある人は好きか嫌ひか
- 一、眼の病氣があつてもその中によい友達があるか
- 一、貧乏の家の子供は嫌いか好きか
- 一、家が貧乏でもよい友達があるか
- 一、家が貧乏だから恥しいと思ふか
- 一、家が貧乏でも勉強すれば偉くなれるか

2

暗示筆答法（主として中學年以上）

- 一、どんな職業が嫌ひか
- 一、自分の家の職業は嫌ひか
- 一、自分の家の職業は貴いか賤しいか
- 一、楽しく遊びに行く字は何處か
- 一、好きな字は何處か
- 一、遊びに行つたことのない字は何處か
- 一、嫌ひな字は何處か
- 一、仲の良い友達は何處の字に居るか
- 一、嫌ひな友達は何處の字にあるか
- 一、仲のよい友達の名を順に挙げよ
- 一、遊びたくない友達の名を順に挙げよ
- 一、自分の家の職業は尊いか賤しいか、其の理由は何故か
- 一、嫌ひな友達と遊ばぬ理由は何か
- 一、嫌ひな字に遊びに行かぬ理由は何か
- 一、人の身分には何と何があるか

第一節 兒童並に環境に關する調査

第二章 融和教育實施に関する調査並に計畫

- 一、高い身分は何といふか、又低い身分は
 - 一、自分の身分は高いか、並か、低いか
 - 一、この町村で身分の高い人は何處に、低い人は何處に（の字に）居るか
 - 一、自分の字をどう思ふか
 - 一、この町村に身分の違ふ人がゐるか、居れば何處にゐるか
 - 一、徳川時代の最も低い身分は何か
 - 一、その人達の子孫は今何處に居るか
 - 一、自分の祖先をどう思ふか
- 3 現示法（主として高學年）
- 一、△△職（部落職業）をどう思ふか
 - 一、○○字（部落名）について知つてゐることを書け
 - 一、○○字の人をどう思ふか
 - 一、右のことを知つたのは何年の時か
 - 一、右は誰から聞いたか

第二節 融和教育資料の蒐集及研究・實施機關

第一 融和教育資料の蒐集

融和教育の實施計畫にあたり、これが教育案の樹立上必要なるものは、その参考となるべき多くの資料を蒐集することである。

その資料はこれを二大別することが出来る。その一は融和問題に関する一般的の資で科あり、その二は直接融和教育實施上必要なる資料である。而してこの第一の融和問題一般に関する資料としてはその數多きも中央融和事業協會に於ける次の融和問題關係資料は、大體その目的を補ふに足るものであらう。

中央融和事業協會發行研究宣傳資料

融和資料

| 編輯者 | 題名 | 定價 |
|----------------------|-------|----|
| 第一輯 喜田貞吉 | 融和促進 | 七錢 |
| 第四輯 守屋榮夫 | 我等の使命 | 五錢 |
| 第二節 融和教育資料の蒐集及研究實施機關 | | |

第二章 融和教育實施に關する調査並に計畫

| | | | |
|-----|-------|------------|----|
| 第六輯 | 平沼賦一郎 | 建國の精神と融和問題 | 五錢 |
| 第七輯 | 長岡隆一郎 | 融和事業家に望む | 五錢 |
| 第八輯 | 谷 龍之助 | 融和隨想 | 八錢 |

融和問題叢書

| | | | |
|-----|-------|----------------|-----|
| 第一編 | 三好伊平次 | 融和事業概論 | 八錢 |
| 第二編 | 喜田貞吉 | 融和問題に關する歴史的考察 | 八錢 |
| 第三編 | 三好伊平次 | 維新前後に於ける解放運動 | 一〇錢 |
| 第四編 | 守屋榮夫 | 融和事業の精神 | 五錢 |
| 第五編 | 山本正男 | 明治以後の解放運動 | 一〇錢 |
| 第六編 | 下村春之助 | 青年融和運動の本質とその實際 | 二〇錢 |
| 第七編 | 土屋政一 | 小學校に於ける融和教育 | 二〇錢 |
| 第八編 | | | |

研究資料

| | | | |
|-----|------|---------------|-----|
| 第一輯 | 新見吉治 | 猶太人問題 | 二〇錢 |
| 第二輯 | 下地寛令 | 融和問題の社會心理學的研究 | 二〇錢 |
| 協會編 | | 融和教育資料 | 一三錢 |

研究叢誌

| | | | |
|------|--|-----------------|-----|
| 協會編輯 | | 融和事業研究(年四回發行)一部 | 五〇錢 |
| 同 | | 更生(年六回發行)一部 | 一〇錢 |

宣傳紙

| | | | |
|------|--|--------------|----|
| 協會編輯 | | 融和時報(毎月發行)一部 | 三錢 |
|------|--|--------------|----|

經濟更生資料

| | | | |
|--------|------|--------------|-----|
| 第一編 | 協會編 | 經濟更生運動に關する要綱 | |
| 第二輯 | 同 | 經濟更生への道 | |
| 第三編 | 同 | 自力更生に輝く村々 | 一〇錢 |
| 第四編 | 同 | 産業經濟關係法規要覽 | 三〇錢 |
| 融和事業年鑑 | 山本正男 | 農村的地區の經濟更生 | 八錢 |

融和事業年鑑

| | | | |
|-------|--|---------|-----|
| 協會編 | | 昭和九年版 | 一圓 |
| 協會編 | | 融和促進戲曲集 | 四〇錢 |
| 下村春之助 | | 融和事業の話 | 二〇錢 |

更に第二の直接融和教育に關する參考資料としては次の如きものを蒐集する必要がある。
一、各學級融和教育經營案

第二節 融和教育資料の蒐集及研究實施機關

第二章 融和教育實施に關する調査並に計畫

- 一、各教科融和教授細目
- 一、融和教育的訓話並説話
- 一、同 掛圖、繪畫
- 一、同 童話、詩歌、俳句
- 一、同 唱歌劇、映畫
- 一、同 體操、遊戲、ダンス

尙ほ現在各地に於て以上の資料に關し既に研究發表せられたる資料を擧ぐれば左の如くである。

融和教育資料

(印刷されたもの)

| 著 編 者 | 書 名 | 發 行 所 | 定 價 |
|---------|---------------|----------|-----|
| 大和同志會 | 融和事業の教育方面 | 奈良縣廳内共會 | |
| 三重 縣 | 兒童融和教育研究會發表事項 | 三重縣社會課 | |
| 神奈川縣育和會 | 融和讀本 | 神奈川縣廳内共會 | |
| 同 | 兒童融和教育に關する調査 | 同 | |

| | | | |
|---------|--------------------|-----------------------|-----|
| 藤 範 見 誠 | 兒童融和教育教案 | 東京共會 | 品 切 |
| 同 | 兒童融和教育研究 | 和歌山縣伊都郡應其村同朋會 | |
| 同 | 小學校に於ける融和教育的具體的方法 | 同 | |
| 朝來小學校 | 兒童融和教育の實際 | 和歌山縣廳内同和會 | 四六錢 |
| 王子小學校 | 融和教育に立脚せる各教科實際的指導案 | 同 | 一圓 |
| 綴喜郡支會 | 修身科に於ける融和教材の着眼點 | 京都府綴喜郡井手善奈場内京都府親和會同支會 | |
| 岐阜縣社會課 | 教科書と融和問題 | 同課 | |
| 和歌山縣同和會 | 融和教育に立脚せる各教科實際的指導案 | 同 會 | 一圓 |

(購置されたもの)

| | | | |
|----------------------|----------------|------------|--|
| 大正小學校 | 融和教育修身例話 | 奈良縣南葛城郡其校 | |
| 同 | 同 參觀案内 | 同 | |
| 同 | 同 教材研究 | 同 | |
| 同 | 我が校の融和教育 | 同 | |
| 朝來小學校 | 我が校に於ける融和教育の實際 | 和歌山縣西牟婁郡其校 | |
| 同 | 兒童融和教育說話集 | 同 | |
| 第二節 融和教育資料の蒐集及研究實施機關 | | | |

第二章 融和教育實施に關する調査並に計畫

| | | |
|----------|---------------------------|------------|
| 同 | 融和教育教科調査 | 同 |
| 王子小學校 | 兒童融和教育の實際 | 同縣那賀郡其校 |
| 富田小學校 | 融和の友 | 和歌山縣西牟婁郡其校 |
| 同 | 本校融和教育の努力點 | 同 |
| 北富田小學校 | 我々の融和教育に對する態度及留意點 | 和歌山縣西牟婁郡其校 |
| 橋本小學校 | 特設修身科指導案 | 和歌山縣伊都郡其校 |
| 橋本女子補習學校 | 橋本女子補習學校に於ける融和教育の計畫の骨子に就て | 同 其校 |
| 中島源三郎 | 兒童融和教育 | 京都市崇仁小學校 |
| 潮江小學校 | 融和教育教授案 | 高知市其校 |
| 岩田小學校 | 融和教材參考資料 | 和歌山縣西牟婁郡其校 |
| 鈴木孝夫 | 本校に於ける融和教育具體案 | 同 |

第二 融和教育に關する研究並に實施機關

一、融和教育研究會

小學校に於ける融和教育は直接的には夫々の學校に於て研究實踐すべきものであるが、さらにその目的を同じふする市郡府縣等の小學校職員相互間に於て、これが研究並に實踐上の機關を組織することは最も適切なることである。

而して如上の目的のため現に組織されつゝあるものは融和教育研究會の名稱の下に既に實踐化されつゝありて府縣單位としては埼玉、廣島、高知等にあり、郡市單位のものは京都、岐阜、和歌山、滋賀等に設立せられてゐる。

これらの融和教育研究會は、各地に於ける融和教育實施上の研究機關であると同時に、且つこれが實行上における有力なる組織であつて、直接小學校教育に携はる人々の自發的なる意志により組織せられ、本教育の實施に關する科學的検討と、問題解決に對する旺盛なる献身的努力とによりその組織が生まれ發展せられつゝある。

而してこれらの研究會において行ふ施設事業は概ね次の如くである。

研究方面としては

研究會、調査、座談會、講習會、研究發表等

實踐方面としては

講演會、映畫會、機關紙發行等である。

第二節 融和教育資料の蒐集及研究・實施機關

第二章 融和教育實施に關する調査並に計畫
次に參考として、二三の地方における研究會の組織を擧ぐれば左の如くである。

京都市兒童融和教育研究會

組織

會員 市内教職員

事業 一、巡回講話會

一、講話資料配布

一、研究會開催

一、教材研究

規約

第一條 本會ヲ京都市小學校兒童融和教育研究會ト稱ス

第二條 本會ノ事務所ヲ陶化尋常高等小學校内ニ置ク

第三條 本會ハ教育者ノ重責ヲ自覺シ兒童融和精神ノ涵養ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スルため左ノ事業ヲ行フ

一、座談會

二、講演會

三、會誌發行

四、其他必要ト認ムル事項等

第五條 本會ハ京都市内ニ奉職セル小學校教育者ニシテ本會ノ趣旨ニ賛同シタル者ヲ以テ會員トス

第六條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

委員長 一名

副委員長 一名

委員 若干名

第七條 委員長、副委員長ハ委員會ニ於テ委員ハ總會ニ於テ選舉ス、但シ役員ノ任期ハ一ケ年トス

第八條 委員長ハ會務ヲ總括シ本會ヲ代表ス、委員長ハ委員會及ビ總會ノ議長トナル

副委員長ハ委員長ヲ輔佐シ委員長事故アル時ハ之レヲ代理ス

第九條 本會ニ顧問若干名ヲ推戴ス

顧問ハ本會ノ趣旨ニ賛同セラレタル京都市内小學校長ニシテ委員長之レヲ推戴ス

顧問ハ委員長ノ委嘱ニ依リ顧問會ヲ開催シ重要會務ヲ審議ス

第十條 委員ハ毎月一回委員會ヲ開催シ、會務ヲ審議ス

第十一條 本會ハ春秋二回總會ヲ開キ會務ノ報告委員ノ選舉(春季)會則ノ改廢並ニ決議ヲナス

第二節 融和教育資料の蒐集及研究實施機關

第二章 融和教育實施に關する調査並に計畫

第拾二條 本會ニ會計係、記録係若干名ヲ置キ委員中ヨリ委員長之レヲ任免ス

第拾三條 本會ノ經費ハ補助金、寄附金及ビ會費ヲ以テ之レニ充當ス

會費ハ一ヶ月金拾錢トス

本會ノ會計年度ハ四月一日ヨリ初マリ翌年三月卅一日ヲ以テ終ル

和歌山縣下に於ける融和教育研究會

規 約

第一條 本會ヲ融和教育研究會ト稱ス

第二條 本會ハ教育者ノ重責ヲ自覺シ融和促進ニ關スル基礎的教育上ノ研究ヲナシ融和精神ノ涵養ヲ圖ルヲ目的トス

第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲ニ左ノ事業ヲ行フ

- 一、研究會
- 二、講演會
- 三、講習會
- 四、映畫會
- 五、其他必要ト認ムル事項

第四條 本會ハ第二部教育研究會内ノ各校ニ奉職セル教職員ニシテ本會ノ趣旨ニ賛同シタル者ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

- 一、會長 一名
- 二、副會長 二名
- 三、委員 各校一名

第六條 會長ハ第二部教育研究會長ヲ推薦シ副會長ハ朝來、富田川小學校長ヲ推薦ス委員及會計ハ會長之ヲ委

嘱ス

第七條 會長ハ本會ヲ統率シ副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アル時ハ之カ代理ヲナス

第八條 委員ハ各校ヲ代表シ會務ニ從事ス

第九條 會計ハ會長ノ指示ノ下ニ本會ノ會計事務ヲ處理ス

第十條 本會ニ顧問若干名ヲ推戴ス

第十一條 會議ヲ分テテ總會及役員會トナシ總會ハ毎年五月役員會ハ毎年二月之ヲ開催ス但シ必要ニ應ジテ臨時會ヲ招集スルコトヲ得

第十二條 本會ノ經費ハ寄附金及和歌山縣同和會補助金ヲ以テ之ニ充ツ

第十三條 本會々則ノ變改ヲ要スル場合ハ之ヲ總會ノ議ニ附ス別段ノ規定ナキ事項ハ會ニ於テ處理ス

二、融和教育主任の設置

小學校に於ける融和教育は夫々の學校の教育方針に含まれ、これが校是となり校長以下各職員全部がこれに携はるべきであるが。その中に特に本教育に關する主任を設け全校の關係事項を處理せしむることは適切なる方法である。

第三節 融和教育方針並に教程の樹立

第一 融和教育方針の樹立

融和教育の要旨は第一章に於て述べたるが如く、

- 一、人格尊重四海同胞の精神を涵養すること
 - 二、日本民族の成立を明かにし國民一體の精神を涵養すること
 - 三、因襲的差別觀念の根絶に努むると共に徹底せる自覺に基ける向上發展の精神を涵養すること
- であるが、この綱領に基き夫々の小學校に於て融和教育の實踐に關する根本方針を確立することが肝要である。これはその地方に於ける實情、即ち差別狀態、社會的環境の諸態様によつて決定せらるべきものである。

而して本教育方針の決定に當りては、これを其の小學校に於ける一般教育方針の中に含ましめるか、或は特にその學校における融和教育方針として別に樹立するかは、夫々の地方並に學校の教育現狀を參照して決定するを妥當とするであらう。

今各地に於て制定せられたるこれらの方針に關する事項を列擧すれば左の如くである。

1 小學校に於ける一般教育方針中に含まれたるもの

- 一、兒童日常普汎の教育中融和教育の徹底に寄與し得る點を考究して指導信念の確立を期す。
- 一、御聖訓の御趣旨に準じ、本校教育方針に則り、一般教育を通じて因襲的差別觀念の交除に力め以て同胞諧和の精神を養ふと共に、一方謂はれなき諦觀的自己卑下の念を排し自己人格發展の念を涵養せんとす。

2 特に別に定められたるものには

- 一、堅實なる國民的道念の涵養を期す。
- 一、立憲國民たるの自覺を與へ公正自治の精神を涵養す。
- 一、人間禮讚人格尊重の本義に徹せしめ、和親協調の融和精神の實現を期す。
- 一、職業に對する理解を深め勤勞を愛好し、質實剛健禮讓に富み美を愛好する高雅なる徳操の陶冶を期す。

第二 融和教育教程の決定

教育の眞の効果はその對象とする被教育者に於て教育的作用を受納し、これを自己の心理のうちに

第二章 融和教育實施に關する調査並に計畫

諒解し把握するものでなければならぬ。即ち融和教育として重要なるべき道德教育についてこれを観るに、その教授は兒童の道德的自覺を喚起して不斷に道德的生活を創造せしめんとするものであるから、兒童の徳性が如何に發現し、如何に發達するかを詳かにせぬかぎり、その教授は何等の手がかりを得ることは出來ない。

この點に於て道德的意識の發達についてマクデニカルはこれを次の段階とした。

第一、快苦に支配された本能的行動の時期

第二、本能的衝動が多少社會的環境に支配されたる賞罰によつて加減する時期

第三、主として社會的の毀譽褒貶を豫期して行動を管理する時期

第四、社會的の毀譽褒貶にかゝはらず、自ら正しいと信する理想によつて行動を統制する時期

又我が小學校施行令第一條に

何レノ教科目ニ於テモ其ノ教授ハ兒童ノ心身發達ノ程度ニ副ハシメンコトヲ要ス

とあるは以上の點を明示せるものに外ならぬのである。

又特に融和教育の場合に於ては、兒童の把握する差別觀念の程度によりその對策を最も適切ならしめねばならない。即ち融和教育の實踐上最も肝要なるは兒童の差別觀念の發生せざるうちに人間尊貴の觀念の基調を培養すること、特にこの點が重要視せられねばならない。



この點に於て兒童の差別並に被差別意識の調査は最も重要なるもので、それは融和教育實施上の効果を決定するものを謂つても差しつかへないであらう。

先づこれが融和教育教程の樹立に當つて、その客觀的狀態を段階的に觀れば次の如くである。

- 一、全く差別を認めず且つ部落の存在をも知らざるもの
- 二、部落の存在を意識するも差別觀念を持たざるもの
- 三、部落兒童を單なる地區、職業等の異りたるものと見るもの
- 四、前項の上に差別意識を稍々考へつゝあるもの
- 五、差別觀念を認むるもの

これらの各階程に對し夫々適切なる教育對策を要するのであるが、兒童に於けるこれが學年程度の區別は何れの地方に於ても、一律平等に決定するは困難のことで、學年の階梯を低學年、中學年、高學年に三區分するにしても、同じ低學年に於ても全く差別意識を持つものと然らざるものとがあり、これに一定の教育方針を以て臨むことは非常に困難なる場合が少くないであらう。

しかしながらこの差別意識の發達と共に、さらに兒童自身の心理的發達、道德意識の發達等を見れば、大體年齢別即ち學年別によりこれらの差別意識も發達しつつあるものと見て、それに依り區分するを大體に於て妥當とするであらう。

第三節 融和教育方針並に教程の樹立

第二章 融和教育に實施に關する調査並に計畫

故にこの融和教育の決定に當りては、これら兩者を併せて考慮し適切なる教育階梯を設定するを要するわけである。

而してこゝに於ては便宜上低學年にありては前記差別意識發達段階に於ける第一若しくは第二とし、中學年を第三若しくは第四とし、高學年を第五に該當するものとすれば、これに對する教育課程を次の如く考察することが出来るであらう。

一、低學年(尋常科第一、第二學年)

この時代は差別意識を全く把持せざるか又は部落の存在を知るも何等これを區別する意識を有せざる時代と見做すこととする。

この時代は幼時時代より發達し來れる兒童の自覺性、知性、人間性、社會性、理想性等が次第に發展し形成せられつゝある時代にして、これらの意識の發展段階に對し、人間意識の基調を培養し人間尊貴の搖ぎなき觀念を興へるのである。この教育にして充分徹底するならば、たとひ中學年若しくは高學年に於て周圍の環境より差別觀念の感染を受けんとする際これを克服し、決してそれに侵されざる確固たる意識を興ふことが出来るであらう。即ちこの時代に於ける融和教育は、その豫防的教育ともいふべきで本教育の基調をなすものである。若しこの時代に於ける教育を無視し、或はこれを輕視するならば、一度差別觀念感染するや容易に拭ふべからざる因襲的觀念に囚はれ、爾後如何にしてこ

れを免除せんとするも極めてそれを困難とするのである。

故にこの時代に於ける教育方法は、特にその初め直接融和問題に觸るゝことなく、左の如き取扱ひをなすことが肝要である。

1 知的方面

知的方面に於ては一般的道德教育、又は童話、神話等の教材により、人間尊嚴の萌芽を培養することに留意する。

2 情的方面

情的方面としては自然界に於ける鳥蟲類、その他動物愛護の情操、花卉その他樹木を愛育する等自然界に於ける森羅萬象に對する生きとし生けるものに對し、その生命を愛好するの美はしき情緒、情操を培養することとする。

3 意的方面

この低學時代は特に模倣により一定の動作を以て習慣となし、さらに意志を決定する重要な時代なるが故に、人間尊重の善良なる事例等によりこれを模倣せしめ、融和的習慣を形成せしめ、確固たる人間尊重の意志を決定するやう教育上留意することが肝要である。

二、中學年(尋常科第三、第四學年)

第三節 融和教育方針並に課程の樹立

この時代は兒童の心理狀態稍々進みて部落の存在を知り、其所に居住する人々の集團的状態並に職業、生活様式等の一般と異りたるものあるを意識し、やがてこれらの意識の上に漸次差別意識を發生しつゝある時代である。

この時代の兒童意識は、これらの部落の存在又は特定地區又は特殊職業従事者に對し、他の一般と異りたる状態を認むる單なる區別的意識を持つ上に、さらに家庭、環境等による差別的現象を漸く認識し、以上の單なる「區別」に對する意識の上にこれが賤視觀念を培養しつゝある心理的發展を示すのである。

而して更に一般的には道德意識、社會感情等を培養し、習慣は次第に形成され、意識も漸く決定されんとする時期で、融和教育に於て直接問題に觸れんとする第一段階の基礎的陶冶を要する時代である。

この時代に於ける教育としては、

1 知的方面

一般的區別よりこれを更に賤視的差別に進展する過程なるを以て、人間の集團生活、職業の尊貴、諸種の社會生活様式等を明瞭に教へ、その間何等の差別あるまじきことを知悉せしめ、これを差別的觀念に進展轉化せしめざるやう教授せねばならぬ、又他の諸種の社會環境、例へば家族、近隣の人

々、朋友等の差別觀念を感染し易き時代なるを以て、これを感受することなく、低學年時代に培養せる人間尊重の確固たる知、情、意の上にこれを克服し、或は不幸にして差別意識を把持するに至りたる時と雖も、それは未だ機械的模倣にして確然たる意識を決定するに至らざるものなれば、徹底せる訓育によりこれが幼根双葉の時代のうちに摘除せなければならぬ。斯くして最も重要なる融和教育の第一歩を誤らざるやうに努力する。

2 情的方面

低學年時代に於ける自然界即ち山川草木に對する美的情操、鳥蟲類に對する情操より次第に同級同組の學友に對する友愛の情に進み、更に全校の他の學級にある多くの學友に對し、又は郷土の兒童その他の人々に對する高尚なる對人間的情操にまで發展し得る時代なるが故に、前期時代より深められたる友愛愛郷等の精神を強化するに努め、その基調に立ちて人と人との間に何等の人格的差別を認めざるやう、人間尊嚴の美的情操を培養し、更に萬物に對する感謝等のより深められたる敬虔なる意識にまで進展せしむ。

3 意的方面

前記時代に於ける外部の模倣による習慣の集成は更に明確にせらるゝが故に、その發展をより確實に習性化せしむるやう確然たる陶冶をなし、協同互助融和相愛の意志を確立せしむるやう實踐的に指

第二章 融和教育實施に關する調査並に計畫
導することが肝要である。

三、高 學 年（尋常科第五、第六學年及高等科）

この時代は小學校に於ける最後の段階にして、國民教育としての教養の概要を將に終へんとする最高教程にあるので、この時代に於て完全に小學校教育の目的を果すべき重要な時期である。

而して融和問題の方面よりこれを觀るに幸にして環境の感化宜しきを得、且つ教育的効果の充分遂げられたる者にありては、確固たる人間尊重の精神を把握し、且つ従つて差別問題に對する正しき批判力を有ち、たとひ周圍に差別事象存在するも、これが社會的惡なることを嚴正に識別するの能力を持つに至るのである。然しながら不幸にしてその環境の劣惡と教育的効果の不完全なる時は、既に拭ふべからざる差別並に卑下の意識を既に培ひ居るものにして教育上最も困難を要するのである。

然らばこれらの時代に於ける教育方法は如何なる標準におくべきか。

1 知的 方面

既に社會現象として部落の存在を知り、一方社會觀念として差別觀念の存在を知悉するが故に、この時代は前記二時代に反し明確に部落の存在並にこれが社會的に差別觀の存在することを意識せしめ、而かもそれは正義人道の上より、國民生活の上より全く矛盾せるものなることを明瞭ならしめ、且つ歴史的考證等によりその發生よりの過程を説明し、人種的に何等異りたるものにあらざることを明かにせねばならない。

にせねばならない。

2 情的 方面

現實社會上に於ける人間生活の實狀に徹底せしめ、幾多の社會的缺陷により苦惱しつゝある人々に對する深刻なる人間味に溢るゝ美的情操を養ひ、自他同一の境地に達するの一如觀、宗教的情操にまで發展せしむべく、崇高なる人格の完成に努力しなければならぬ。

3 意的 方面

この時代に於ては既に他の模倣等による他律的行爲により自己意志を決定すること殆んど稀にして、次第に自律的行爲により自己の意志を決定するに至る階梯なるを以て、自から實踐窮行するの自治的訓練、協同的陶冶等により主として實生活を直接指導せしむるやうになし、同胞相愛、共存共榮、相互扶助等の社會連帶意識を強調實行せしむべく確固たる陶冶訓練をなすを要する。

第三章 小學教科と融和教育

第一節 各科教授と融和教育

兒童に對する融和教育の方法は從來最も慎重に考慮せられ來つたのであるが、これは教育上の實際的取扱に於て適切なる方策を見出し得なかつた故である。斯るが故に小學校教職員にして一旦兒童融和教育に手を染むるも、遂に過りて事件を惹起する等の事例に乏しくなかつたのである。この點に於て兒童に對する融和教育の方法は最も慎重なる考慮計劃の下に行はなければならない。

然らば斯かる考慮の下に實施せんとする融和教育の方法とは何であるか、その最も妥當にして普遍性を有するものは小學校に於ける一般教科の中に、融和的教授を含ましむることが最も適切なる方法である。何となれば、融和教育といふも特に一般教育系統の外にある特殊なる教育にはあらずして、一般教育の最も現實生活に即したる具體的實際的に徹底せらるるところに融和教育の目的が達せらるゝのであつて、換言すれば兒童の教育的効果の完全に期せらるゝ時自からそこに融和教育の目的が達

せらるゝのである。

即ちこのことは一般的基礎教育の上に、日常生活、國民生活に即したる實際の社會問題、教育問題としてこの本問題を取扱ふことであつて、或る特殊の場合には別に融和教育としての教授方法、教材をも用ふることもあるであらうが、これらの特殊なる融和教育といふも一に小學教育、國民教育としての一般的取扱の範疇に屬すべきものであつて、本融和教育の實施により一般教育の完成を期せんとするものに外ならぬのである。

以上の考慮に基きて小學校に於ける融和教育を分ちて

- 一、一般教科教授に於ける融和教育
 - 二、訓練並養護上に於ける融和教育
- とに分類することが出来る。更に融和问题の本質上内部兒童に對する教育をも特に考慮する必要もあるであらう。

更に融和教育を教育要素の上より区分し、その準據すべき一般教科を大別すれば左の如くである。

一、知的教育 明確なる理性を通じて人間尊貴の觀念と同胞愛の道德的徳性を涵養すること。

修身科、國語科、地理科、歴史科、理科等

二、情的教育 美はしき美的情操により人間意識の抱擁性を養ひ、人間最高の道德性を涵養すること

第一節 各科教授と融和教育

と

唱歌科、體操科、圖畫科、綴方科、書方科、郷土科等

三、意的教育 實踐的訓練、共同的作業等により人々の協同諧和、共存共榮の道德的意志を鍛練すること

體操科、郷土科、實業科、手工科等

これら知的、情的並に意的教育及び夫々の教科は、勿論各々獨立せるものではなく、相互に一の教育體制の中において、最もよく教育の効果を擧げ得べきことは謂ふまでもなきことである。小學校令施行規則に於ても

道德教育及國民教育ニ關聯セル事項ハ何レノ教科目ニ於テモ常ニ留意シテ教授セシメンコトヲ要ス 各教科目ノ教授ハ其ノ目的及方法ヲ誤ルコトナク互ニ相聯絡シテ補益センコトヲ要ス (第一條) とあるは右の點に對して大いに考慮すべきことである。

第二節 修身科

人間最高の生活は道德的生活にして道德的生活の根柢をなすものは道德的人格である。されば教育

は道德的人格の確立を以て究極目的とするものである。融和教育に於ては自己人格の完成を期し、更に他人の人格を尊重しこれを傷つけざらんとすることを理想とするが故に、融和教育の達成こそ道德教育の完成であり人間最高の生活基準と云ふべきである。

然しながら素より他の一般普通教育の教科目といへども一として道德的人格の涵養に關しないものはないが、一面に於ては各教科目はそれぞれ特有の目的をもつてゐるから、道德的人格の陶冶に對しては比較的間接の立場にあると観るべきである。直接に兒童の生活を導いて融和的精神の涵養に資すべき道德的人格の啓培を任務とするものは修身科である。

修身科教授の目的は道德的人格の基礎を確立せしむるにあるが、道德的人格の涵養は道德的行為の因由する根源を啓培するにある。而して道德的知見・道德的情操・道德的意志は渾一的に發動し實踐せらるべきものであるから、道德的人格の基礎を確立せしむるには、これら三方面の全一的陶冶をはからねばならぬ。

道德的知見とは、人としての義務を認知し正邪善惡を識別するところの意識にして、人はこれによりてよく行為の向ふべき方面を認識する。道德的情操とは、正善を愛好崇敬し邪惡を忌嫌拒否する感情である。而して道德的意志とは、道德的理想を不斷に體現せんとする意志である。

されば徳性の涵養の上に融和教育を考慮すれば次の三方面を陶冶せねばならぬ。

第一は、生活の理想を示してこれに達すべき手段方法を明かにし、以つて道德に関する知識を明瞭ならしむること、即ち自他の人格の尊嚴を確立し人格冒瀆の不徳を否定する渾一融和の理想的社會生活に對する徳性を確立すべきこと。

第二は、同情、愛好、尊崇、憧憬等の道德に関する醇乎たる情操を起さしむることによつて、道德上の知識を實行に導く動機となるべきことであつて、人間性の尊嚴に徹底せる崇高なる理想を憧憬し、人格尊重、融和親善の人間味、人情美による情操を涵養すること。

第三は、實行に關する強固なる意志を養ひ行爲に訴へて道德の眞の價値を發揮せしむべく、同胞愛人類愛への實行者としての實踐的意志を涵養することである。

こゝに於て修身科教授に於ては、道德的理想を知る中に人間性の本義を體得せしめ、他人の人格を冒瀆する差別的行爲による不快感により客觀的事實に對して道德的情操を養ひ、協同融和の美を味ひ實踐指導によつて融和を期せしむるやう指導すべきである。

而して更に融和問題本質の現實的要素の方面より小學修身教育を觀るに、修身科教授の要旨は、我が國民道德の大本たる教育に關する勅語の御趣旨によつて一切を規制し統制せられてゐる。教則第二條に

修身ハ教育ニ關スル勅語ノ趣旨ニ基キテ兒童ノ徳性ヲ涵養シ道德ノ實踐ヲ指導スルヲ以テ要旨トス

とある。この教育勅語の中には融和教育上重要な多くの御徳目を御教示されており、その御趣旨に沿ひ奉るためには多大の融和精神を涵養せしめねばならない。特に御勅語中

「徳光心ヲ一ニシ」「朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ」「知能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ」「公益ヲ廣メ世務ヲ開キ」「國意ヲ重シ國法ニ遵ヒ」「朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ成其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」

等の廣大無邊なる有難き御教示は、融和教育に於て最高の理想とするところであつて、この意味に於て融和教育を除外して完き修身科教授の目的は達成し得られざるものと謂ふべきである。

第一 融和教育關係徳目の體系

修身科の教育は一般的教授に於ても謂ふまでもなきことであるが、特に融和的教授にありては各徳目をして體系的秩序を以てこれを發展的に教授することが必要である。然るにこれが單なる羅列であるならば其の教授は如何に巧妙に行はるゝともその効果は非常に減殺さるゝこととなる。即ちこれがためには第一章に於て融和教育教程の樹立に就て述べたる道德意識の發展に對し、融和教育として必要なる道德的理想を培養することが肝要で、各徳目の教授に際して教師はその徳目の道德體系中に於ける位置目的を明らかに認識し、各個の徳目をその全體系中に織り込むやう考慮し、兒童の道德意識

第三章 小學教科と融和教育

を漸次その目的たる融和精神涵養體系への内に發展させて行かねばならない。
 而してこれが體系的教授は各學年に於ける徳目の組織を明かにすると共に、更に全學年に通ずる發展の體系を樹立する必要がある。即ち各徳目は全學年に通ずる體系中の夫々の學年に於ける一徳目として取扱はれて始めて眞の價値を發揮することが出来るのである。即ち融和教育の實踐上低學年の教授は非常に困難とせられ、その實施を或は無用視し或はこれを危険視する傾向があり、その取扱ひを中學年以上又は高學年に限るべしとの論さへある。然しながらこの中學年或は高學年に於て必要とせらるゝ道德性は、その學年に於て始めて發生するものにあらずしてそれ以下の下學年に於て既にこれが發展への途を辿り來つゝあるものなれば、これが發展過程を認めその上に適切なる取扱ひをなすことが最も妥當なる方法である。かくてこそ兒童の融和教育取扱の低學年教授の可能性と必然性とが認められるのである。こゝに於て修身科教育に於ける融和教育の體系的方途は、これが實踐上最も重要視せられねばならない。

以上の考察に基き、融和教育の教材となるべき修身科の徳目を系統的に分類すれば左の如くである。

一、家庭に関する徳目

| | | | | | | | |
|----|--------|-----|-----|-----|-----|----------|----|
| 題目 | 尋常科卷一同 | 卷二同 | 卷三同 | 卷四同 | 卷五同 | 卷六高等科卷一同 | 卷二 |
|----|--------|-----|-----|-----|-----|----------|----|

| | | | | | | | | |
|------|----------|----------|-------|-------|-------|---------|-------|---------|
| 孝行 | (三)親を大切に | (六)孝行 | (三)孝行 | (六)孝行 | (二)孝行 | 六)忠孝 | (四)孝行 | (五)孝 |
| 友愛 | (三)きやうだい | (七)兄弟仲よく | | (七)兄弟 | (二)兄弟 | | | (六)兄弟姉妹 |
| 祖先と家 | (一九)私のうち | (九)祖先を尊ぶ | | | | (七)祖先と家 | (三)家 | (七)夫婦 |
| 親類 | | (八)親類 | | | | | (五)親類 | |

二、個人に関する徳目

| | | | | | | | | |
|----|--------------------------|--------|---------------|---------------|------------------|----------|--------|--|
| 題目 | 尋常科卷一同 | 卷二同 | 卷三同 | 卷四同 | 卷五同 | 卷六高等科卷一同 | 卷二 | |
| 誠實 | (一三)過をかくすな (十四)うそをいふな | (二五)正直 | (七)誠實 | (一一)忠實 | (二三)誠實 | (一六)良心 | (七)至誠 | |
| 勤勉 | (二二)勤勉 | (一一)勤勉 | (四)仕事に はげめ | (一六)仕事 に励め | (二三)勤勞 | | (一五)勤勉 | |
| 忍耐 | | | (一三)堪忍 | (一二)克己 | (一六)忍耐 (一七)自信 | | | |

第二節 修身科

| | |
|-------|-------------------------------------|
| 習慣及習徳 | |
| 自立自營 | (二) 自分 事は自分で |
| | |
| | (一七) 迷信 に陥るな (一九) よい 習慣を造れ |
| | |
| | (四) 志を立 てよ (一三) 獨立 自營 |
| | |
| | (一一) 自立自營 |
| | |
| | (一六) 自立自營 |
| | |
| | (九) 反省 (一四) 徳器 |

三、社會に關する徳目

| 題目 | 尋常科卷一 | 同卷二 | 同卷三 | 同卷四 | 同卷五 | 同卷六 | 高等科卷一 | 同卷二 |
|----|-----------|-----------------|----------------------|---------|-----------|---------|---------------------------------|---------|
| 友誼 | (四) 友だち | (二七) 友達 に親切に | (九) 友だち | | (一九) 朋友 | | (一九) 禮儀 | (八) 朋友 |
| 禮儀 | | | (一一) 行儀 | (一八) 禮儀 | (二〇) 禮儀 | | (一九) 禮儀 | (九) 恭儉 |
| 殖産 | | | | | (九) 産業を興せ | | (二四) 職業 | (二二) 業務 |
| 共同 | (一六) 近所の人 | | (二三) 共同 (二四) 近所の人 | | (五) 公民の務 | (一三) 共同 | (一〇) 責任 (二四) 共同 (二五) 地方改良 | |

四、國家に關する徳目 (國際道徳を含む)

| 題目 | 尋常科卷一 | 同卷二 | 同卷三 | 同卷四 | 同卷五 | 同卷六 | 高等科卷一 | 同卷二 |
|-----|------------------------|------------------|------------------------------|------------------------------|-----------|--------------------|---------|----------------------------|
| 寛容 | (五) 喧嘩を するな | (一八) 人の 過をゆるせ | (二〇) 寛大 | | (二二) 度量 | | (二二) 寛容 | |
| 公益 | (一八) 人に 迷惑をか けるな | | (二五) 公益 | (二五) 公益 | (六) 公益 | (二二) 公益 | | (一五・一六) 公益世務 |
| 謝恩 | (三) 先生 | (二六) 恩を 忘れるな | (一九) 恩を 忘れるな | | (二四) 謝恩 | | | |
| 公正 | (一五) 人の ものもの | (一九) 悪い動に 従ふな | (二二) 自分 のものもの | (四) 人の名 譽を重ん ぜよ | | (二〇) 公徳 (二二) 公正 | | |
| 仁愛 | (九) 生きもの ひやり | (二〇) 人の 難儀を救 | (一八) 慈善 (二六) 生き物を あはれめ | (二〇) 生き物を あはれめ (二二) 博愛 | (二五) 博愛 | (一四) 慈善 | (二三) 同情 | (二二) 博愛 |
| 御聖徳 | (二) 天皇節 | (二二) 天皇陛下 | (一) 皇后陛下 | (一) 明治天皇 皇室を尊へ | (二) 皇太后陛下 | | | (二) 御歴代 聖徳の御 |
| 忠誠 | (二六) 忠義 | (二三) 忠義 | (三) 忠君愛國 | (五) 皇室を尊へ | | (五) 忠君愛國 | (六) 忠孝 | (三) 國民の 忠誠 (二七) 君民一徳 |

| | | | | | | | |
|---|--|-----------|-------------|---------|---------------------|--|--|
| 愛 | | | | | | | |
| 國 | | | | | | | |
| | | (二二) 紀元節 | | | | | |
| | | (一五) 皇太神宮 | (一六) 祝日 | | | | |
| | | (二二) 國旗 | | | | | |
| | | (一) 我が國 | (四) 舉國一致 | | | | |
| | | (一) 皇太神宮 | (二・三) 國運の發展 | (四) 國交 | (二五・二六・二七) 教育に關する勅語 | | |
| | | (一) 我が國 | (二) 愛國 | (二六) 國交 | | | |
| | | (一) 建國の精神 | (二七) 國意國法 | | | | |

第二 關係徳目の融和教育的考察

一般教科としての修身科の各徳目は、一般的には國民生活に資すべき教育的要素を有するは勿論のことであるが、更にこれに基きて融和教育的效果を期せんとするには、より具體的にその内容に於ける融和的要素並にこれが關係等に付き、融和問題本質の上より一段の考察が行はれねば妥當適切なる效果を期することが出来ない。この點に鑑み前項の融和教育的體系に基き各學年に於ける關係徳目の融和教育的考察を次に述ぶることとする。

一、家庭に關する徳目

一、孝行

| | | | |
|-----|----|----|-------|
| 尋常科 | 卷一 | 二三 | 親を大切に |
| 同 | 卷二 | 六 | 孝行 |
| 同 | 卷三 | 三 | 孝行 |
| 同 | 卷四 | 六 | 孝行 |
| 同 | 卷五 | 一〇 | 孝行 |
| 同 | 卷六 | 六 | 忠孝 |
| 高等科 | 卷一 | 四 | 孝行 |
| 同 | 卷二 | 五 | 孝行 |

孝は親の大恩に報ゆる道で我國古來の美しき家庭道德であり、家族制度を以て社會組織の基礎とする我が國に於ては、孝は實に社會道德の基礎をなすものである。即ち親の大恩に報ゆる道を縦に發展すれば自己の祖先、更に民族の始祖としての國祖の大神を崇拜することとなり、九千萬國民の同祖

同胞意識を喚起し、横に發展すれば社會共存の大意に感謝し、その協同互助の精神となり、自己の分に應じてその責務を完ふするに至るのである。

故に孝はひとり自己に對し、親に對する務であるのみならず、共存親和の社會生活に對する重要な義務である。

二、友 愛

| | | | |
|-----|----|----|-------|
| 尋常科 | 卷一 | 二五 | きょうだい |
| 同 | 卷二 | 七 | 兄弟仲よく |
| 同 | 卷四 | 七 | 兄弟 |
| 同 | 卷五 | 一一 | 兄弟 |
| 高等科 | 卷二 | 六 | 兄弟姉妹 |

兄弟姉妹は親を同じくするもので恰も同根より出でたる枝の如き關係である。これを廣く考ふれば國民はみな祖親を同じうし、皇室の御仁慈に浴し育くまれ來れる同胞で四海皆兄弟といふことが出来る。

兄弟姉妹の互に盡すべき道は友愛で、友愛の第一要件は親睦である。親睦とは喜憂を共にし誠意と

温情とを以て互に扶助することである。詩經に「兄弟牆に闔ぐも外其の侮を禦ぐ」とある。相互に扶助することは兄弟として重要な道で、この心をおし廣めて我等同胞は互ひに親和相愛の力により協同一致への道に進むべきである。

若し兄弟姉妹にして親和共同の出來ないやうなものは、社會生活に於て他の人々と共同融和の出來やう筈はない。社會的協同の實を擧げんとするものは、先づその第一歩として兄弟姉妹の親和協同に努むべきである。

又兄弟は各自その名譽を重んじなければならぬ。兄弟中の一人の名譽は全兄弟の名譽となり、家門の譽となるのである。又一人の不名譽は家門の恥、全兄弟の不名譽である。これが惹いては國家社會生活に於て各自が各々その名譽を尊重すると同時に、他の名譽をも重んじ、社會の共存同榮を圖るの精神にまで發展せねばならぬ。

三、祖先と家

| | | | |
|-----|----|----|-------|
| 尋常科 | 卷一 | 一九 | 私のうち |
| 同 | 卷二 | 九 | 祖先を尊べ |
| 同 | 卷六 | 七 | 祖先と家 |
| 高等科 | 卷一 | 三 | 家 |

人と人との最も最初の集團生活は家の生活で、各個人が相互の関係を協力親和に營む社會生活の第一歩である。

一家を組織するものは戸主と家族である。家族は戸主に保護せらるゝものであるから戸主を愛敬し相助け、戸主は又家族を愛護して同心協力、融和一致して家の繁榮をはからねばならぬ。各個人がこの制度を守ることによつて社會の協同互助の秩序が維持せられ、共存共榮の社會道德の根源が成り立つのである。

而してこの家の制度は我が國に於ける社會組織の基礎單位で、その組織は家族制度である。この制度の個別的關係に於ては個々の家に家長があつて一家を統率する組織であるが、綜合的關係に於ては個々の家族を纏めて一大家族となし、その上に家長があつてこれを統一するものである。我が國の社會組織の體系はこの綜合的家族制度であつて、天皇は實に家長に當らせらるゝのである。家は社會組織の單位とはこの故を以てもいふことが出来るのである。故に國家生活に於ける親愛互助の生活を營むには、各家相互の共榮と相扶連帶の關係が成り立たねばならぬ。

家を重んずるものが更に祖先を敬慕するは人間として當然の社會意識の縱の發展である。個人が現在の父母兄弟と相和し朋友を相扶け、社會の人々と廣く種々の關係を結ぶやうになるのはその社會意

識の横の發展である。これらの關係があつてこそ我等の社會生活は恒久深遠な意義をもつことになるのである。

而して如上の我が日本民族の共同の始祖たる皇祖崇敬の念は、御宗家たる皇室尊崇の念や、民族の家たる國家を愛する精神と相連なり、これと一體の體系にある家を重んずるの精神にして眞に徹底するところに、同胞親愛、相互扶助の精神は養はれ、自己の家を尊ぶとともに他の家の名譽をも傷つることなく、國民は一致團結してその繁榮に努めることとなるのである。

四、親 類

| | | | |
|-----|----|---|----|
| 尋常科 | 卷二 | 八 | 親類 |
| 高等科 | 卷一 | 五 | 親類 |

親類間の關係には親疎の別があり、法律上にも親等を分ち相互の義務も同じくないものがあるけれども、己と血族を同じくしその社會關係を擴げたる至切の關係を有することを思へば、互ひに相親しみ相依るに至るのは自然の情でありまた人の道である。

家族道德に厚いものは必ず親類の交りを睦くする。そして親類間の道を擴むれば同胞、國民の道となり民族の道となる。即ち我等國民は祖先を同じうする一大綜合的親類の關係であるが故に、親類間

の親和を廣く國民一般の生活に及ぼし、國を擧げて一家の如き協同互助の團體としなければならぬ。そこに相互の名譽を重んじ相互の生存を相扶助し、協同融和の社會生活を營むことが出来るのである。

二、個人に關する徳目

一、誠 實

| | | | |
|-----|----|----|--------|
| 尋常科 | 卷一 | 一三 | 過をかくすな |
| 同 | 同 | 一四 | うそをいふな |
| 同 | 卷二 | 二五 | 正直 |
| 同 | 卷三 | 七 | 誠實 |
| 同 | 卷四 | 一一 | 忠實 |
| 同 | 卷五 | 二三 | 誠實 |
| 同 | 卷六 | 一六 | 良心 |
| 高等科 | 卷一 | 七 | 至誠 |

誠實とは自他に對して常に正しき道を履み行ふことで、内、心を欺かず、外、人に對して偽らざる

行爲であり、公明正大、至誠、人道に立脚して自己本心の命ずる所によつて行動することである。

而してその善なる行爲の内面に働いてゐる心は良心であつて、これは道德的の知と情と意との一體活動體で、善惡の判断を下し善を好み惡をにくみ人をして道德的ならしむるものである。この良心あるところに自己の尊嚴を確認すると同時に、他人の尊嚴をも認め敢てこれを傷つくるが如き賤視觀念や、社會經濟上の差別待遇等は毛頭生ぜざるべきである。

人が皆誠實の徳を失ひ他人の人格的存在を妨ぐるがごときことあらば、社會はたゞ不安を増し互ひに信頼することも出来ず結局住みにくき處になるばかりで人々は楽しく社會生活をなすことが出来なす。自己一身のため誠實を缺きて虚偽の優越觀や反社會的の言動によりて生活するならば、その結果は一つには自己の品位人格を傷つけ、社會的存在としての價値の上に一大缺陷を生ずることになり、二には社會共同の生活を破壊することとなり、社會生活上の危期を招來するものである。我誠實に事に當り他に誠實を以て對することによりて、人道は確立し相互の尊嚴は保たれて親愛共存の社會關係は成りたつのである。

二、勤 勉

| | | | |
|-----|----|----|-------|
| 尋常科 | 卷一 | 二一 | 勉 強 |
| 同 | 卷二 | 一一 | 勤 勉 |
| 同 | 卷三 | 四 | 仕事に勵め |
| 同 | 卷四 | 一六 | 仕事に勵め |
| 同 | 卷五 | 一三 | 勤 勞 |
| 高等科 | 卷一 | 一五 | 勤 勞 |

知識も職業も或は人格の向上に於ても、又は境遇の打開發展のためにも一にそれは自己の勤勉努力に俟たねばならない。如何に人格は平等であり、人は社会的に無差別でありとするも、現實生活上に於ける人格の修養とこれが社會經濟的地位が一般社會より低劣で、何等努力するところがなかつたならば、眞の人間の價値を實現することは出来ない。これに到達すべき最善の方法を考へ、勤勉の徳を以て絶へざる努力を続けなければ之が大成の域にまで到達することは出来ない。

人は各々自己の職業と社會的地位に自覺し、その職業や境遇が社會の共存共榮の協同社會生活のための一要素であり、一單位としての活動體たることを認識し、たとひそれが社會經濟的に劣るともこ

れを自から卑下することなく、或は他の職業者や異なる境遇の者を輕侮することなく、互に勤勉努力して社會共同の福利を増進せねばならない。又それと同時に職業が發展性なき封鎖的のものであり、又社會經濟的に低き境遇にある部落生活者は、これが向上打開のために勤勉奮闘し、自己一身のため將た亦た階級・集團の幸運の増進のために大いに努力せねばならない。「追ひつけ而して追ひ越せ」の努力が必要である。

諺に「祈るより稼げ」といふことがある。如何ともしがたいと思はれる長き時代の因襲的なる運命もその實運命ではなく、撓まず屈せず努力すれば躑躅は佳き日を迎ふる日は決して遠くはない。

三、忍 耐

| | | | |
|-----|----|----|-----|
| 尋常科 | 卷三 | 一三 | 堪 忍 |
| 同 | 卷四 | 一二 | 克 己 |
| 同 | 卷五 | 一六 | 忍 耐 |
| 同 | 同 | 一七 | 自 信 |

人は必要により自己の意志を時間的繼續的に働かせ、種々の障害に遇ふも挫折せず苦痛困難に堪へ最後にその目的を貫徹することが大切である。

換言すれば合理的意志を以て諸々の感情欲望を支配し、或はこれを制限し又は全く抑止するのであ

る。人は社會生活をなす上にこの忍耐の徳が必要で、特に自己が周圍の社會的差別壓迫に遇ふとき、その破邪顯正の目的を貫徹するため陰忍自重し、その障礙を合理的に一步々打開し、最後の佳き日の將來を全うせねばならない。

而して忍耐の實行は智と調和することが必要である。環境の變化は個人の目的に影響してこれに順應すべき處置を執らねばならぬことがある。智なき持久忍耐は頑迷となりこれが習慣となり且つ傳統としては抜くべからざる因襲を形づくり、又智なき忍耐は保守退嬰となり卑屈卑下となつて遂に自覺意識を失ひ、己の良心を消磨し自我意識を消失するに至る。それ故これが實行は如何なる場合になすべきかを深く判断する必要があるのである。

四、習慣及修徳

| | | | |
|-----|----|----|---------|
| 尋常科 | 卷四 | 一七 | 迷信に陥るな |
| 同 | 同 | 一九 | よい習慣を造れ |
| 高等科 | 卷一 | 九 | 反省 |
| 同 | 卷二 | 一四 | 徳器 |

人には高尚なる品性を備へたるものと然らざるものとがある。この人の品性は行爲を反覆する事に

よつて我が身についた習慣で、その行爲の反覆によつて意志が自我の一定の傾向を組織したのであるから、悪行爲を反覆すれば悪品性が出来、善行爲を反覆すれば善品性が出来る。人を輕悔しその人格を無視するが如き習慣は人を差別視する賤しむべき品性を生み、他の人格を尊重する習慣はやがて凡ての人間尊重の高尚なる品性を備ふるに至るのである。

現在我が國に於ける因襲的差別觀念の如きも、往時に於ける社會經濟的乃至は制度的差別行爲が人々の間に屢々繰返さるゝことに依り集積せられ、更にこれを長年月の間反覆せることによりこれを傳統化し、遂に因襲的觀念となりしものである。而してこれが個人に於ける發生は、幼少時に於ける環境より受くる影響より次第に習慣化し、更に自己の意識をして侵さるゝに至つたのである。こゝに於て幼少時に於ける父母の家庭教育並に小學校に於ける道德修練上最も留意する必要がある。

人の品性は斯くの如く習慣及び習性より發達し、これが道德的人格を構成するに至る。要するに道德的天性は徳の素材にして、理性の指導の下に正しきことを實行してこれを習慣としなければ、眞の徳とならず眞の人格者となることは出来ない。

五、自立自營

| | | | |
|-----|----|---|----------|
| 尋常科 | 卷二 | 二 | 自分の事は自分で |
|-----|----|---|----------|

第三章 小學教科と融和教育

| | | | |
|-----|----|----|-------|
| 尋常科 | 卷四 | 四 | 志を立てよ |
| 同 | 同 | 一三 | 獨立自營 |
| 同 | 卷六 | 一一 | 獨立自營 |
| 高等科 | 卷一 | 一六 | 獨立自營 |

獨立自營は、自己の人格の尊嚴に自覺しその社會的經濟的地位の維持存続のための活動であつて、換言すれば人たる所以の發揮である。人格の尊い點は自律的に人が人たるべき道を履み行ふところにあつて、この人たる所以は自ら人たる責任を有しこれを完ふすることである。斯くてこそ獨立の人格と稱し得るのである。

人は如何なる境遇にありとも、又自己が他人より又社會よりその人格の傷つけられやうとするも、人たるの尊嚴に對する自覺を失はず、嚴然としてこれを發揮せねばならぬ。

又人々はその社會的經濟的地位が如何に低くとも、その地位に對する個人的社會的の責任を自覺しこれが向上のため社會經濟的にその境遇を打開し、よりよき地位を獲得せなければならぬ。この點に於て獨立自營の精神は特に内部同胞の自覺更生のために最も根本的精神となるものである。

又獨立自營は自己並に集團のために必要であり且つその幸福を齎すのみでなく、寧ろ社會全體のために必要で、人間が社會生活をなし社會の共同發展を遂げてゆくためには是非とも必要である。即ち斯かる人斯かる集團が多ければその市町村は健實に發達しその國家は隆昌に赴くのである。社會は共存

共榮を以て理想とするところの共同生活體で社會の相互扶助のため人々の獨立自營は必要であり、社會が共同するために必要である。最もよき共同社會のためには最もよき獨立自營的個人並に集團を必要とする。若し社會の人々がこの精神を缺き他に依頼するのみでは協同互助の社會は成り立たず人間全體の滅亡あるのみである。即ち獨立自營の精神は個人的自覺より社會的自覺意識に發展し、共同一體の精神にまで展開せしめねばならぬ。

又獨立自營は妄りに他人に依頼しないことであるが、各自が孤立することではない。人は社會生活によりて初めて成立するものである。受けねばならぬ社會的互助の力は快く受け相互の共存共榮を圖る必要がある。これを誤りて個人主義に流れたり徒らに排他的な行動に出たり、他人を容れざる獨善的な態度に出すべきではない。これが稍々もすれば自己の境遇の打開のために他を排斥し社會的反抗意識となり一般社會人を仇敵視するが如きは眞の公正なる獨立自營の精神ではなく、個人的には眞の發展向上が出来ないのみならず、その結果は社會的には反つて疎隔を生じ、社會の健全なる發達を期することゝならないのである。如何なる場合といへども、人は社會から離れて生活することは出来ない。既に社會といふ以上、そこに協同と團結がなければならぬ。

三、社會に關する徳目

一、友 誼

| | | | |
|-----|----|----|--------|
| 尋常科 | 卷一 | 四 | 友だち |
| 同 | 卷二 | 一七 | 友達に親切に |
| 同 | 卷三 | 九 | 友だち |
| 同 | 卷五 | 一九 | 朋友 |
| 高等科 | 卷二 | 八 | 朋友 |

朋友は家族に次いで交りの深いもので社會關係の最も手近い間柄である。その關係たる家族の如くしかも骨肉上或は法律上の關係ではなく全く随意に選んだ自由な關係で、社會共同生活上相互の協同互助に於ては家族より強きものがある。最も親密にして恒久の親友の間に於ては眞摯にして人を信ずる心が強く、基礎ある交誼は成立し生涯の友となり、社會の嘲笑も差別も受くるとも相協力して斷固として正義人道のためその道を履み行ふものである。

而して朋友の關係は自由であり且つ平等である。この關係はたとへ家族中に於ても見出すことは出來ないが、朋友の場合に於ては多くの場合にこれを考へることが出来る。この自由と平等の關係といふことが朋友の價値の起るところで、社會的横斷的平等關係はこれが擴大發展せるもので、協同相互

扶助の社會關係と親愛融和の共存的社會機構も、眞の友愛關係の徹底するところに實さるゝものである。

二、禮 儀

| | | | |
|-----|----|----|-----|
| 尋常科 | 卷三 | 一一 | 行儀 |
| 同 | 卷四 | 一八 | 禮儀 |
| 同 | 卷五 | 二〇 | 禮儀 |
| 高等科 | 卷一 | 一九 | 禮儀 |
| 同 | 卷二 | 九 | 卷 檢 |

人の社會生活に於ては人々互に他人の人格を認めてこれを尊敬し、互に禮儀を守りて親愛互助の精神を保ち共同生活をなすの心がなければならぬ。人格尊重の觀念のないものは到底今日の社會生活を正視し共同社會に貢献することは出來ない。

禮儀の基礎は恭敬の心で、人々に恭敬の心がなければ社會は優越視によつて衝突し英雄的となり他人を輕侮しその學力や社會的地位、經濟的勢力、境遇等の差異によりこれを賤視しその人格を侮蔑するに至る。又恭敬の心内に溢るゝともこれを外に表すべき形式が伴はねば人々の間に誤解を生じ感情を害し社會の秩序と平和を擾亂するに至るのである。現今尙ほ封建的差別事象の社會に存在するは國

民の凡てが互にその境遇の異なる者に對し、内に恭敬の心を持たず禮儀を守らざるに依るものである。禮儀はこれを消極と積極とに分けるならば、消極的禮儀は謙遜辭讓であり、積極的禮儀は尊敬親切である。この謙遜辭讓は自己の品性を高むる所以にして、自己の品性が高まれば自づと他人の人格を尊重する心生じ、他よりも亦た崇敬せられ美しき融和親愛の世界を現出する。これに反し他人を輕侮するときは自らの品性を卑しめ、他人の信頼を失ひ社會は冷酷なるものとなる。

然しながらこゝに注意すべきことは、人に對する謙遜辭讓を誤り他を尊敬するの餘り自己を事さらに卑下し卑屈に陥り、甚しきは自己自らを賤しみて顧みざるが如きは誤解も甚しきものにて、永き因襲的差別壓迫の境遇にあり封建的差別觀念に圍繞せられたる人々の、稍々もすればこれらの觀念に自ら囚へらるゝが如きことは大いに警戒すべきことで、自己の尊嚴に自覺し自からの人格を禮讚するところがなければならぬ。

即ち禮儀はすべての社會人がこれを守り共存共榮の協同生活に於に社會人の守るべき規範であり、人生を嚴肅なるものと思へば人に對するの禮儀は自ら嚴正なるべきであつて、社會人相互の禮儀は社會全體の品位を高め、國家の體面を保つ上にも極めて肝要なることである。

それ故に社會生活に於て人々が互に禮儀を守る時には社會は非常に住み心地の良いものとなるのである。我々は住み心地の良い明るき協同親愛の社會を實現するために、各自に禮儀を守るの必要があ

るのである。禮儀は實に社會生活者の義務である。

三、殖 産

| | | | |
|-----|----|----|-------|
| 尋常科 | 卷五 | 九 | 産業を興せ |
| 高等科 | 卷一 | 一四 | 職業 |
| 同 | 卷二 | 一二 | 業務 |

人は社會國家に生活しその一員たる以上はその社會國家のために盡し、共同生活上必要なる要素を充たすことは大切な義務で、こゝに生活上直接重要なる産業の發展と經濟の充實を圖ることは大いに努めねばならぬことである。

而して個人の産業上の發展はその家の生活を向上し、社會一般よりその發達遅れたる部落その他の集團的産業の勃興は、その部落並に集團の經濟的地位を向上し、惹いてはその社會的地位の向上發展の基礎となり、これに附隨する社會的差別觀念の免除をも圖ることが出来る。これが基調は一にその産業經濟に直面するその人自身の社會的向上の自覺更生意識に基づくものにて、その地區又は集團の産業經濟の發展は惹いては全體社會のこれが發達を促し協同生活に貢献することとなるのである。

第三章 小學教科と融和教育

元より産業はそれ自身公共的協同的な性質をもつてゐる。人類は共同生活を営みこれが分業として各自の産業に従事し、生活に必要な職務を各自が負擔し相寄り相扶け親和協同することによつて發達するのである。實に産業の振興は個人に大切であるのみでなく、集團的生活、國家社會の全體的發達に重大なる意義をもち、その協同生活上の福利増進のために重要である。

然しながら現時産業の複雑なる發達の現状に於ては、或る人々、或る集團、或る種類の産業經濟の振興は他のこれに關聯する方面に影響し、利害必ずしも相伴はず社會的共存共榮の結果を將來しないやうな場合が少くない。故にその方途については何處までも社會大多數の人々の幸福を眼目として實行すべきである。

四、協 同

| | | | |
|-----|----|----|------|
| 尋常科 | 卷一 | 一六 | 近所の人 |
| 同 | 卷三 | 二三 | 共同 |
| 同 | 同 | 二四 | 近所の人 |
| 同 | 卷五 | 五 | 公民の務 |
| 同 | 卷六 | 一三 | 共同 |
| 高等科 | 卷一 | 一〇 | 責任 |

| | | | |
|-----|----|----|------|
| 高等科 | 卷一 | 二四 | 共同 |
| 同 | 同 | 二五 | 地方改良 |

人は社會に生まれ社會を造り社會と不離の關係にある。社會の成長は一體の生命をもち、人は意識的無意識的に一の共通目的をもつた共同團體の一員である。かくて人はその本務として近隣團結、相互協同の精神に充つるところがなければ社會は滅亡する。

近隣團結といふことがよく出来るためには、互に親愛協同の心を以てよく結合し、互にその分を盡し責任を果さねばならない。更に又進んで世の人々の共存のために盡すといふ精神が出て來なければならぬ。全體のために私利小利を捨て、行く犠牲的精神は、それはやがて隣保をして圓滿なる團結を可能にさせる大事なるものである。

隣保が團結して社會の福祉を増進するためには、それらの各人が一つの目的に向ひ力を合はせて事に當る協同の精神が必要で、相互に愛の心を以て結合しその協同融和の社會建設のため、その地方團體共通の繁榮を目的とし、相寄り相扶けて親しみつゝ共同してゆくところに、目的は達せらるゝのである。

斯くて更に共同の精神は全同胞の融和團結の國家建設のため、最も必要なる手段となるのである。

第二節 修身科

五、寛容

| | | | |
|-----|----|----|---------|
| 尋常科 | 卷一 | 五 | 喧嘩をするな |
| 同 | 卷二 | 一八 | 人の過をゆるせ |
| 同 | 卷三 | 二〇 | 寛大 |
| 同 | 卷五 | 二一 | 度量 |
| 高等科 | 卷一 | 二二 | 寛容 |

人は己を修める上に嚴に公正を守ることは大切なことであるが、これと共に心を廣く持ち他人に對して寛であり、人を容れその過失を許して嚴しくこれを咎めさせることは親愛融和の共同生活上肝要なことである。

人が寛容の心を以て人を容れ、相共にその分を盡しつゝ生活するならば無益な争はなくなり、社會的軋轢より來る困難な社會問題は比較的速かに解決し社會の平和を保ち得るのである。

社會には種々の人々があり、或は智力を、社會的經濟的地位を、或はその境遇を異にするものが少くない。これらの人々の間には自らその感情、習性を異にし、社會生活上の諸種の表現形式に於て相異なるものは當然のことである。然しながら社會はこれら多くの社會關係の異なる人々により相互に

その分を盡しあひて共存一體の生活をなすものであり、それにより相互に裨益し且つその進歩を見るのである。故にこれらの異なる社會感情、諸種の社會的習慣、生活様式等の差異により自己と相容れざるものもあるも、直ちにこれを忌避し咎むる等ことなく、相互協調の精神によつてこれを快く容れ融合一致して社會の平和を圖らねばならない。

而して進んではその境遇の永き社會的封鎖の中にありて社會的經濟的に遅れ社會生活様式の異なるものあらば相抱擁してこれを向上發展せしめ、又惡しき環境の傳統より來れる賤視觀念に因はれ、差別事象を惹起するものもあるも直ちにこれを仇敵視せず、その非なるをよく糺し差別の社會協同生活上の障碍たることを論し、相互に理解を深め親和一體の社會國家生活の完成を期せねばならない。

寛容は實に自らの心を平和にしてその幸福のためになるばかりでなく、實に社會全體の共存融和のため相互の幸福を齎す道である。

明治天皇御製

あさみとりすみわたりたる大空の

ひろきをおのか心ともかな

の大御心を國民相互の心とせねばならない。

六、公益

| | | | |
|-----|---------|----|-----------|
| 尋常科 | 卷一 | 一八 | 人に迷惑をかけるな |
| 同 | 卷三 | 二五 | 公益 |
| 同 | 卷四 | 二五 | 公益 |
| 同 | 卷五 | 六 | 公益 |
| 同 | 卷六 | 一二 | 公益 |
| 高等科 | 卷二一五、一六 | | 公益世務 |

人の本性には社會性があり而して人は社會に於て共同の生活を營んで居るのであつて、個人と社會とは一體不離の關係にあり、個人の全體的の幸福と發展とは社會全體の幸福進展と結局一致してゐる。又人は自我を持つが、初めは全體的の自我に覺めず小我を主張するが、次第にその意識が深くなり遂に全體としての自我に覺め、その社會性を自覺して行く。そして眞に生きることは自他の共存共榮の上にあることを悟つて來る。

公益はこの社會の理想としての共存共榮の道を圖ることである。一人の生存のために他人を輕視し一部の繁榮のために他人を壓迫し虐げるといふが如きは社會理想に反すること最も甚しいもので、現

代に於ては社會思想・社會經濟的諸機構の缺陷から稍々もすれば陥り易い結果である。

かゝる社會的缺陷から社會の人々を匡正するためには社會思想・社會的諸關係の上に改變を要する點も多々あるも、それと共に社會の人々に融和共榮を念とするところの社會的道念が缺如してゐるならば、到底理想の社會は望まれない。故に先づ社會の理想としての融和共榮の本義に觸れしめねばならぬ。而してこの融和共榮の實現のためには、人々は常に公益を圖るの心がなければならぬ。

人々がこの公益の心を持つ時には、自から進んで社會公共の福利のために積極的に寄與貢獻をすることとなる。社會は常に健全ではない。その一部には長き因襲的壓迫のためにその社會經濟上の一體共榮の恩澤を享受することの出來ぬものが多數にある。しかもその社會的缺陷は一般社會全體の中に發生したものであり、これが惹いては全體の缺陷として全體社會の責務負擔となつてゆく。故にこの問題の解決はその社會自らの任務であり責任であつて、その社會の人々すべての問題としてこれが解決に努力すべきである。

而して公益の實行について大切なことは協同の力を以てすること、力を協せ一致團結すれば個人々々の小の力を大となすことが出來、共同の目的を達することが出来る。個人的、小英雄的名譽心に因はるゝ如きことなく常に協同の精神を重んじなければならぬ。

七、謝 恩

| | | | |
|-----|----|----|--------|
| 尋常科 | 卷一 | 三 | 先生 |
| 同 | 卷二 | 二六 | 恩を忘れるな |
| 同 | 卷三 | 一九 | 恩を忘れるな |
| 同 | 卷五 | 二四 | 謝恩 |

謝恩とは廣義にいへば天地の恩を感じ、いはゆる天道に従ふことを以てそれに報ひることで、狹義にいへば、凡て他人が己がために計られたる恩恵に感謝しそれに報ひることである。

謝恩又は報恩の動機は第一に人の至情から出るもので、他人が温い情愛を以て己に與へられた恩恵に對し感謝の情が起り、その萬一なりとも報ひやうとするものである。

而してその實現は獨立的人格の人にしてよく出来る。人は父母の養育よりやがて近隣郷土により生長し更に世の多くの恩の中に長じて行く。この恩に自覺しそれに報ひる責任を我身に負ひ、これが隣人への感謝はやがて隣保共同の堅實なる發達と親愛融和への貢獻となるに至る。

人は社會の多くの恩恵を感じるによつて社會と我との離るべからざる秩序ある正しい關係を會得し、その社會に報ひんとする精神によりて人と人との道德的相互尊重の關係を深め、一層全體社會

の圓滿なる發達と全社會人の親愛なる協同融和の理想を念ずることとなるのである。

八、公 正

| | | | |
|-----|----|----|------------|
| 尋常科 | 卷一 | 一五 | 人のもの |
| 同 | 卷二 | 一九 | 悪い勤めに従ふな |
| 同 | 卷三 | 二一 | 自分のものと人のもの |
| 同 | 卷四 | 四 | 人の名譽を重んぜよ |
| 高等科 | 卷一 | 二〇 | 公德 |
| 同 | 同 | 二一 | 公正 |

人として爲すべきことを爲し、爲すべからざることを爲さないのが公正である。正義はほど公正とその意義を同うし、たゞ公正に對して稍々廣く且つ社會一般の道德律を守るといふ意味が含まれてゐる。何れも人の社會共同生活上重要な道德である。

人の公正の意志はその個人的又は公衆社會的の敵、妨害者に對する態度によりてこれを決定する。己の行爲の結果が他人の利益と衝突しないよう、己の行爲を制限するのは公正の人である。爲すべきことを爲し爲すべからざることを爲さないのは、互に自己の分を守り他人に害を及ぼしその生存を同

潰せざることを徳であつて、他の多くの人々と共同親和の生活を營む上に重んずべきことである。これ故に吾人は社會の多くの人々の生存に對する障得たる輕侮、賤視、差別、凌辱、憎惡、虐遇等に對しては個人的の敵に對してよりも社會公衆の敵に對しては一層公正の態度が明かでないならばならぬ。公正は他人の身體、生命、財産等に對してこれを侵さぬことと同時に、他人の自由も亦た侵してはならない。蓋し人には國の法律に背かぬ限りに於て、思想、言論、行爲、信教、住居等の自由を侵されない權利がある。自由は人の幸福の有するところ價値のあるところで、その束縛は人の人格の尊嚴を認めない所業である。因襲的差別のために一部同胞の住居、職業其の他の行爲に關する自由を抑壓するが如きは、公正の精神に對する大なる冒瀆と謂はねばならぬ。

又名譽は人の價値を社會が容認することによりて成立つもので、人の人格を構成するものである。名譽は實に人の無形の財産で幸福の一大要素であり、人の社會的生命である。故に名譽を傷つけられ人格を侮辱せらるゝことは人の社會的生命、永遠の人間の本質を冒瀆するものである。

こゝに於て人は社會を爲し多くの人々と協同融和の生活を爲し社會の秩序を維持存続する上に他の尊嚴を侵さざる公正、社會正義の精神を尊重せねばならない。

九、仁 愛

| | | | |
|-----|----|----|-----------|
| 尋常科 | 卷一 | 九 | 生きもの |
| 同 | 同 | 一七 | おもひやり |
| 同 | 卷二 | 二〇 | 人の難儀を救へ |
| 同 | 卷三 | 一八 | 慈善 |
| 同 | 同 | 二六 | 生きものをあはれめ |
| 同 | 卷四 | 二〇 | 生き物をあはれめ |
| 同 | 同 | 二一 | 博愛 |
| 同 | 卷五 | 二五 | 博愛 |
| 同 | 卷六 | 一四 | 慈善 |
| 高等科 | 卷一 | 二三 | 同情 |
| 同 | 卷二 | 一〇 | 博愛 |

仁愛の基調は同情にして凡ての社會倫理の心理的基礎である、抑々感情の發動は同情によりて他人に加はる。快樂と苦痛の如き、親愛と憎惡の如きそれである。

同情は初めは主として血族關係者に起る。その最も熾烈なのは母子の間で、これより次第に家族同族に及び、隣人より同胞に擴まり、進んで民族並に人類全體に、更に進んでは生物一般にも及ぶものである。この同情ありて我々は始めて社會を形造り共同生活を營み得るのである。

人を愛しこれに同情すれば、それは自ら行となりて外に現れる。この廣い愛の心の自然の發露が博愛の道である。博愛とは博く愛するの心である。親しい間柄の人に對して愛情を感じるのは當然であるが、亦廣く社會の人々をも愛さねばならない。人をよく理解してこれを愛する心をおし廣めると、自ら社會全體の人々を愛し互に緊密なる親愛に充ちた協同の社會を成すに至る。

斯くの如く、愛は社會の親愛を來し結合を鞏固にするものであるから、社會の結合を緊密にし融和團結を鞏固にせんがためには、たとひ血族や地域や境遇といふ紐帯がなくとも人々は互に相愛せねばならぬ。

更に理性を以て律せられたる同情より發して他人の苦痛を救ひ、その幸福を増進する徳を仁愛といふ。元と理性によつて律せられたる同情即ち好意に積極的のものと消極的のものとある。前者は即ち仁愛であり後者は正義である。仁愛の我々にその遵守を要求するは、人はよろしく同胞を敬し人類を愛すべきであるといふことである。これは社會的徳徳中最も大切なもの、一つで儒教の仁、佛教の慈悲、基督教の愛の根本はこれを仁愛と見ることが出来る。

四、國家に關する徳目

一、御聖徳

| | | | |
|-----|----|----|-----------|
| 尋常科 | 卷一 | 二 | 天長節 |
| 同 | 卷二 | 二二 | 天皇陛下 |
| 同 | 卷三 | 一 | 皇后陛下 |
| 同 | 卷四 | 一 | 明治天皇 |
| 同 | 卷五 | 二 | 皇太后陛下 |
| 高等科 | 卷二 | 二 | 御歴代天皇の御聖徳 |

天皇陛下及び 御歴代天皇の御聖徳並に皇族の御高德を仰ぎまつる徳目である。

天皇は國家を統治せらるゝ主權者にして萬世一系の皇統を繼承せられ、天位に在しまして大政を統べ國土を保護し國民を愛撫遊ばされる。又國民尊崇敬慕の中心で、且つ現人神であらせられるのである。

我が國民道徳は國體を基礎として發達し、國體は常に皇位と相終始してその特色を發揮してゐる。而して尊王の念は我國民道徳の樞軸で、國民は皇室を中心として發展した擴皇室の家族的國家の家族員として、皇室を離れて國を考へることが出来ず、國を離れて皇室を考へることも出来ない。即ち皇

室と國家とは同一體であるから、國民として爲すべき第一は、當然皇室を尊崇し皇室の繁榮を祈り奉ることではない。

我等は 御歴代天皇の高き御聖徳、深き御恵み、御鴻恩に浴し、その御徳と御仁慈に對し深く感謝せねばならない。今 御歴代天皇の御聖徳を仰ぎまつるに、古よりの御代々の 天皇の御高德は申すまでもなく、近くは明治天皇の五ヶ條の御誓文に

- 一、官武一途庶民ニ至ルマテ各其ノ志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス
- 一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

と全國民の健全平等なる國家生活と、各人の自由を尊重し練ひ、同日宣布せられたる億兆安撫國威宣布の宸翰に

今般朝政一新ノ時ニ膺リ天下億兆一人モ其所ヲ得サル時ハ皆朕カ罪ナレハ

と申すも長きまでに國民の權義の伸長につき軫念あらせられ、又明治三十四年東京府下連光寺行幸の際の一視同仁の御事蹟を仰ぎ、更に 大正天皇の御即位並に朝見の御儀にあたり

義ハ則チ君臣ニシテ情ハ父子ノコトク

と宣べさせられ、君民親愛の情を垂れ給ひ、又 今上陛下御即位の勅語にも

人心惟レ同シク民風惟レ和シ汎ク一視同仁ノ化ヲ宣ヘ永ク四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコト是レ朕カ最

モ切ナル所

と宣べさせ給ひ、一視同仁の 御聖旨は常に君民一體同胞親愛の上に及ばせ給ふた。又昭和五年には深く融和問題の上に御軫念あらせられ、中央融和事業協會の事業御獎勵の御思召を以て御下賜金を拜したのである。

斯くの如く列聖の國民諧和親善のために大御心を注がせ給ふことは感激にたへぬところで、我等は斯かる日本帝國臣民としての喜びを感じ、忠良なる臣民となり我國家が皇室を中心として益々發展し御聖徳を奉じて同胞融和の貫徹のため親和協同の國家社會を建設せねばならない。

【参考】 明治天皇連光寺行幸の際一視同仁の御聖徳

東京府北多摩郡多摩村連光寺といふ所に元と御靈區があつた。

明治天皇は明治新政の御當初より御繁忙なる御治政のため 玉體を御靜養遊ばさるゝ御暇が在らせられなかつたが、この連光寺の御靈區には屢々行幸あらせられたのであつた。

天皇が初めてこの地に行幸あらせられたのは明治十四年二月二十日であつた。この連光寺御鬼持の御靈區内に維新前迄舊幕時代に差別待遇を受けた一部落があつた。そこで此の最初の御親臨の節側近の案内官等は、そこに御野立所を設けることを俾つて御遠慮申さんか如何すべきかと評定した。ところがなか／＼決しないので遂に 天皇の御聖斷を仰ぐに至つた。すると 聖上には何等御躊躇あらせられず、言下に 朕は鬼の居る處ならばいづこへでも行く、又その村民も他の村民と同様に夫々奉仕せしめよ

第三章 小學教科と融和教育

と宣はせられ、御自から鷹匠足袋に白木綿の紐のつきたる御草鞋を召させられ、黒土を踏んで同村民と共に御嶽を御實踐あらせられた。この御事こそ 天皇の通光寺行幸の御聖徳の最高なるものである。

天皇が御晩年におかせられて如何に當時の御行幸を深く御心に残されたるかは、天皇の御存世の最後の御年の御製に

雪ふれば胸にくらおき野に山に

遊びしむかしおもひいでつゝ

と仰せられたるに依つても、御うかゞひすることが出来る。この一視同仁の高大無邊なる御聖徳こそ、我等が永く國民に傳ふべきことがらである。

二、忠 誠

| | | | |
|-----|----|----|-------|
| 尋常科 | 卷一 | 二六 | 忠 義 |
| 同 | 卷二 | 二三 | 忠 義 |
| 同 | 卷三 | 二 | 忠君愛國 |
| 同 | 卷四 | 五 | 皇室を尊べ |
| 同 | 卷六 | 五 | 忠君愛國 |
| 高等科 | 卷一 | 六 | 忠 孝 |

| | | | |
|---|----|----|-------|
| 同 | 卷二 | 三 | 國民の忠誠 |
| 同 | 同 | 二七 | 君民一體 |

我が國に於ける忠君の思想は古來極めて嚴肅壯烈なる意義をもつてゐる。蓋し日本に於ける皇室と臣民との關係は國家の創初から萬古不易の事實で、その關係は恰も親子の如く又一大家族の如き状態であるから、忠は最上最大の道德としてその基礎は動搖することなく、習慣的に倫理的に訓練修養され蓄積せられ來り、他國に比し比類なき嚴肅なるものとなつたのである。而して我國は皇祖の大詔によりて肇められ、皇室と國家とは分離することの出来ない君國一體の關係にある。即ち皇運と國運とは密接不離の關係を有し、忠君と愛國の一致するのは我が國體の特色である。

我等はこの比類なき光輝ある國に生れたる喜びを享け、萬民を赤子と愛撫され給ふ一視同仁の皇恩に浴すると共に、國民は 御聖旨をその心として偏見を去り差別を撤廢し、一致團結大君の御安泰皇室の御發展に盡し、國運の興隆、國民共同の福祉を圖らねばならない。

三、愛 國 (國際道德を含む)

| | | | |
|-----|----|----|------|
| 尋常科 | 卷二 | 二二 | 紀元節 |
| 同 | 卷三 | 一五 | 皇太神宮 |

第二節 修身科

第三章 小學教科と融和教育

| | | | |
|-----|----|----------|---------------|
| 尋常科 | 同 | 一六 | 祝日 |
| 同 | 卷四 | 二二 | 國旗 |
| 同 | 卷五 | 一 | 我が國 |
| 同 | 同 | 四 | 學國一致 |
| 同 | 卷六 | 一 | 皇太神宮 |
| | | 二三 | 國運の發展 四、國交 |
| | | 一八、一九、二〇 | 國民の務 |
| | | 二五、二六、二七 | 教育に關する勅語 |
| 高等科 | 卷一 | 一 | 我が國 二、愛國 三、國交 |
| 同 | 卷二 | 一 | 建國の精神 一七、國憲國法 |

我が國民は古來隣保團結の精神に富める民族で、平和を好み親善融和の精神に充ち、國家を愛し一朝有事の際は一身を犠牲として君國に報ゆるの覺悟をもつてゐる。この國家を愛し國民相一致相互の幸福を念とするところに全同胞は互に親和協同の理想社會を現出せねばならない。

この融和協同の精神は相互の同胞意識より來るもので、國民はすべて始祖を同ふし萬世一系の皇室を中心として諸民族は渾然融和し、國民はすべてその發展延長であり綜合的大家族であるところにその精神を發揮し得るのである。

又古より君は民を見ること子の如く一視同仁無差別平等に我等赤子を愛護せられ、國民亦忠誠を盡して發展し來れる東洋の美しき一帝國である。國民はこの 聖恩に感謝し互に親愛團結融和協同して全同胞の福祉を圖らねばならぬ。若しこれに反し同じ國民である同胞たるものを、その出生地、居住地、職業、集團生活等によりこれを偏見差別し、同胞互に墻に墻が如きことあらば、民族の恥辱となるのみならず、鴻恩厚き 聖旨に對し奉り、大なる罪惡といふべきである。

たゞ不幸にして中世封建の國情變遷の多かりし時代に於て、國民の間に身分的段階を設けられたるは其の時代の進展過程の現實性に鑑みて惜しくも亦止むを得ざりしことにして、たゞ一部國民を偏見賤視するが如き結果となりたるは返すくも残念なることにして、我等は光輝ある國史上のこの一大暗翳をして國民全體の一致協力の下に淨化克服し、社會的に又經濟的に互に努力して、すべての同胞をして國民生活を完ふせしめ、以て之が共同生活の向上を圖り、同心融合して國を愛し國のために盡し以て國運の發展を企圖せねばならぬ。

尙こゝに附け加ふべきことは、我々が日本を愛するのは、我々が祖國日本に生を享けそこに永遠の生命を托せんとするが故である。何れの國の人も夫々自國を愛せないものはない。それは人類の自然の情である。故に自國を愛するものは亦他國をも尊重し、その國の人々の幸福を侵害するところがあつてはならない。こゝに國際道徳は成立し、世界人道の平和が確立されるのである。たゞこゝに

注意すべきことは、若し一國が他國の幸福を侵害せんとするときは、これが正義人道の上よりその行為に對し適當なる抑壓を加ふることは當然のことで、斯くてこそ眞の人類の平和と共存共榮が保ち得られるのである。

第三節 國語科

第一 國語科教授の要旨と融和教育

國語はこれを形式的に見るときは言語・文字・文章を以て國民相互の思想感情を交換すると同時に、これを發達せしむる要具にして、實質的には歴史的に發達し來れる民族特有の文化、純正なる日本精神を包蔵するものである。されば國語教授は言語・文字・文章によつて自己の思想・感情を發表し、他人の思想感情を正しく理解するの能力を養ふとともに、一面には國民としての知徳、同胞としての相愛の觀念を啓發することを眼目とすべきもので、教則第三條に

國語ハ普通ノ言語、日常須知ノ文字及文章ヲ知ラシメ正確ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ養ヒ兼テ知徳ヲ啓發スルヲ以テ要旨トス

とあるはこの點を明示したものである。

而して國語科教授をその形式的方面より分類すれば、國語は他人の思想感情を理解し又自己の思想感情を發表することの兩作用がある。この作用を更に細別すれば、他人の思想感情を理解するための聞き方及び読み方、自己の思想感情を發表する話し方及び綴り方、並にこれを更に文書として發表する書き方があり、如上の目的を夫々の方面よりこれを具現すべく特有の要素をもつてゐる。

更にこれらの國語教授の形式的方面の外、之が實質的内容には知識、徳性、趣味が含まれてゐる。知識は國民生活の向上に缺くべからざるものであつて、兒童は文を通じて眞の人間觀を把持せしめ、兒童自ら人格尊嚴の眞理を體認せしめ以て知徳を啓發する。徳性の涵養は國家の生存に重大なる關係を有し言語・文字・文章を通じて能く日本精神を知り同胞相愛・相互扶助の國民道德涵養が養せられるのである。又國語は國民的思想感情を包有して國民精神の統一をはかり、その中に流るゝ根本的な民族意識を體得し、國民諸和の精神の基礎が培はれるのである。

又趣味を養成することは人生に於て大切であり美的生活の基礎をなして、人格抱擁、優雅寛大なる人格の涵養に資するところが少くない。

この意味に於て國語科は融和教育に於て缺くべからざる重要な交渉をもつものである。

一、讀方科

第三節 國語科

読み方はこれを其の目的より觀れば文字・文章を読むことであるが、本質的には生命の發展又は體驗といふ本質的、根源的、全一的見方をすべきである。読み方の過程とは、文字文章といふ符號や形式によつて讀者が作者の人格生命を求めて兩者の觸れあふことで、即ち自他の融合一致の境地にして、人格の接觸・生命活動の本質として主客融合統一の絶體境にあり、人生そのものゝ意味まで暗示され釋明せられて融和教育の本質上重要なものである。

讀むことは生活そのものに於て自己を完成せしめんとする人格的生命の要求である。人間としての永久的内的要求である。この要求のあるところに自我の實現・人格的行動は發展的に現實化される。現實としての生活に不満を感じ自ら自己の不完全を自覺發奮するところから、眞の自己の價値を發見し人生的意味を釋明し體驗せんとする發展的態度を生むものである。讀まんとする意志は斯くの如くにして發動して來るものであるから、内部兒童の自覺向上及び一般兒童全體の人格の完成を指導する上に、兒童の讀まんとする意志價値發見の要求を善導することが讀み方教授の目的であり、惹いては融和教育の重要な要素である。

教則第三條第四項に

讀本ノ文章ハ平易ニシテ國語ノ模範トナリ且兒童ノ心情ヲ快活純正ナラシムルコトヲ要シ其ノ材料ハ修身、歴史、地理、理科其他生活ニ必須ナル事項ニ取り趣味ニ富ムモノタルベシ

とある。即ち讀本の材料は兒童の心情を純正ならしめ公正正義を愛好し、而してその材料は修身に於ける道德方面、歴史に於ける日本民族觀、地理に於ける國民生活態樣、理科に於ける自然界の有機的絶體觀、其他國民生活そのものに直接關係を有するものである。

即ちこれらの教材中に含まるゝ多くの要素により、道德的知見、社會正義觀、日本民族精神、同胞諧和の本義、協同互助相互揖睦の國民生活觀、天地自然界の有機的交渉の理法と人間の絶對的存在の認識並に萬物報恩感謝の念、美的優雅の融和的情操等を涵養することを得て、融和教育上重要な要素を有する科目である

二、綴 方 科

教則第三條第七項に

文章ノ綴リ方ハ讀ミ方又ハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項、兒童ノ日常見聞セル事項及處生上必須ナル事項ヲ記述セシメ其ノ行文ハ平易ニシテ趣味明瞭ナランコトヲ要ス

とある。綴り方が文章を中心の問題として行はれる限り、綴り方は文章の本質と極めて緊密なる關係にあることは謂ふまでもないことで、文章の本質は廣義に於て自己の生活を内容要素として綴らうとする作者の人格的生命の創造活動であり、人格的眞實の表現でなければならぬ。そこで文品の高下、表現の深淺は直ちに作者たる兒童のもつ人格の高下、生活上の内容等を記録するものである。

綴り方教授に於て他の何ものよりも尊敬せねばならぬものは、兒童の人格的生命の創造的自己活動、自他尊嚴性の絶體意識の實踐と兒童の内的精神生活、親愛融合の神秘的躍動でなければならぬ。この人格的生命の創造的活動が最も自由に最も健全に働くとき、表現上の手段技巧などは獨りでそれに附隨して生れ出で、そこに兒童の完全なる個性が発現するのである。

綴り方教授の指導は、現在理想に基づいて自ら向上更新しつゝある人格完成への兒童の内的生活に即して指導し、兒童自ら自己自身の力によつて、自己の生活を最も眞實に赤裸々に自他共に恥ずるところなく公明に表現するやうな能力と個性とを形成することによつて、兒童の内的生活を發展せしむるやうに仕向けるところにある。故に兒童の生活經驗の指導は綴り方科に於ける重大なる根幹をなすものであつて、融和的取扱に於ては専ら兒童のこれら社會的諸事象に對する實際指導に基づくところに留意せねばならぬ。

三、書 方 科

書き方教授の目的には次の三種別がある。

第一には書を實用的のものとし、第二は書も全く書く藝術の一種とし、第三は書を人格的の表現と見るのである。書を實用的と見るのは吾人の思想感情を交換する一つの方便とするので、吾人が協同社會上缺くべからざる目的があり、書を藝術的と見るものは筆蹟の美を發揮し高潔なる品性を陶冶す

ることを以て理想とする。次に書を人格の表現とするものは、書は吾人の人格活動並びに各人の個性を忠實に表現するもので、その人自身の人格の高下を示すものである。このことは換言すれば、書を學ぶことは自己の人格を向上完成せんとする努力であつて、大家の名蹟を學びてその高潔なる人格を忍び、その人格に融合一致し和かなる心情を養ひて凡ての人と協力し、親交諧和するの人格陶冶に缺くべからざるものである。

第二 國語科教授の方法

一、讀 方 科

- 一、友愛、協同、同情、正義、同胞愛等の融和的教材に富める文章を通じて知的融和精神を涵養すること。
- 二、情操に富める文章を通じて美的感情を涵養し融和的情操に資せしむること。
- 三、協同、博愛等に関する人物の記事を通じて同胞融和の精神を體現せしむること。
- 四、文章を通じて社會事情を知らしめ正しき社會觀を養ふこと。

讀方科に於て融和教育上強調すべき事項

第三章 小學校科と融和教育

尋常科第二學年 卷四

| | | | | | |
|----|---------|--------|----|---------|--------|
| 二二 | 長い道 | 友誼 | 二四 | 浦島太郎 | 動物愛 |
| 課題 | 目 | 事項 | 課題 | 目 | 事項 |
| 二 | 早鳥 | 共同、郷土愛 | 一三 | いうびん | 社交 |
| 三 | 海軍のいさん | 友愛、愛國 | 一四 | ニイサンノ入替 | 家族愛、報國 |
| 四 | カケッコ | 努力 | 一五 | すゞめ | 親和、動物愛 |
| 五 | かぐやひめ | 謝恩 | 一六 | 白兔 | 動物愛 |
| 八 | ラヂサンノウチ | 親類愛 | 一七 | 豆まき | 家庭愛 |
| 一〇 | 山がらの思出 | 動物愛 | 一八 | 百合若 | 公正 |
| 一一 | 大江山 | 正義 | 一九 | ひなまつり | 家族愛 |
| 一二 | 鬼ごっこ | 友愛 | 二一 | 羽衣 | 愛 |

尋常科第三學年 卷五

| | | | | | |
|----|---------|-------|----|---------|----------|
| 課題 | 目 | 事項 | 課題 | 目 | 事項 |
| 一 | 天の岩屋 | 建國 | 一三 | 少彦名のみこと | 愛、公益 |
| 二 | 参宮だより | 愛國 | 一四 | 舟の上とたゞみ | 使命 |
| 三 | おたまじやくし | 生長 | 一七 | クモノス | 努力 |
| 四 | 天長節 | 愛國 | 一八 | 夏の午後 | 動植物愛及母の愛 |
| 五 | 八岐のをろち | 神々の愛 | 二〇 | こぼろぎ | 動物愛 |
| 八 | 遠足 | 郷土の認識 | 二一 | 天孫 | 建國の精神 |
| 九 | 動物園 | 動物愛 | 二二 | 犬のてがら | 動物愛、報國 |
| 一〇 | 逃げたらくだ | 信義 | 二三 | 電車 | 友愛、禮儀同情 |
| 一二 | 田植 | 共同 | 二五 | 二つの玉 | 友愛、寛容 |

尋常科第四學年 卷七

| | | | | | |
|----|------|--------|----|------|-------------|
| 課題 | 目 | 事項 | 課題 | 目 | 事項 |
| 一 | 世界 | 國際愛 | 四 | 潮干狩 | 家族及友人愛 |
| 二 | 長き行列 | 國際愛と自愛 | 五 | れんげ草 | 自然界の生命、共存共榮 |

第三節 國語科

第三章 小學教科と融和教育

尋常科第四學年 卷八

| | | | | | |
|----|--------|---------|----|---------|-----------|
| 八 | 馬 | 動物愛 | 一七 | 安倍川の義夫 | 清廉 |
| 一〇 | 獅子と武士 | 感謝報恩 | 一八 | 木下藤吉郎 | 勤勉努力 |
| 一三 | 一太郎やあい | 忠君愛國 | 一九 | 海ノ生物 | 生物愛 |
| 一四 | 川中島の戦 | 大義 | 二〇 | マリーのきてん | 愛國 |
| 一五 | カチ屋 | 勤勉、職業尊重 | 二二 | 助力 | 同情、共同、同胞愛 |
| 一六 | 航海の話 | 海外發展 | 二三 | 加藤清正 | 清廉 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|--------|------|----------|-----|----|
| 課 | 題 | 目 | 強 | 調 | 事 | 項 | | |
| 一 | 山 | の | 秋 | 自然界の情緒 | | | | |
| 二 | 犬 | こ | ろ | 動物愛 | | | | |
| 三 | 競 | | 馬 | 愛と互譲 | | | | |
| 四 | 武 | 將 | の | 幼時 | 共同團結 | | | |
| 六 | 吳 | | 風 | 犧牲 | | | | |
| 七 | 心 | と | 心 | 愛情 | | | | |
| 課 | 題 | 目 | 強 | 調 | 事 | 項 | | |
| 一 | 大 | 岡 | さ | ば | き | 一、親の愛、公正 | | |
| 二 | 手 | | | 紙 | | 主従の愛 | | |
| 四 | 餅 | つ | | き | | 家族愛 | | |
| 五 | 町 | の | | 辻 | | 同胞愛 | | |
| 八 | ア | メ | リ | カ | だ | より | 國際心 | |
| 九 | コ | ロ | ノ | プ | ス | の | 卵 | 共同 |

第三節 國語科

尋常科第五學年 卷九

| | | | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|----|-----------|
| 課 | 題 | 目 | 強 | 調 | 事 | 項 | |
| 一 | 今 | 日 | 勤 | 勉 | | | |
| 二 | ト | ラ | ツ | ク | 島 | 便り | 四海同胞 |
| 三 | 弟 | 桶 | 扱 | | | | 犧牲、報國 |
| 四 | 養 | 雞 | | | | | 動物愛、殖産 |
| 五 | 動 | 物 | ノ | 色 | ト | 形 | 動物愛 |
| 六 | 五 | 代 | の | 苦 | 心 | | 努力、報國 |
| 八 | 葉 | 葉 | の | 山 | 道 | | 信愛 |
| 九 | 兩 | 將 | 軍 | の | 握 | 手 | 人格尊重、愛國 |
| 一〇 | 水 | 師 | 營 | の | 會 | 見 | 人格尊重、愛國 |
| 課 | 題 | 目 | 強 | 調 | 事 | 項 | |
| 一 | 物 | ノ | 價 | | | | 社會經濟の知識 |
| 二 | 弟 | か | ら | 兄 | へ | | 友愛 |
| 三 | 老 | 社 | 長 | | | | 勤勉努力、同情 |
| 四 | 麥 | | 打 | | | | 家族共同、隣保相扶 |
| 五 | 軍 | 營 | 生 | 活 | の | 朝 | 規律、協同、愛國 |
| 七 | い | も | ほ | り | | | 勤勞、協同 |
| 二 | 北 | 風 | | | | | 動物愛、愛國 |
| 三 | 手 | | | | | | 親類愛 |
| 四 | 水 | 兵 | の | 母 | | | 忠孝 |

| | | |
|----|-----------|-----------|
| 二〇 | 税 | 公民の務 |
| 二二 | 啞の學校 | 親子の愛情、教育愛 |
| 二四 | 廣瀬中佐 | 忠君愛國 |
| 二五 | 胃とからだ | 相互扶助 |
| 二六 | 分業 | 同 |
| 二八 | 乃木大將の幼年時代 | 習慣努力、忠誠 |

第三章 小學教科と融和教育

| | | |
|----|------|-------|
| 二五 | 選挙の日 | 公民の心得 |
|----|------|-------|

尋常科第五學年 卷十

| 課題 | 強調事項 | 課題 | 強調事項 |
|---------------------|----------|-----------|-------|
| 一 明治神宮参拜 | 明治天皇の御聖徳 | 一三 京城の友から | 内鮮融和 |
| 二 アレキサンドル六王と醫師アイリツツ | 誠實、信愛 | 一四 炭坑 | 勤勞 |
| 三 道ぶしん | 共同、公益 | 一五 輪出入 | 殖産、愛國 |
| 四 馬市見物 | 動物愛 | 一六 登校の道 | 郷土愛 |
| 五 燈臺守の娘 | 博愛 | 一八 文天祥 | 誠忠 |
| 七 パナマ運河 | 公益 | 二〇 手紙 | 親類愛 |
| 八 開墾 | 勤勉、更生 | 二三 大宰府まで | 自信、公正 |
| 九 陶工 祐右衛門 | 工夫、勤勉 | 二四 たしかな保證 | 禮儀 |
| 一〇 銀行 | 相互扶助 | 二五 平和なる村 | 郷土愛 |
| 一一 傳書鳩 | 動物愛 | 二七 兒島高德 | 忠誠 |
| 一二 鉢の木 | 同情、責任、報恩 | | |

尋常科第六學年 卷十一

| 課題 | 強調事項 | 課題 | 強調事項 |
|----------|----------|--------------|-------|
| 一 太陽 | 自然界 | 一七 松阪の一夜 | 立志 |
| 二 孔子 | 正義、中庸、仁愛 | 一八 貨幣 | 經濟知識 |
| 四 遠足 | 郷土愛 | 一九 我は海の子 | 度量、愛國 |
| 六 裁判 | 公正 | 二二 リンカーンの苦學 | 努力、公正 |
| 九 殖産林 | 殖産 | 二三 南米 | 進取 |
| 一〇 手紙 | 友愛 | 二四 孔明 | 誠忠 |
| 一一 畫師の苦心 | 勤勉 | 二五 自治の精神 | 自治、協同 |
| 一三 ぶか | 人間愛 | 二六 ウェリントンと少年 | 正義 |
| 一四 北海道 | 開拓 | 二八 鐵眼の一切經 | 人類愛 |

尋常科六學年 卷十二

| 課題 | 強調事項 | 課題 | 強調事項 |
|----------|----------|--------|-----------|
| 一 明治天皇御製 | 明治天皇の大御心 | 二 出雲大社 | 建國精神、民族融合 |

第三節 國語科

第三章 小學教科と融和教育

| | | | |
|----|------------|---------|----------------|
| 六 | 商 | 業 | 共同生活 |
| 八 | ヨーロッパの旅 | 國際心 | |
| 九 | 月光の曲 | 同情、情操 | |
| 一二 | 小さなねぢ | 相互扶助、協同 | |
| 一三 | 國旗 | 愛國、國際愛 | |
| 一四 | リヤ王物語 | 誠實、孝行 | |
| 一八 | 法 | 律 | 憲法 |
| 一九 | 釋 | 迦 | 慈悲 |
| 二一 | 青の洞門 | | 懺悔、報恩 |
| 二四 | 舊師に呈す | | 謝恩 |
| 二七 | 勝安房と西郷隆盛 | | 愛國、度量、果斷 |
| 二七 | 我が國民性の長所短所 | | 國民の自覺向上、同胞融和一致 |

高等科第一學年 卷一

| | | |
|-------|-------------|-----------|
| 【農村用】 | | |
| 課 | 題 | 目 |
| 一 | 昭憲皇太后御歌 | 昭憲皇太后の御高德 |
| 三 | 先づ農業を重んぜよ | 職業の尊重、愛國 |
| 四 | 松の根 | 犠牲、協同 |
| 六 | 盤珪禪師 | 絕對愛 |
| 七 | 野火止の用水 | 公益 |
| 九 | 契 | 約 |
| 一〇 | 山村 | 郷土愛 |
| 一一 | 教へ草 | 勤勞、友愛 |
| 一二 | 動物を愛せよ | 動物愛 |
| 一六 | フェルチナンドマゼラン | 進取、努力 |
| 一七 | 征衣上途 | 報國 |

高等科第一學年 卷二

| | | |
|-------|---------|-------------|
| 【農村用】 | | |
| 課 | 題 | 目 |
| 一 | 農業 | 農業の尊重 |
| 二 | 村の秋 | 郷土の平和 |
| 二二 | 船津傳次郎 | 殖産 |
| 二三 | 漁船歸る | 隣保共同親和 |
| 二四 | 廣瀬武夫の手紙 | 愛國 |
| 二五 | スバルタ武士 | 國民的訓練、報國 |
| 二六 | 統計 | 社會に對する科學的考察 |
| 二七 | 筏流し | 勤勞 |
| 二八 | 瀧澤馬琴の苦心 | 刻苦勉勵 |
| 二九 | 足柄山 | 信義 |
| 三〇 | 郷土 | 郷土愛 |
| 【都會用】 | | |
| 課 | 題 | 目 |
| 三 | ボチ | 動物愛 |
| 一〇 | 紙 | 人を周旋する手 |
| 一三 | 眞の知己 | 信愛 |
| 一七 | 頼山陽 | 刻苦勉勵 |
| 一九 | 南洋の珍果 | 擴大せる國土の意識 |
| 二〇 | 綱引 | 國の名譽 |
| 三〇 | 故郷 | 愛郷、愛國 |
| 【社會用】 | | |
| 課 | 題 | 目 |
| 三 | 稻刈 | 國民的自覺 |
| 四 | 社會奉仕の精神 | 社會奉仕 |
| 五 | 護國の眼と腕 | 愛國 |

第三節 國語科

第三章 小學教科と融和教育

| | | | | | |
|----|----------|-------|-------|----------|----------|
| 六 | 讀の垣邊 | 動物愛 | 二四 | 國譯會吉 | 獨立自尊 |
| 九 | 保險 | 相互扶助 | 二九 | 奉天附近の大會 | 報國 |
| 一〇 | 鎮守に詣でて | 郷土愛 | 三〇 | 國史に選れ | 國民的自覺融和 |
| 一一 | 人を紹介する手紙 | 相互扶助 | 【都會用】 | | |
| 一三 | マルコポーロ | 進取の氣象 | 二 | 菊田瑞松 | 苦心 |
| 一六 | 碧海郡の農業 | 殖産、公益 | 三 | 月の光 | 自然美愛好の情緒 |
| 一八 | 山里の夕 | 郷土の平和 | 八 | 時ビスマークの幼 | 鍛練、努力、報國 |
| 一九 | 農業倉庫 | 協同 | 九 | 時釣 | 親愛 |
| 二〇 | 警察と國民 | 國民融和 | 一九 | ベートル大帝 | 興國 |
| 二一 | 村上義光 | 報國 | 二九 | 學校園 | 植物愛護 |

高等科第二學年 卷三

| | | | | | |
|-------|-------|----------|----|----------|-------|
| 【農村用】 | | 課題 | 項目 | 強調事項 | |
| 一 | 九十の春光 | 自然美愛好の情緒 | 二 | 春の草 | 萬物の生命 |
| | | | 三 | 葉デスマークの農 | 殖産、協同 |

第三節 國語科

| | | | | | |
|----|---------|----------|-------|---------|---------|
| 四 | ベストロッツテ | 人類愛 | 二八 | 兒島農場 | 協同、殖産 |
| 六 | 鳥の聲 | 自然美 | 二九 | 曉鐘 | 勤勞、敬虔 |
| 七 | 思出 | 人生 | 三〇 | 樂地 | 自覺、遠觀 |
| 一〇 | 蛙 | 動物愛 | 【都會用】 | | |
| 一二 | 租稅 | 公共心 | 一 | 春晴千里 | 故國の美禮讚 |
| 一三 | 阿閉掃部 | 義勇報公 | 二 | 五百羅漢の畫幅 | 互譲、益世 |
| 一五 | 天然記念物 | 自然愛 | 五 | 感情 | 感情の整理 |
| 一六 | 會社 | 相互扶助社會意識 | 一〇 | ナポレオン | 共存共榮、自制 |
| 一七 | 市兵衛の話 | 報恩、同情 | 一八 | 由利八郎の意氣 | 強固なる意志 |
| 一八 | 夏の曉 | 郷土の平和 | 二〇 | 中吉の誠實 | 誠實 |
| 一九 | 土に立脚せよ | 自覺更生 | 二六 | ビクトリヤ女帝 | 愛國 |
| 二二 | 日本の風土 | 國土への認識 | 三〇 | 皇國の民 | 修徳、興國 |
| 二四 | 十和田湖の美魚 | 殖産、公益 | | | |

第三章 小學教科と融和教育
高等科第二學年 卷四

| 【農村用】 | | | 【都會用】 | | |
|-------|-----------|---------|-------|----------------|---------|
| 課題 | 題目 | 強調事項 | 課題 | 題目 | 強調事項 |
| 一 | 讀書 | 修徳 | 一五 | 國貨 | 國民的志操 |
| 四 | 齊田田植式 | 國民精神 | 一七 | ローマの舊都 | 愛國 |
| 五 | 大嘗祭 | 敬神 | 二三 | 東西雜話 | 修徳 |
| 六 | 祭祀と農業 | 敬神、農業尊重 | 二四 | ポアンナード君の歸國を送る詞 | 責任、人類 |
| 八 | 渡り鳥 | 動物愛 | 二五 | 道徳と法律 | 公正、國民道徳 |
| 九 | 田園の曲 | 自然美愛好 | 二九 | 峠の茶屋 | 親和 |
| 一〇 | 我が農業と對外貿易 | 殖産愛國 | 三〇 | 國語と愛國心 | 愛國、協同一致 |
| 一一 | 編羊 | 同 | 六 | 伊藤博文 | 報國 |
| 一二 | ハワイ通信 | 國際的精神 | 一〇 | 資本 | 相互扶助 |
| 一三 | 手紙の認め方 | 禮儀 | 一四 | 賢母の教 | 母子愛、努力 |
| 一四 | 柳生宗矩 | 報公 | 一七 | 法律及び命令 | 國民の義務 |

二、綴方科

| | | | | | |
|----|-------|-----------|----|---------|---------|
| 一九 | 田園の自然 | 自然愛 | 二四 | 歐米人の日本觀 | 國民的自覺反省 |
| 二〇 | 我が家 | 家族愛 | 二七 | 關稅 | 興國 |
| 二二 | 世界の航路 | 國際的認識、人類愛 | 二八 | 會國藩 | 愛國 |

- 一、日誌其の他兒童の作品を通じて兒童の生活を反省觀照せしめ生活を指導すること。
 - 二、人格者大家等の文章に接せしめ兒童の人格陶冶に資せしむること。
 - 三、共同綴方、共通課題、作品題讀等により兒童相互の共通融合の精神の涵養に資せしむると共に相互的練磨に資すること。
- 三、書方科
- 一、兒童の書を觀照批判して品性の陶冶を圖ること。
 - 二、大家の筆蹟を觀てその高潔なる人格を忍び兒童のこれが陶冶に資せしむること。
 - 三、融和に關する語句を練習せしめ融和的精神を涵養すること。

第四節 國史科

- 148 -

第一 國史科教授の要旨と融和教育

現今世界の各國は何れもその國家を組織せる民族特有の理想を有するもので、民族自體がその理想の實現に向つて努力するとき、民族の發展と國民生活の發展を期することが出来るのである。

而して我が日本民族の理想とするところは、皇室を中心とする理想にして、天祖の神勅に明らかなるところである。この理想は建國以來一貫せるところにして、永遠に變るところなき理想である。國家が偉大なる發展を遂げんとせば宜しく國民特有の理想をもち、その實現をはからねばならぬ。而して國民的理想をして國民全體に知らしむるの途は國史教授に俟たねばならぬ。その使命を完ふするところに國史教授の本質があり眼目がある。

而して我が大日本帝國國民は萬世一系の 天皇を奉戴し、然かも國民は大和民族を中樞としその固有の文化を基礎となし、渡來文化の長を採りこれを國家的のものとなして我が文化を啓培し、又民族的にも渡來者を全く大和民族の精神と同化し、共に上に 皇室を仰ぎ 天皇は國民を赤子として慈しみ、

こゝに皇室と國民とが所謂一大家族の如くに結合せられ、随つて國民相互の間に微塵も差別意識がなく協力一致團結して 大御心即ち國家の理想實現に力めつゝ來つたのである。

この優れたる民族の理想、國家及國民の發展をよく熟知せしめ、確固不拔の國民意識を涵養し、そこに一貫して流るゝ日本精神を明らかにし、國民一致、融和團結して國民的理想に邁進しなければならぬ。

教則第四條第一項に

國史ハ國體ノ大要ヲ知ラシメ兼テ國民タルノ志操ヲ養フヲ以テ要旨トス

とあるはこの點を明かにしたものである。

而して我が民族的理想としての皇室中心の大理想を理解せしむることは單に知的方面の啓發のみによりて遂行せらるべきではなく、更に情的方面の陶冶を必要とするのである。情操が眞によく陶冶せらるゝときには、理想を實現せんとする要求も愈々熾烈となるものである。教則に國民的志操とあるはこの點をいふのであつて、眞の國民的情操を陶冶し、日本國民として同胞親愛の美しき精神を涵養するところに融和教育上國史教授の重要な使命がある。

第二 國史科教授の方法

- 149 -

第三章 小學教科と融和教育

- 一、開闢の始め天孫民族の統治が民族抱擁萬民同化主義にして、こゝに皇室を中心としたる一大家族國家が成立せられ、何等人種的差別なかりしことを熟知せしむること。
- 二、御歴代皇室の遍く萬民に對し御仁慈を垂れさせ給ひし 大御心を體し、陛下の赤子として忠君報國の道に協力すべきことに徹せしむ。
- 三、我が國の中期に於て地方分權より更に中央集權の封建制度の展開し來りたることの、その時代の過程として止むを得ざりしことを理解せしむると共に、因襲的差別觀念の生じたることの不合理なるを覺らしむ。
- 四、舉國一致、融和協同が國家を隆昌ならしむるに缺くべからざる要素なることを知らしむ。
- 五、國民間の差別を交除し、融和協同が國民相互の幸福を齎すものなることを強調す。
- 六、同胞愛、博愛の歴史的事實を知りて融和協同の社會の實現に奮起せしむ。
- 七、境遇、集團、階級等による現在の生活より奮起すればそれらの關係を打開發展し、惹いては國家の隆昌のために貢献し得ることを悟らしめ、内部の自覺向上の精神を喚起すること。

第五節 唱歌科

第一 唱歌科教授と融和教育

音楽は感情を表現する言語であると云はれるほど人間の感情生活にとつて密接なる關係を有するものである。あらゆる藝術の中で人間の肺腑にせまり、心情を奥底から動かす力をもつものは音楽であつて、かくの如き崇高純美の音楽の中から選擇せられて普通教育に採用せられたものが唱歌である。

教則第九條第一項に

唱歌ハ平易ナル歌曲ヲ唱フルヲ得シメ兼テ美感ヲ養ヒ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス

とある。これによりてみるに唱歌教授の目的は、技術方面の陶冶と更に精神的方面の陶冶との二方面がある。この精神的方面の陶冶は、歌詞及び歌曲によつて音楽藝術を十分に味はしめ純真無我の心境に導いて崇高なる美的情操を涵養し、高潔優美なる人格を造りあげることによつて、道德的感情、國民的志操を涵養せんとするものである。本科が融和教育の情操陶冶に於て最も大切なる所以はこゝに存するのである。

第二 唱歌科教授の方法

- 一、歌詞歌曲に渾然同化せしめ、それと融合せる感情を以て唱誦せしむ。

第五節 唱歌科

- 二、小さき唱諭にも價值を見出し、音楽の美に浸らしむ。
- 三、相互に精神の融合をはかるために合唱を多くとり入れること。
- 四、遊戯舞踏等の動作を交へて不知不識の間に融合偕和の氣分に浸らしむ。
- 五、觀賞指導によつて高尚なる音楽趣味、觀賞能力を養成せしむ。
- 六、諸儀式歌によつて國民的情操を陶冶す。

第六節 體操科

第一 體操科教授と融和教育

體操は運動によつて直接に身體のより良き發達を遂げしむるのみならず、精神的方面にも極めて有意義なる影響を與ふるものである。

教則第十條第一項に

體操科ハ身體ノ各部ヲ均齊ニ發育セシメ四肢ノ動作ヲ機敏ナラシメ以テ全身ノ健康ヲ保護増進シ精神ヲ快活ニシテ剛毅ナラシメ兼テ規律ヲ守リ協同ヲ尙フノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

とある。體操科は斯くの如く身體的方面に於て全身の健康をして保護増進せしむると共に、惹いては精神の發達をも促すもので、殊に遊戯、競技が品性陶冶に及ぼす効果は少くない。又體操は身體的行動を規律することに於て吾人の社會的行動に於ける秩序を保つ精神の上に得るところが少くまい。又その團體的行動により規律、協同、服従、正義、人格尊重等の如き協同生活、同胞融和の精神を修練體得する重要な融和教科である。

されば體操科に於ては身體の健康増進の上に融和的實踐的徳性を涵養し、これが協同一致の精神を涵養せしめねばならぬ。

第二 體操科教授の方法

- 一、準備の完きを期し實施に當りては成るべく服裝を統一し、差別觀を惹起せざらしむること。
- 二、指導者は常に眞摯なる態度を以て卒先窮行の範を示すこと。
- 三、公正の態度と純潔なる心情を以て終始すること。
- 四、下學年及中學年並に女子にありては優美なる精神を養成するため、表情遊戯及ダンス等を多く加味すること。
- 五、中學年にありては屢々協同融和に富める團體遊戯を加へること。

第三章 小學校科と融和教育

- 六、上學年に向ふに従ひ規律的訓練に重きを置くこと。
- 七、遊戯等は地方に於ける諸行事に材料をとり、これを協同實踐し實際社會生活に移すやう指導すること。
- 八、遊戯競技等の材料には又自然の關係を考慮し、自然界の現象の中に協同生存するの意識を體得せしむること。
- 九、個人的排他觀を惹起し易きもの、又は居住地區別の競技等の實施は充分考慮すること。

第七節 郷土科

第一 郷土科教授と融和教育

郷土科はその中心を郷土社會の過去及び現在に置き、兒童各自をしてこれを自然的、人間的の各方面から考察することによつて自己の郷土を認識し理解し、更にこれを受護して將來の發展を念願せしめんとすることを主眼とする。即ち郷土教育は、舊來の郷土地理の如く、單に郷土の山川・湖沼・林野・市邑等の初歩的學習によつて地理的認識を形成せしめんとするものではなく、又徒らに郷土の社寺・

古墳その他の建造物に關する附會の口碑・傳説を授けて歴史の基礎觀念の形成にのみ汲々たるものではない。要するに夫々自己の郷土をこの大なる祖國の中に發見し、これが愛護と建設のために努力せしめんとするものであるから、一方に於ては郷土感・郷土的情操・郷土認識の育成であると同時に、他方に於ては眞の祖國愛の根本的教養であらねばならない。

斯くの如く郷土教育では郷土の文化を中心として各種の事物關係を直感し、推究し、批判し、援助し、努力せしめんとするものであるから、最も重きを郷土社會の上に置かなければならぬ。若し郷土の社會にして圓滿平和を保ち相互の理解一致が行はれ、結束統一が完全であり、その自治行政も十分に行はれてゐるならば、人格育成の上にも郷土教育の上にも大なる勢力となるのであるが、これに反して若し郷土の社會が常に反目・嫉視・怨嗟・抗争を續けてゐるならば、ひとり郷土の發展、祖國への寄與に於て重大なる損失であるのみならず、それが兒童の上に及ぼす悪感化悪影響も亦大である。故にそれらの根據原因たる迷信、因襲等から起つた理由なき階級思想・差別觀の打破は最も必要な急務となるのである。郷土科は實に兒童の郷土に於ける實際指導として生きたる融和教科と稱すべきである。

第二 郷土科教授の方法

第七節 郷土科

第三章 小學教科と融和教育

- 一、郷土の地理的諸事象を理解し、これが國家生活上に於ける地位に自覺し、郷土の發展のために資する温き郷土感を涵養すること。
- 二、郷土の歴史的關係に徹し、これが祖國發展の中に存する地位を自覺せしめ、これを熱愛する郷土的情操の涵養に資せしむ。
- 三、郷土の社會的諸現象を認識してこれが向上發展のため愛護し、協同融和の社會を建設することが祖國を愛し日本民族の繁榮を來す所以なるを覺らしむること。
- 四、若し自己の郷土にしてそこに差別が横たはり協調諧和を缺くが如きことあらば、これを國家的社會的不名譽として、良き郷土、良き社會國家への理想に向つて發展せしむべく指導すること。

第八節 其他の各科

小學校に於ける一般教科に依る融和教育の主なる科目は大體以上の六科目であり、又融和事業に關する教育的方策要綱に於ても以上の學科目を擧げてゐるが、尙その他の科目と雖も融和教育上夫々の教育的要素よりこれに資するところが少くない。今それらの學科目に付ても左にこれが融和教育との

關係を述ぶることゝしやう。

第一 算術科

一、算術科教授と融和教育

小學校に於ける算術教授と融和教育とは非常に深い關係がある。何となれば小學校の算術は單に數學としての論理或は計算の技術を教へるのみでなく、兒童の生活を指導せんとするもので、その生活指導の中には自ら人格尊重・共同互助・融和親善等の人間社會の相關々係の生活内容が含まれてゐるのである。而して數の理と技術とを實際生活に適用實現せんとするところの算術の分野は殆んど生活内容の全部に行き亘るもので、自然科學や産業經濟の方面はいふまでもなく、藝術・道德・宗教・社會等の凡ゆる方面に適用せられ、且つこれら各般の社會的方面に於て進展せられつゝある社會事象を思考せしめ、正しき判斷をなさしむると同時に、これらの社會構成の各要素をなす一員の尊嚴なる存在を認識するに至り、算術は人間の全生活の生活内容を含むといふことが出来る。

右の如く人格尊重・協同親和等の生活を指導するのが融和教育であるから、算術に於ける融和教育は、その方面の生活を數量化するところの指導でなければならぬ。然しながらこれは單に人格尊重・協同親愛等の融和的材料から構成した算術問題の計算解法の指導のみとは全く異なるもので、融和教育

第三章 小學校科と融和教育

としての算術教育は、それによつて人格尊重・協同親愛等の融和生活に深い理解を持たしむると同時に、それを以て生活に必要な數理的の考へ方・能力等を養はんとするもので、後者の如きは融和教育の目的には添ひ難きものと云ふべきである。

斯かる考へのもとに融和的方面の數量を取扱ふと同時に、その生活の理解を深め、さらに兒童の公共道徳的生活態度を養ふに努め、大に國家社會の協同親和の生活に貢献寄與する道徳的態度を養ふことに努めねばならぬ。

二、算術科教授の方法

- 一、算術學習の内容には努めて協同・親和等の生活に関するものを探り、融和精神を養ふこと。
- 二、社會生活に関する算術學習には必ずその社會的意義、道徳的態度の指導に重きを置き、その數量の大小にかゝはらず、それらが社會構成、社會生活上に皆絶對的價値を有し、その尊嚴性を有することに自覺し、正しき社會觀、人間觀を把持せしむること。
- 三、生活訓練の立場より兒童自ら地方實社會に於ける生活に基ける材料を蒐集せしめ、自ら問題を構成せしむるやう指導し、人格尊重・相互扶助・共同親和等の融和精神を涵養すること。

第二 地理科

一、地理科教授と融和教育

地理は地球の表面及び人類生活の状態を知り現代に於ける社會全般の人間生活の状態を直接に取扱ふものとして融和教育上重要な意義がある。

而して外國地理に於ては人類は地球の表面を共同の郷土となし、世界の氣勢に觸れることは結局日本を學ぶことで世界に於ける日本の地位・關係を自覺し國民の自覺を促し、國民相互の協同融和を教ふる上に深い意義を持つものである。

日本地理を學ぶことは、全國の一切の國民的關係に觸れしめ、以て國民精神と國民的自覺とを養ひ國民の一致協力の愛國精神涵養の根柢を養ひ、より良き國家建設の前提たらしめる。より良き國家の進展こそ全國民の相互の人格尊重に基ける共存共榮と協同親和に基づくべきことを知り、現實社會のこれらの缺陷を補ひ、今後の發展を企圖せしむる。

郷土地理は、單に郷土の物識りをつくることではなく、體驗によりて郷土の共同互助・融和輯睦の郷土社會の實際を把持せしめ、美しき郷土生活の態度を訓練することがその目的である。而して眞の郷土を理解しこれが共存共榮を圖るの精神は、郷土に於ける融和社會建設の基調となると同時に、それは大にしては愛國心となり、全同胞の相愛親和の國土建設の精神を培ふこととなるのである。

二、地理科教授の方法

第八節 其他の各科(地理科)

第三章 小學教科と融和教育

- 一、日本地理に於ては我が國領土の發展及び交通・文化・産業・經濟の發達・住民の移動並に種族關係風俗慣習等を知悉せしめ、全國民の一致團結・親愛融和の愛國精神を養ふこと。
- 二、外國地理に於ては諸外國の狀態を明かにし、國際精神に基き人類共存の觀念を養ふと共に、我が國の世界に於ける地位並に關係を知り益々愛國心の培養に努むること。
- 三、郷土地理に於ては郷土住民の生活狀態・社會關係等を知り、相一致團結し過るゝものも早きものも互助提携して郷土の發展と郷土愛の精神を徹底せしむること。

第三 理 科

一、理科教授と融和教育

理科は天然界及び自然界の現象を知りてその総合的有機的關係を知り、その間に流るゝ相互依存の大生命的存在を知り、これに對する美しき情操を陶冶し、且つこれが人生に及ぼす關係の少からざるを知る。而して人はすべてこれを愛好し利用更生することにより人間相互が美しき共存共榮の生活と萬物一如の嚴肅なる絶體的存在價值とに自覺し、人間相互の尊嚴性を把握するに至るもので、融和教

育上重要なものである。

更にこれらの事項を具體的に考察すれば、理科の教育的價值は、智力の練磨として觀察力、思考力を増し、又感情の養成としては自然界に對する愛好の情を養ひ、意志の鍛練としては理性的行動・獨立的行動・規律的行動等に資するところが尠くない。又實質的にはその利用更生として職業的、産業的、經濟的知識を涵養する。

即ち理科は自然美を愛好するの美しき情操の陶冶より人格尊重の貴き情操を涵養し、自然界の現象と人間生活との総合的體系を理解して人間尊貴の絶對的存在に自覺し、これら諸現象の上に生存する相互の協同親和の一體觀の涵養に資する等融和教育上重要なものである。

二、理科教授の方法

- 一、植物の發生、動物の發育等を觀察してこれが愛育愛護の情操より人間愛の崇高なる情操へ發展せしむること。
- 二、動植物と人間生活との相互依存の關係を知り、更に人類の共存共榮を悟らしむること。
- 三、植物の繁殖、動物の集團生活等より人間の協同生活機構を理解せしむること。
- 四、動植物の生命を尊重愛護することより人間の生命としての人格尊重の觀念を涵養すること。
- 五、自然界の發育及び進化より人間の絶體の平等性を把握せしむること。

第八節 其他の各科(理科)

第四 手工科

一、手工科教授と融和教育

手工科の生命とするところは製作であるが、この製作は單なる模倣的製作には何等の價値をも認め
るものではなく、兒童自身の考案によつて自發的に創作する科程を重要視するものである。何となれ
ば製作の價値は自己表現にあり、自主的作業にあるからで、それ故に技巧は稚拙であつても自立的に
計畫し構成したものであるならば、そこに自己發展があり、自己充實があるのである。

手工科に依つて得らるゝ創作的・計畫的・能動的精神の發揮は、惹いては兒童の人間的能力の發揮
より人間的自覺意識を涵起し、自己の尊嚴性を把握し、自覺更生の源泉となる。又製作、勤勞愛の精
神の體現並にこれが重視は、努力奮闘自己の職業に勤勉し、境遇を打開向上してその社會的發展の源
動力となり、更に人格陶冶と美的勤勞、心身の統括調和は情操並に人格の陶冶向上のために資すると
ころが非常に多い。この點に於て手工科は融和教育、殊に内部兒童の自覺向上教育に必要缺くべから
ざる科目である。

二、手工科教授の方法

一、努めて模倣的教授より創作的教授に重きを置き、兒童の能動的自覺意識を發揮せしむること。

二、勤勞製作より努力勤勞の精神を涵養すること。

三、美的製作より情操の陶冶人格の向上を圖ること。

四、製作並に材料蒐集等をして個人的より更に共同的・團體的に指導し、協同團結の精神を發揮す
ること。

五、地方の實際指導に即したる教材を撰擇し、職業に對する理解並に偏見を打破し、併せて職業の
指導向上を圖り郷土共存社會の發達に資すること。

第五 實業科

一、實業科教授と融和教育

實業科は農業、工業及び商業に關する教科で、夫々の職業を愛好するの精神を涵養しこれに従事す
るの神聖なることを自覺し、而して克く實際社會の有機的關係を理解し且つ社會人と共にその協同的
發達に參與するの社會的知識技能を習得するものである。

而してこれら實業の發展は個人の經濟生活向上の基礎となるのみでなく、地區、郷土等の集團生活
全體の更生發達をはかり社會的地位を高むるに大なる貢獻を齎すものである。この點に於て特に部落
の更生發展の基調となり社會的經濟的地位の向上に資するところが尠くない。

第三章 小學教科と融和教育

又實業科教授は勤勉・忍耐・節約・利用・綿密・創作工夫・信用等の道德的社會的精神の涵養をもその目的とするところである。

而してこれらの實業は農業にせよ、商業にせよ、又工業にせよ、古より一般に百姓、町人又は職人風勢等と呼び捨てにされ、封建制度の遺習として勞働そのものを輕視し、又これらの職業者を蔑視し來つたのである。然しながらこれら實業の、社會的發達に重要且つ神聖なるべきことは、既に述べたる如くであり、特に因襲的差別による部落産業並に職業に對する賤視觀念の如きは、本教科の目的達成の上よりも排除せられねばならぬことである。

而して之が實際的取扱に於ては地方の現實社會の經濟狀態に立脚して教授することが最も肝要で、この點に關し教則に於ても農業科に於ては(第十三條)「土地ノ情況ニ適切ニシテ兒童ニ趣味アル事項ヲ授ケ」云々、工業科に於ては(第十三條)「土地ノ情況ニ適切ニシテ兒童ニ趣味アル事項ヲ授ケ」云々、又商業科に於ては(第十四條)「學校所在ノ地方ニ於ケル賣買、金融」云々、と夫々地方に於ける實際上の業務に關聯してこれを教授すべきことを指摘してゐる。

以上の如く實業科の學習は地方郷土に於ける實際社會に對する理解と、經濟生活の協同的發達に資するの精神を涵養する上に最も肝要なる教科である。

二、實業科教授の方法

- 一、見學・實習・作業等をして共同的に行はしめ、協同諧和の精神を涵養すること。
- 二、地方の實際的職業に關聯せしめ、これが眞の理解を促し相互依存の精神を體得せしむること。
- 三、各種職業を理解することに依りこれに對する趣味と愛好の精神を涵養し、郷土愛、全體一致の融和的發達の精神を指導すること。

第八節 其他の各科(實業科)

第四章 融和教育に於ける訓練並に養護

第一節 融和教育に於ける訓練

第一 學校生活と融和的訓練

訓練とは被教育者の實行に訴へて教育の目的を達せんとする作用で、教授が知的活動による教育作用であるに對して、訓練は意的・道徳的・感情の活動による教育作用である。眞の教育は如何に知的に發達するとも、これに伴ひ意志の活動による實踐を缺く時は完全なる教育といふことは出來ない。即ち訓練の終局目的は道徳的人格の涵養で、道徳意識を體得せしめ道徳を實踐せしむることである。而して道徳上の知識・感情・意志を陶冶してその實踐的方法を知らしむるものは學校教科のうち修身科の任務とするところであるから、修身科に於ける協同・親和・友誼・同情・公正・同胞愛等の融和的徳目の實踐は、訓練に於て實踐化せられねばならない。

凡ての社會生活に於て道徳的意志の實踐的訓練は最も重要であるが、こゝに融和問題を顧るに、人が他人の人格を冒瀆する所謂差別は何等必然的理由のなきもので、封建制度の遺制が根強き因襲となり、牢固たる傳統的賤視觀念となつたものであるから、これに對して抽象的理念による知性の理解を與ふるのみであつては、到底その目的を達成し得らるゝものではない。こゝに於て學校に於ける融和教育は一般教科教授より更にこれが實踐的訓練の方面に力を注がねばならない。

而して小學校に於ける融和的訓練は、學校生活に於て協同親和の氛圍氣の中に生活せしめ以て差別意識の發生を不能ならしむると共に、更に積極的には生徒自身の融和社會を構成せしめて、一般協同社會への根柢を築かしめ、以て融和教育の目的を完全に達成せんとするものである。即ち融和教育に於ける學習訓練は、知識を通じて知つた融和精神を實踐化し體驗化せしめて完全なる融和教育の目的を實現せしめんとするものである。

學級及び學校は兒童の生活社會である。この小き社會人が各々その人格を尊重して互に侵すことなく協同生活を營み共に理想に向つて進むとき、眞の教育の目的が達せらるゝのである。兒童が相互に共存共榮のこの小き理想社會を造ることが、融和教育の學校訓練に求むる點であつて、兒童に眞の道徳教育を爲さんとすれば、先づ差別的態度を持たぬ共同の幸福を心より願ふ兒童たらしめねばならない。こゝに學校訓練に於ける融和教育の重大性が存するのである。兒童をして全人格的にあくま

で實踐的生活體驗を通じ、人格の尊厳性を自覺せしめ、眞の人間として眞の社會人としての道徳を堅持せしめるところに、兒童融和教育の訓練上負ふべき重大なる任務の存在が認められねばならぬ。

第二 各學年に於ける訓練方針

一、低學年の訓練

この學年は尋常科第一、二學年の程度であつて、差別意識に對しては全く無關心であるか、或は部落を以て單に異りたる地區としてのみ考ふるに過ぎざる程度である。この時代の兒童は殆んど純眞無垢白紙の如き心理状態にあるが故に、この時代に於て良き環境の中に溫純なる生活を營ましめ、美しき人間の二葉を發育せしむべく、基礎的な訓練陶冶を施することは融和教育上最も肝要のことである。この時代に於て訓練上最も留意し且つ努力すべき事項を挙げれば次の如くである。

- 1 兒童の純眞なる精神の萌芽を順調圓滑に發展せしめ、且つ兒童の家族、近隣、近接地區等順次圓滑にその友愛意識を發展せしめ、これが共同生活を指導すること。
- 2 兒童の教室内に於ける組より學級全體にその共同生活を發展せしむる上に、協同融和精神の擴大を圖り、毫も差別意識を感染惹起せしめざること。
- 3 種々の融和接觸の機會をつくり友愛關係の擴大を圖り、排他的態度を起さしめず、相互親愛の實を擧げしむること。

實を擧げしむること。

- 4 植物栽培、動物飼育等により生命の尊重に對する態度を培ひ、惹いては人間愛、人格尊重の行為の基調を體得せしむること。

二、中學年の訓練

この時代は尋常科第三、四學年の時代で、兒童はこの時代に於て次第に社交性が廣まり、その社會生活も漸次現れ道徳的自覺意識も相當生長發展する。故にこの時代は環境よりの感化を受けること甚しく、ために差別觀念に感染せらるゝ機會が非常に多い。又意志の發達と同時に次第に習慣性を培ふを以て、この時代に受けた差別觀念は習慣化され、將來その変除を最も困難ならしむる因襲的差別觀の第一歩を履み出すに至る。

又それと同時に、この學年はより良き習慣を養ひ、社會觀念の萌芽並に團體生活意識は次第に發展し、社會的道徳的訓練の効果を齎す時期である。故に環境の感化と相俟つて低學年時代の純眞性を順調に發達せしめ、又團體生活、協同融和への生活の第一歩を踏ましめねばならない。

この時代に於ける融和的訓練上特に留意し努力すべき事項は次の如くである。

- 1 人格尊重、人間尊嚴の明確なる意識を體得せしむること。
- 2 非社會的なる排他・差別・自卑等の態度や行動を絶對になさしめず、自他尊嚴の生活の第一歩を

履ましむること。

- 3 兒童自身の自治による協同的團體生活を訓練し、將來の社會生活の基礎を培養す。
- 4 正義を愛好し邪惡を克服するの力を養成し、正道に進ましむる習慣を養成すること。

三、高學年の訓練

この時代は尋常科第五、六學年より高等科の時代にして、兒童の道德的意識は既に充分に發達し、周圍より受くる感化に對しては批判的態度を持し、その正邪善惡を判別し取捨選擇を自由にするの力をもつに至る。又習慣は既に培はれ自己の意識となり自律的行動を營む。又社交性は廣まり全校の兒童を自己の朋友として團體生活をなし得るに至る。それ故にこの時代に於ては明かなる人格尊嚴、協同親和の自治的訓練をなし、且つ國民教育の最後の段階としての國民的訓練を實施し、愛國精神、同胞親愛の精神を充分徹底せしめねばならない。

この時代に於ける融和的訓練の特に留意し努力すべき事項は次の如くである。

- 1 人格尊重、人間尊嚴の明確なる意識に徹底せしめ、正しき人間觀を完成すること。
- 2 共同的團體生活に於て非社會的態度を絶滅し、協同親和の社會人としての第一歩を營ましむること。
- 3 封建的差別觀念に對する批判力を養ひ、積極的に協同融和生活への第一歩を履ましむること。

- 4 確固不拔の國民精神に徹せしめ、國民總親和總努力の素地を培養すること。

第三 學校訓練の實際施設並に方法

一、校訓と級訓

小學校に於ける融和的訓練の方法は全國的普遍的のものであると同時に、これが實踐を指導するに當りては地方の現状、學校の實情等に鑑みて適切有效ならしむるを要する。

先づ小學校に於て融和的訓練を實施せんとする場合には校訓並に級訓にその精神を織り込まねばならない。校訓は一學校に於ける訓練實踐要項で級訓は一學級に於ける訓練要項である。この融和訓練の校訓は本書第一章に於て述べたる融和教育の要旨を参照し、その校に於ける融和教育方針に基き夫々の地方、學校の實情に基いて制定し、適當の箇所に掲示して兒童をして且夕これを仰がしめ修養鍛練の基礎とする。

その一例を擧ぐれば人格尊重・協同互助・人間相愛・共存共榮・四海同胞・總親和總努力・一視同仁・國民諧和・自覺向上等の意味を適當に入れて決定すべきである。

級訓は校訓に則り各級に適切なるものを掲げ、少くとも毎學期一回位適時掛けかへる如くして絶えず刺戟することが肝要である。

第四章 融和教育に於ける訓練並に養護

その一例を擧ぐれば次の如くである。

尋常科第一學年

ナカヨク・オトモダチニナリマセウ・オテテツナイデコロ一ツニ・ケンカハヤメテオトモダチ・ミンナオトモダチニナリマセウ・オテテツナイテバンバンザイ

尋常科第二學年

わたくしたちは皆兄弟・心をあはせせんきやうしませう・みんな一しよにあそびませう・お互ひにたすけあひませう・おともだちはへだてなく・教室は私たちのお家

尋常科第三學年

日本人は皆兄弟・やさしい心で助けあへ・我等國民 陛下の子供・仲よい國民日本の生まれ・弱い者には親切に、強い者にも恐れずに・我等國民力を合せて國の爲

尋常科第四學年

學校は我等の世界・共同一致・學校は我等の家・協同助力は人の道・同胞すべて九千萬

尋常科第五學年

學校は我等の社會・四海同胞・人格尊重・君が代を歌ふ心にへだてなし・人間相愛・協同互助

尋常科第六學年

人格尊重、人間禮讓・陋習を打破せよ、仰げ昭和の黎明・人間は地球を家とする一大家族なり・協同社會の建設・自他共に尊し、其の使命は重し・團結せよ、日の御旗の下に

高等科第一學年

吾等は人間也彼も人間也・團結せよ九千萬、東洋の平和の爲に・正義の劍融和社會建設の爲・もろともに助けあひつゝ國民のむつまじきあふ世ぞたのしかりける・協同する者は共に榮ゆ

高等科第二學年

人よ汝等はすべて 陛下の赤子なり・人よ汝の職業によつて汝の人格に貴賤の別あるべからず・四方の海みなはらからと思ふ世になど波風の立ちさわぐらむ・我等鍛へんこのからだ協同日本の建設のために・我等は勉めんこの身わが世に正義の光満つるまで・我等は備へん來るべき務の爲に新しき世のあけぼのに・汝等は人格尊重の劍と人間協同の盾とを與へられたる戰士なり、正義のため人道のために戦はざるべからず

その他環境に於ける訓練事項としては繪畫・寫眞の揭示・時事學級の揭示教育・ポスター等により融和精神の涵養に資することも適切なる方法である。

二、學校諸行事

小學校に於ける諸行事に於て全校生徒會合する機會に於て全兒童の親愛互助の共同訓練を實施することは最も適切なることで、兒童はそれらの諸行事を自己の共同的な意志により行動し、兒童自身の

第四章 融和教育に於ける訓練並に養護

社會生活としてこれを實施するのである。この機會に於て兒童相互が自から人格を尊重し協同的に親愛相扶の精神を以てその實踐を訓練することは、融和訓練の重要な事項である。

而して小學校に於ける主要なる共同的諸行事には次の如きものが擧げられる。

- 1 唱歌會 優雅なる情操の空氣に浸らせて全兒童の全一的觀念を涵養する。
- 2 學藝會 知的發表に伴ひて全校兒童の共同勉學、人格向上に邁進せしめ、且つ學習による友誼・親愛・共同等の實演により協同生活を體得せしむる。
- 3 運動競技會 體育上の發表の機會に於て努力奮闘の精神を鼓舞し、且つ合同的競技により協同精神を體得せしむる。
- 4 修學旅行 學習による知識を實際に體得すると共に郷土近郷の共同的自覺並に社會生活の實相を體得せしめ社會意識を涵養する。
- 5 入學式並に始業式 同郷に於ける同年輩の兒童相互が共によき社會人となるために學校に入り、學問を習得し人格を修養向上すべき學校なる共同社會生活を意識せしむると共に、相互親愛扶助による友愛の團體生活の基礎を體認せしむる。
- 6 卒業式並終業式 同郷の全兒童相互が共に修學し修養を積み、人としての自治向上をなせる共同社會生活を終るに當り、社會に立ちその實生活に入り、これが體得せる友愛・親和・協同

の社會生活を實現せしむ。

- 7 學校記念日 過去に於て同じ郷土の人々が、その學校に於て多年の間人間的・國民的修練をなせることを顧み、且つ學校當事者の努力を忍び、その享受せる識徳を以て良き郷土、よき國民たるの志操を共に自覺し、全校の繁榮と郷土愛・同胞愛の精神を涵養する。
- 8 雜祭・端午の節句會等 善徳・尙武の精神を涵養することより次第に兒童のより良き生長を祝福するに至れる古來の郷土的諸行事を學校に於て實施するに當り、兒童の全體的道德的向上と正義を愛好し邪惡を打破し、より良き社會人となり親和協同の實踐者となるを強調する。

三、當番勤務

當番勤務は當番を定め兒童をして交々諸種の勤務に服せしむること、これは兒童をして學校のため使用するのではなく、これによつて作業訓練の實を擧げんとするものであるから、これが實施に當りてはその配當を平等公平にし、各自をして積極的にこれが自覺意識の下に行はしむると共に、自律的・自主的人格の陶冶と、協同意識の涵養とに留意せねばならぬ。而してこれが適用は兒童の心身の發達の程度により適切なる指導をなすことが肝要である。

小學校に於て融和協同の精神の涵養に資すべき當番勤務としては次の如きものが擧げられる。

- 1 掃除及整頓 教室及校庭の清潔並に整頓をなさしむるもので、兒童學習環境の美觀と秩序を保

第一節 融和教育に於ける訓練

第四章 融和教育に於ける訓練並に養護

ち自律的意識並に共同生活意識を涵養する。

2 學校園の作業 美麗なる花卉、青々としたる樹木等のよりよき發育生長のために働き、植物愛護の精神・美的情操等を通じて人間相愛の精神並に高尚なる藝術的情操の涵養に資する。

3 動物飼育 家畜・家禽・魚類等を飼育することにより動物愛護の精神を通じて一切の生物の生命の尊きことに自覺し、惹いては人格の尊嚴觀を把持し人類の共存共榮を體得せしむる。

四、學級及學校自治

學級及び學校の生活をして自治的に實踐せしめんとすることは、最近に於ける學級經營、學校經營上の一大要求である。

學級及び學校自治は學級及び學校内を實社會に於ける協同互助の自治團體の如く組織し、選舉によりて諸種の會合、修學旅行等について兒童生徒をして分擔處理せしめんとするものである。これによりて自治の精神を涵養し自己の社會に對する共同責任觀を培ひ、その協同意識による向上發展のために相互扶助的努力をなすの精神を養ひ、且つ自律的人格を陶冶し、自己の尊嚴性に自覺しその發展のために努力更生するに至り、且つ協同團結の力を涵養する等その價値大なるものである。

五、作業

小學校に於ける作業は一定の目的を達するための精神活動を要する作用である。

作業は心身の諸機能を發育せしめこれを實際的に練磨するものであるから有爲の人物を養成し、社會に遅れ傳統的に消極的・廢物的に傾ける精神を打破して努力發奮を促すものである。

又作業は協同互助、連帶責任等の觀念に自覺せしめ、相互扶助・一致團結の精神を涵養し且つその結果は團體生活の共同的幸福を増進せしむるものであるから、それらの實行に於て協同相扶の精神を以て指導すべきである。而して融和的作業の種目としては特に學校内外の美化作業・學級及學校園の作業・動物飼育・農業實習其他各校に於て夫々地方の實情に即して適切なる種目を擇ぶことが肝要である。

六、社會生活

社會は兒童が將來入るべきところであるのみならず、兒童は家庭にある間も學校にある間も絶へず社會の感化影響を受けつゝあるのである。換言すれば兒童自身に於て既に小さき社會生活を營みつゝあるといふことが出来るのであつて、將來の成人社會は、この時代に於て既にその萌芽を培ひ發展しつゝあり、これがやがて成人社會生活にまで連続するのである。この故を以て、兒童の社會的感化影響を考慮しその社會生活を訓練することは、將來の協同的社會生活を全うする上に最も重要なことである。

而してこれが社會的感化の兒童に及ぼす點を省るに、社會現象は極めて強大なる暗示力を持ち思考

第四章 融和教育に於ける訓練並に養護

力・批判力單純にして意志の發達未だ薄弱なる兒童は之が社會的影響に感染すること容易にして社會に存在する因襲的差別觀念の如きはこの時期に於て容易に兒童に傳播せられる。現今に於て成人の差別觀念はその凡てが兒童期に於て感染せるものにして、且つその差別は兒童の社會環境より受くることが最も大なるものである。

斯くの如く社會は單に教育的にのみ存在するものでなく、その感化刺戟は頗る強烈であるから、一般環境に於て考慮するは勿論、學校に於ける共同生活上の社會的訓練は融和教育上の基調として最も重視されねばならぬ。

この點に關し文部省訓令(第二十二號 兒童生徒ニ對スル校外生活指導ニ關スル件)に於て時代ノ急激ナル推移ニ伴ヒ社會的環境日ニ月ニ複雑多樣ヲ加ヘ其ノ間兒童生徒ノ心身ノ健全ナル發達ヲ妨グルガ如キ事象尠シトセズ隨ツテ之ガ爲ニ生ズル不良ナル影響ヲ防止シ且其ノ教育教化ニ資スベキ方策ヲ講ズルハ現下ニ於ケル緊切ノ要務ト謂フベシ 云々
とあるは、以上の點を指摘し強調せるものである。

而して融和的社會生活の訓練の實踐に於ては特に公衆道德の實踐、公共物に對する公正の態度の確立、人間尊嚴に對する生活態度の嚴守、因襲的差別觀打破等の生活態度の實踐等を留意強調すべきである。教育者はこれらの融和的訓練の實踐に當りては克く融和問題の真相を把握し、その顯現的事象

事件に對する實際的取扱を適切になすことが肝要である。

七、國民生活

小學校に於ては國民生活上の訓練に關する諸議式諸行事が少くない、融和問題が同胞相互の國民意識・國民的志操の缺如に因由するものなることに於て融和教育上協同一致忠誠愛國の國民生活上の訓練をなすことは小學校に於ける融和的訓練の最後の段階として最も重要なことである。

而して小學校に於ける國民的訓練の主要なるものは、諸議式並に其他の國家的諸行事にして、それは全校の教師及生徒が一堂一箇所に參集して舉行するものであるから團體的・國民的志操を涵養するに最も適切である。而してこれらの機會に於て 皇室並に御歴代天皇の御聖徳を奉戴し、皇室並に國體に對する尊嚴及國家に對する嚴肅なる態度並に忠君愛國の國民的徳性を涵養すべきである。而して國民は一視同仁の 聖旨に對しみな平等なる 陛下の赤子たることを自覺體現し、同胞親和以て君國のために報ゆべき實踐的訓練をなすことは大切のことである。

而して小學校に於ける國民的儀式並に行事は次の如くである。

神武天皇祭(四月三日)

天長節(四月二十九日)

靖國神社祭(四月三十日)

第一節 融和教育に於ける訓練